

仙石山仏教学論集  
第7号（平成26年）

Sengokuyama Journal  
of Buddhist Studies  
Vol. VII, 2014

『楞伽經』の文献学的研究  
——「羅婆那王勸請品」梵藏漢校訂テキスト（その1）——

奥村 元康

# 『楞伽經』の文献学的研究 ——「羅婆那王勸請品」梵藏漢校訂テキスト（その1）——

奥村元康

## はじめに

『楞伽經』の校訂テキストとして定評のある南條[1956]は本經及びこれに関する関連分野になくってはならない研究書であり、今日に於いても広く参照されている。然しながら時代の趨勢と共に当時においては参照しうることができなかったサンスクリット写本群が徐々に見られるようになってきている。そうであるならば先学の研究を可能な限り活かしつつ現在見られうる写本を比較・対照させた校訂テキストを提示することが本經を研究する上で必要であり、今後の研究に資するものになると思われる。

そこで本報告では南條[1956]に於いては参照しえなかったサンスクリット写本を追加した『楞伽經』の第一章「羅婆那王勸請品」のサンスクリット校訂テキストを提示する。その際にチベット訳及び漢訳の該当箇所をも示す<sup>1</sup>。内容として1.1.「テキストに関して」に於いては主要な先行研究の一部に基づいた概略を挙げ、1.2.「『楞伽經』の文化的背景」に於いては「羅婆那王勸請品」に関して『ラーマーヤナ』との関連性があることを窺い知ることができるので、とりわけ仏典等に於ける『ラーマーヤナ』関連に関して簡単に提示する。また1.3.では編集規定及び校訂テキストを取り上げる。校訂テキストに関しては梵藏漢を挙げるがこれに関しても全面的に先行研究に基づいて提示している。尚読者の便宜を図って訓読文も挙げているが、これに関しても全面的に先行研究に基づいたものとなっている<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 『仙石山仏教学論集』のこの号にて、その研究成果の前半を記載することにして、次号にてその後半を載せる予定である。

<sup>2</sup> この論考はあくまでも中間報告であり、不完全なものであることを断っておき

## 1.1. テキストに関して

### 1.1.1. 『楞伽經』に関して

#### 1.1.1.1. 『楞伽經』に関する概説

本中間報告では『楞伽經』〔*Laṅkāvatāra-sūtra*〕、「[仏陀の] ランカーへの降臨に関する大乘經典」、第一章「羅婆那王勸請品」(*Rāvaṇādhyeṣanā-parivarta*)を取り上げる。『楞伽經』は所謂インドの大乘仏教に於ける唯識説に基づいて構成された中期大乘經典群の一つであり、大乘仏教の諸思想が反映されて構成されたものであるが、この經典の形態的特徴としては一貫性があるというよりは独自の主題を持つ章が經典として成立させる為にある種の寄せ集めの様に配列されており、整合性の欠如という特徴も見て取れる。とりわけ『楞伽經』では瑜伽行派の学説である五事説〔『楞伽經』では五法<sup>3</sup>、三性<sup>4</sup>或いは八識〔識の種類を八種類に規定〕<sup>5</sup>、二無我<sup>6</sup>が説かれ

たい。

3 五つの真実 (pañca-dharma: 五法、五事) とは呼称 (nāman: 名)・特徴 (nimitta: 相)・観念 (vikalpa, saṃkalpa 分別、妄想)・正しく認識すること (samyag-jñāna: 正智)・実質 (tathatā: 真如、如如) のことと暫定的には考えられるが、詳細に定義されているものとしては漢訳に於ける『瑜伽師地論』『摂決摂分中菩薩地』(T. 30.694c21-704c12) 或いはチベット訳に於ける rnal 'byor spyod pa'i sa rnam par gtan la dbad pa bsdu ba (P5539, D4038) があり、これに関する研究論文等を総合的に勘考して纏め上げられた研究書として高橋 [2005] 34-49 がある。高橋 [2005] によれば、チベット訳に従っての五事の定義及び特徴を示しているのので、それを以下に提示すると定義として、1.「相」とは言語表現 (abhiḥāpa) のための語の基体となった vastu、2.「名」とは相に対する名称、3.「分別」とは三界において働く心・心所としての諸法、4.「真如」とは法無我として現れた聖者の智慧の活動領域であり、すべての言語表現 (abhiḥāpa) のための語との基体とならない vastu、5.「正智」とはまったく出世間的なものと世間的であり出世間的なものの二種としている。また特徴として、1.「相」とは分別の活動領域、2.「名」とは日常的言語活動の場、3.「分別」とは相を活動領域とするもの、4.「真如」とは正智の活動領域、5.「正智」とは真如を活動領域とするものである、としている。次に『楞伽經』に於ける五法説を示す。これに関しては同經の利那品(瞬間的な存在(性)に関する章)に見られるので、それに関する該当箇所を『瑜伽師地論』に於ける五事と『楞伽經』に於ける五法とを比較して提示しておきたい。

『瑜伽師地論』では「相」とは「言語表現 (abhiḥāra) のための語の基体となった vastu」と定義され、「分別の活動領域」として説かれているが、『楞伽經』に於いては六識に対して現れて、六境として知覚されるものの特殊性 (lakṣaṇa) が見られることであると説かれている。『瑜伽師地論』と同様に、その「相」に関して他のものと区別して別の想念 (saṃjñā) を起こして概念化することが「名」である。また「分別」も同論と同様であるが、『楞伽經』に於ける「分別」は（虚妄な分別と同義語として扱われているようである。また「真如」とは『瑜伽師地論』に於いては、「法無我として現れた聖者の智慧の活動領域であり、すべての言語表現 (abhiḥāra) のための語との基体とならない vastu」と定義されているのであるが、『楞伽經』に於いては「恒常的な主張と非恒常的な主張という二つの偏見を離れ、名と相との対象について識が生じないこと」と説かれている。また正智とは『瑜伽師地論』では「まったく出世間的なものと世間的であり出世間的なものの二種」に分けられており、前者は「それによって声聞・縁覚・諸菩薩がよく真如に達するもの」とされ、後者は「その出世間智に後得智の働きが加えられたもの」と説かれているのであるが、『楞伽經』では（虚妄な）分別を滅した自らの内面にある聖なる者としての理解 (svapratyātmarājñāna) に対応するものが「正智」と説かれている。

以上のように相・名・分別が（虚妄な）分別の世界（精神段階）を包摂する一方、真如・正智は（虚妄な）分別から離れた世界（精神段階）を展開していることが見られると思われる。また、これに関する研究論文としては菅沼晃、1971. “入楞伽經における五法説の研究”. 東洋学研究 (5), 203-221, 舟橋尚哉、1972. “五法と三性について”. 印度学仏教学研究 21- (1), 371-376, Jowita. Kramer. 2005. *Kategorien der Wirklichkeit im frühen Yogācāra: der Fünf-vastu-Abschnitt in der Vinīśayasamgrahaṇī der Yogācārabhūmi* (Contributions to Tibetan studies/edited by David P. Jackson Vol. 4). Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag 参照。

4 [三つの世間に於ける] 本質 (svabhāva: 自性、三性) とは誤って想定された本質 (parikalpita-svabhāva: 遍計所執性)・相互に依存する本質 (paratantra-svabhāva: 依他起性)・完全な本質 (pariṇiṣpanna-svabhāva: 円成実性) のことと想定され、五つの真実〔五法〕との関連性がある。實叉難陀訳では「自性」とだけ記されている。またそこで述べられている偈頌は南條 [1956] 127, 14-133, 1 の三性に関する教説、『中辺分別論』真実品中では相と分別と名とが二つに包摂されていて、正智と真如とが一つに包摂されている、といわれているだけで相と分別と名とが遍計所執性と依他起性にとそれぞれ対応した包摂関係が示されていない。三性に関しては南條 [1956] 127, 14-133, 1 302, 10-313, 8 等に散見され、また相と分別と名とに関して南條 [1956] に於ける該当箇所は三箇所を挙げられるが先ず、第二章三万六千の全ての存在要素の集大成の章 (Ṣaṭtriṃśatsāhasra-sarvadharmasamuccaya-parivartaḥ: 集一切佛法品、集一切法品) 南條 [1956] 68, 3-4 の 134 偈「相と名と分

別とは二つ（遍計と依他と）の自性の相であり、正智と真如は円成実の相である」、6章瞬間的な存在（性）に関する章（Kṣaṇikaparivartah: 刹那品）南條 [1956] 224, 4-229, 9の全般及び6偈「名と相と分別とは二つ（遍計と依他と）の自性の相である。正智と真如とは円成の相である」（六章 134 偈の繰り返し）、更に第十章偈頌の章（Sagāthakam: 総品、偈頌品）南條 [1956] 285, 7-9「聖なる行境は無相・不可思惟にして生ずる。名と相と分別とは二つ（遍計と依他と）の自性の相であり、正智と真如とは円成実性の相である」がある。この内、『中辺分別論』と同様の語順で挙げられているものはサンスクリットテキストでは確認されないように思われる。また『中辺分別論』を構成する偈頌に対する註釈では相と分別とを依他起性に包摂し、名を遍計所執性に包摂しているが『楞伽經』の場合は第6章の刹那品南條 [1956] 227, 9-17で定義されていて名と相とを遍計所執性に包摂しているので両者の偈頌からは明確な違いを確認できないが『中辺分別論』を構成する偈頌に対する註釈との違いは少なくとも確認できる。『瑜伽師地論』『摂決摂分中菩薩地』（T. 30. 704c16-710c22）に於いては名と相と分別と正智とが依他起性に包摂されていて、遍計所執性に包摂されているものは存在していない、と述べられている。この『瑜伽師地論』の学説は『顕揚聖教論』（T. 31.507a9-511c19）・『三無性論』（T. 31. 867b4-873a17）・『仏性論』（T. 31.794a7-795c21）等にも見られる、とされる。これに関しては、高崎 [2006] 260-266 参照。

5 説一切有部の最も体系化された「五位七十五法」と異なり、瑜伽行派では「五位百法」を体系化されたものとするが、一切法の内、有為法〔心法・心所法・色法・心不相応行法〕と無為法とに分類される中、有為法の「心法」に六識の他にマナ識とアーヤ識とが付加されて八識となる。前者の場合は無意識的な識の存在を認めないのに対して後者の場合は潜在的な意識、つまり無意識を認め、それを全ての現象の基幹であると見做されたアーヤ識に依存してそれを自身の認識対象とするマナ識の存在をも設定するに至る。明確に八識説の前提を窺い知ることが出来る。高崎 [2009] 385-407に於いては『楞伽經』が八識説に基づいていることを前提としているが、マナス（manas 意）〔染汚意（kliṣṭa-manas）、第七末那識（玄奘訳）〕に関してはアーヤ識の様に明確に説明されていないことを特徴としている、とする。さらに『勝鬘經』が「自性清淨心と刹那滅の心という二種が対立しつつ、しかも一つの心であるという問題を提起しているが、それに先立って如来蔵＝自性清淨心が刹那滅でないから輪廻の所依として苦を感受するが、六識及び「識なるもの」（rnam par shes pa gang lags pa、心法智、所知）という七は刹那滅で輪廻の所依たりえないと言っている」として、それを受けて『楞伽經』が「アーヤ識を基本とする唯識説の心意識論を導入した」際に、「識なるもの」をマナス（＝意界）としたのではないかと推察されている。またサンスクリット原文からのマナス（manas）の用例も挙げられている。また第八識を如来蔵として、前七識を客塵として、八識の在り方を解釈する法蔵に関する論考に関しては小林實玄、1961.

ること、アーラヤ識と如来蔵とが同一視<sup>7</sup>され定義されていること<sup>8</sup>、ヨ一

“八識に関する法蔵の解釈”. 仏教学研究 (18, 19). 龍谷大学仏教学会. 38-55 を参照。

6 南條 [1956] 68, 8-70, 8 では人無我と法無我とが僅かではあるが述べられている。

『楞伽經』では器世間と身とは自らの心の現われ (svacittadr̥ṣya) であり、無始時からの観念的な領域の影響 (anādhikāla-prapñca-viṣaya-vāsanā) にともなわれて輪廻の輪の中に種々の形態を保っているのを見ることである、このように知ることが「人無我を知ること」といわれる。また「法無我を知ること」とは蘊・処・界は虚妄な（分別）の相を自性とするものであると覚知することである。即ち蘊・処・界は我を離れた、ただ蘊が集まったものであり〔それ自体にそのものを成立させる〕原因は欠如しているが、凡夫たちによって虚妄に分別されて我ありとされているのであり、『菩薩摩訶薩は「すべての法は心・意・識・五法・（三）自性を離れたものである」と知れば、法無我到熟達したものとなる』のである、と記されている。また高崎 [2006] 267-275, 菅沼 [1971] 220, 安井広済. 1974. “入楞伽經にあらわれる人法二無我の教説について”. 仏教学セミナー 19, 11-25. 参照。

7 語義的な解釈として筆者は tathā 或いは tathatā が「そのように」或いは「そのもの」として使用されているうちに「全ての現象を示す」物或いは事の意味合いが強調されて「全ての現象が内在する」物或いは事、真如或いは如来蔵が〔bīja を貯蔵する〕アーラヤ識と同一視されるようになったのではないかと想定している。

8 これに関しては例えば南條 [1956] 220, 9-221, 1; 221, 12-13; 222, 6-7; 222, 14-17; 223, 2-3; 223, 6-13; 223, 14; 235, 6-9; 235, 15-236, 1; 236, 4-7 等参照。またここでは『楞伽經』に於ける如来蔵思想関係の諸論考で明らかになった主要な点を挙げてみたい。勝又 [1961] 624-637 では『楞伽經』のサンスクリット原文から如来蔵と阿羅耶識を無関係に説いている経文及び如来蔵と阿羅耶識とを同一視する経文を抄出することによって『楞伽經』では唯識系諸論書と如来蔵系諸経論との影響を受けて如来蔵と阿羅耶識との両者の調和が見られる、としている。また護法が『楞伽經』及び『厚嚴經』（『密嚴經』）を唯識説の教証としていることを提示して『大乘密嚴經』は『楞伽經』の影響を受けて成立したものと見做している。『楞伽經』に見られる五法・三性・八識・二無我や阿羅耶識と七識との関係を大海と波浪との喩で示す点や阿羅耶識と如来蔵とを同一視する点等を挙げて『大乘密嚴經』では従来の唯識系の経論における八識説を継承する一方、阿羅耶識を有漏識のみと見ることなく本来清浄の識と見ること (T. 16.737c23-28) や阿羅耶識を本来の能蔵・所蔵・所執蔵とされていることや持種・所熏の識であり、一切種子識とされていることの意味が失われ円満清浄の識と見ること (T16. 738a1-4) に阿羅耶識縁起の思想構造が失われ、如来蔵の思想構造が適用されることによって思想的な発展があると見て

ガを実修する必然性を説示すること、教説の文字に捉われることの否定<sup>9</sup>等が概要として挙げられるが、その他『楞伽經』の思想が『大乘起信論』等にも反映され、更に中国・日本の禅宗にも影響を及ぼしたことは文化的・思想史的に見ても考察されるべきであると思われる<sup>10</sup>。

いる。

また小川 [1961] 213-216 では如来蔵説を I. 如来蔵を説く經典群（『如来蔵經』、『不増不減經』等）、II. I の經典群を整理組織した如来蔵所説論群（『仏性論』、『宝性論』）、III. 如来蔵思想と阿梨耶識思想とを結合した經典群（『楞伽經』、『大乘起信論』等）とに分類して、更に『楞伽經』には (A) I・II に属する如来蔵思想と (B) III の如来蔵阿梨耶識思想とが説かれていて、更に (B) の中に (a) 如来蔵と阿梨耶識とは同一であるという思想と (b) 別であるという思想が説かれていることを明らかにしている。

また菅沼 [1974] 90-97 では『楞伽經』に於いて如何なる動機から如来蔵とアーラヤ識とが結び付けられるのか、ということに焦点を当て『如来蔵經』『不増不減經』『勝鬘經』等の如来蔵説を持つ中期大乘經典群や如来蔵が空の思想に及んで必然的な発展形態となっている『宝性論』『仏性論』等と『楞伽經』とを比較して、また南條 [1956] 78, 5-79, 9 を提示してアートマンと如来蔵とを同一視する見解に対する批判に基づいて『楞伽經』の如来蔵観を三点示している。それは 1. 『宝性論』や『仏性論』と同様に如来蔵が空の思想の発展上に捉えられているということ、2. 般若と善巧方便とによって空・無我を如来蔵の教えとして凡夫たちの無我についてのおそれをなくす為と説き示すという点に、不立文字的性格がみられること、3. アートマン的如来蔵観の批判によつての如来蔵思想の展開があるということ、である。また、高崎 [1996] 170-175 では『楞伽經』が如来蔵に言及する三箇所を提示して、その内『楞伽經』に独自なものとして南條 [1956] 220, 1-239, 10 「刹那品」に於けるアーラヤ識と如来蔵との同一視を例示している。また「刹那品」の思想が『勝鬘經』で説かれる「如来蔵は善・不善の因」という発展的な解釈であるとして、そこに於けるアーラヤ識の特徴に関しては「集一切法品」の内 [南條 [1956] 43, 14-49, 5] の八識中の「アーラヤ識の海」と「七転識の波」との緊密な関係性で例示されているとしている。また善・不善の因であり、本性清浄・不滅である如来蔵は環境世界としては虚妄分別の習気に薫習されてアーラヤ識と名づけられる、としている。またアーラヤ識に関しての近年の諸研究が要領よく纏められているものに『唯識と瑜伽行』（高崎 2012）182-219 があるのでそちらを参照。

<sup>9</sup> これに関しては例えば南條 [1956] 46, 2-49, 5; 77, 9-12; 144, 6-8; 196, 4-197, 1 等、土田 [1983] 380-386, 高崎 [2006] 362-371 参照。

<sup>10</sup> 高崎 [2009] 3-353 では特に『楞伽經』で説かれるところの「如来蔵とアーラ

## 1.1.1.2. 『楞伽經』の構成

『楞伽經』の構成を南條 [1956] に於けるサンスクリット原文の表題と実叉難陀 (Śikṣānanda) 訳に於けるそれとともに以下に示しておく<sup>11</sup>。

(章名)

---

や識との同一視」という仕組みが『大乘起信論』に於いて想定されていることを知ることができる。

鈴木 [1968] 476-487 では『景德伝燈録』や『統高僧伝』等の史料に基づいて禪の祖師達摩禪師が四卷楞伽を慧可に授ける、という初期の禪の形成過程から南宗禪の確立に寄与したとされる所謂六祖慧能より前の『楞伽經』の影響に関して概説をしている。石井 [2001] 235-255 では初期禪宗、即ち達摩から馬祖に至るまで『楞伽經』の影響があり達摩の教化が同經典に基づいていたことは南宗と北宗に於ける共通事項としており、また初期禪宗の如来一字不説に関しても考察している。また「達摩の碑文」やそれに関する文献、二入四行説と『楞伽經』の「自心現境界」との関連等によって初期禪宗に於いて『楞伽經』が重視されていることを述べている。伊吹 [2004] 15-19, 173-186 では禪の形成過程から現在に至るまでの禪に関する中国・日本の通史が述べられている。その中で日本に於いても禪宗に於ける『楞伽經』関係のものが流入したとしている。とりわけ奈良時代に於ける禪の流入で禪宗に属する人物の来日は道瑤以外知られていないとしているが、遣唐使の帰還によって当時中国で盛んであった禪宗の著作等が齎されていることが述べられており、『楞伽經疏』五卷〔菩提達摩撰〕、『楞伽經科文』（『楞伽經開題文』）二卷〔菩提達摩撰〕等を挙げている〔奈良朝一切経疏目録に記されているようである〕。また鎌倉時代後期宋朝禪の定着が見られるとしており代表的な禪僧達を挙げているが東山湛照の法嗣で一山一寧らにも師事した虎関師錬の日本で最初の編年の僧伝である『元亨釈書』や『楞伽經』の注釈書である『仏語心論』等を挙げて日本に於ける禪の影響を紹介している。また菩提達磨や恵可の系統に関する史実や或いは天台智顗の『法華玄義』の南三北七に関する北地禪師の二種（有相大乘と無相大乘と）の大乘教の考察、それらを通して楞伽宗を考察している論考に八木 [1971] 50-65 がある。

<sup>11</sup> 高崎 [2006] 395-409 では求那跋陀羅訳・菩提流支訳・実叉難陀訳・サンスクリット原文の表題を対照させていて、また『仏語心論』・諸漢訳・チベット訳・南條 [1956] サンスクリット原文・サンスクリット原文の偈の番号・サンスクリット原文の偈頌品の対照等・D. T. Suzuki [1956] の英訳・安井 [1976] の和訳の頁の該当箇所の分段が求那跋陀羅訳に対する註釈書である『仏語心論』に基づいて掲載されているのでそちらを参照。また久保田 [1984] 67-96 では散文と重頌の関係から『楞伽經』の内部構造に関して考察しており高崎 [2006] 395-409 の分段を再考察され、それに基づいて原型と成立過程を論じている。



1. *Rāvaṇādhyeṣanā-parivarta* 羅婆那王勸請品（ラーヴァナ〔による〕世尊の勸請に関する章）
2. *Ṣaṭṭriṃśatsāhasrasarvadharmasamuccaya-parivarta* 集一切法品<sup>12</sup>（三万六千の全ての存在要素の集大成の章）
3. *Anityatā-parivarta* 無常品<sup>13</sup>（無常に関する章）
4. *Abhisamaya-parivarta* 現証品<sup>14</sup>（〔覺りに至る〕現觀に関する章）
5. *Tathāgatānityānityaprasaṅga-parivarta* 如来常無常品<sup>15</sup>（如来の常と無常に関する章）
6. *Kṣaṇika-parivarta* 刹那品<sup>16</sup>（瞬間的な存在（性）に関する章）
7. *Nairmāṇika-parivarta* 变化品<sup>17</sup>（如来が姿を変えて現れることに関する章）
8. *Māṃsabhakṣaṇa-parivarta* 〔断〕食肉品<sup>18</sup>（肉食に関する章）
9. *Dhāraṇī-parivarta* 陀羅尼品（陀羅尼の章）
10. *Sāgathaka* 偈頌品（偈頌の章）

## 1.1.2. 「羅婆那王勸請品」に関して

### 1.1.2.1. 『楞伽經』に於ける「羅婆那王勸請品」の位置に関して<sup>19</sup>

『楞伽經』は原文のサンスクリットテキスト、三種類の漢訳、二種類の

<sup>12</sup> 菅沼晃. 1977. “入楞伽經三万六千一切法集品訳註（1）”. 東洋学論叢 2, 91-193. 菅沼晃. 1978. “入楞伽經三万六千一切法集品訳註”. 東洋学研究 12, 123-130. 菅沼晃. 1978. “入楞伽經三万六千一切法集品訳註（3）”. 東洋学論叢 3, 87-172. 参照。

<sup>13</sup> 安井広済. “入楞伽經「無常品」の原典研究”. 大谷大学研究年報 20, 65-133, 註 14 参照。

<sup>14</sup> 菅沼晃. 1981. “入楞伽經無常性品・現觀品・如来常無常品・变化品訳註”. 東洋学論叢 6, 1-134. 参照。

<sup>15</sup> 菅沼晃. 1967. “入楞伽經如来常無常品の註釈的研究”. 東洋学研究 2, 39-47, 註 14 参照。

<sup>16</sup> 菅沼晃. 1969. “入楞伽經刹那品の原典研究”. 東洋大学紀要 23, 39-57, J. Takasaki [1981] 1-74 参照。

<sup>17</sup> 註 14 参照。

<sup>18</sup> L. Schmithausen [2007] 86-107 参照。

<sup>19</sup> 舟橋 [1971] では世親の年代論〔ここでは諸説述べられているが、320-400 或

チベット訳が現存する。年代の想定が可能である漢訳の訳出年代に関しては求那跋陀羅 (Gunabhadra) 訳が 443 年、菩提流支 (Bodhiruci) 訳が 513 年、実叉難陀 (Śikṣānanda) 訳が 700-704 年に翻訳されている。この三種類の漢訳の内、求那跋陀羅訳では 1.1.1.2 『楞伽經』の構成で示した 1-10 までをそのままの形で漢訳しておらず 1、9、10 に関しては翻訳していない。然しながら翻訳されていないからと言って直ちにそれが後世に付加されたとも断定できない。或いは何らかの諸事情によって見られなかった、翻訳されえなかった、存在そのものを認識していなかった等あくまでも推

---

いは 400-480 を想定] や世親造とされる『釈軌論』に「偈頌品」の引用、またそれは「無常品」にも見いだされること、それらが [443 年訳出の] 求那跋陀羅訳『楞伽經』にみられること、菩提流支訳に見られる引用經典等を勘考して「羅婆那王勸請品」や「偈頌品」等が付加される前の原型の成立は世親以前であると想定している。『楞伽經』の成立に関しては菩提流支訳に見られる引用經典等を考慮して「楞伽經の成立はほぼ 350-400 頃に落着くのではないかと思われる」としている。また横山 [2002] 79-81 では「…それは一時に成立したのではなく、原型は 400 年頃に作られ、後に付加され 500 年頃に原形の梵本が成立したと推察されている」としている。高崎 [2006] 55-62 では「仏教史に於ける『楞伽經』の位置を推定して『解深密經』『勝鬘經』その他かなりの論典ばりの中期經典類の驥尾に付する經典（四世紀末成立）と考えておくのが最も妥当な解釈ではなかろうかと思われる」としている。また同箇所では『楞伽經』中に引用されている經典である『象腋經』・『大雲經』・『央掘魔羅經』・『涅槃經』・『勝鬘經』が「斷食肉品」や「利那品」にて確認されていることや「偈頌品」と『釈軌論』とに同等の韻文があること、『唯識三十頌』20、28 頌と同等のものが同經に所謂釈尊の所説として述べられていること等が書かれている。また真諦の訳出とされる『大乘起信論』が『勝鬘經』・『楞伽經』の説の継承、展開として成立したとすることから、彼の伝えた唯識説（アーラヤ識と如来藏とを同一視することや九識説をたてること）に類似していることを指摘している。また常盤 [1992] 41 でも言及されている。東晉の中國僧法顯がランカーを後にしたのは義熙七年（411）とされ、その中に『楞伽經』は含まれていないとして、その後求那跋陀羅が中國の建康に着いたのが劉宋の元嘉 12 年（435）であり『楞伽阿跋多羅宝經』を訳出したのは元嘉 20 年（443）としている。求那跋陀羅訳の原型は 411-435 の間として經典編纂者はランカーの都、アヌラダプラの無畏山寺の修行者としている。そこに「羅婆那王勸請品」、「陀羅尼品」、「偈頌品」が付加されたのは求那跋陀羅がランカーを後にして中國に着いた 435 から菩提流支が中國へきて漢訳する魏の延昌 2 年（513）までの間として推定している。

測の域を越えられないが、1では2以降の概念が設定されていることや、10では2や3等の偈頌を扱っていること等の相互的に緊密であることまでは必ずしも言えないが、つまり1、9、10が付加されていたとしても、求那跋陀羅訳だけであったとしても、経典としての在り方に耐えうるものであると思われる<sup>20</sup>。このことは『楞伽經』が教義として空思想・唯識思想・如来蔵思想・アーラヤ識説・輪廻・涅槃・禪定・過去仏・外道に関すること等の仏教思想が見受けられるものの、各章に於いて特定の主題が明確に述べられているというよりは仏教思想の説明・解釈を臭わせるものであるという印象を受けるので、2-8の求那跋陀羅訳だけであっても可能であると思われる。また8に関しては求那跋陀羅訳にもあるがこれに関して

---

<sup>20</sup> 常盤 [1994] 1 の註 2 では「第一章には、第二章以下に現れる重要な概念の多くが予備的に現れる。…ラーヴァナは、第二章以下には全く登場しない。しかしこの第一章によって初めて、この経が『ランカーに入る』というテーマの下に展開する事情が経典編集者によって紹介され明らかにされた事になる。最初の漢訳者グナバドゥラはこの章の存在を知らなかったと思われ、第二の漢訳でボーディルチが初めて紹介する訳であるが、第二章以下の存在を前提にすると同時にそれらの存在理由を示すこの第一章は、この経典の序章として、同じ編集者群によって添えられたものと考えられる」として、求那跋陀羅の時代にはすでに『羅婆那王勸請品』等は成立していたが、求那跋陀羅がランカーを去って中国へ着いた後から菩提流支が中国に来て漢訳するまでの間に付加されたとする立場をとっている。また、常盤 [1992] 23-47 では既に序章の歴史的意義が『ディーパヴァンサ』や『マハーヴァンサ』等の文献によって文化的・歴史的背景から考察が為されているが、特に原住民に例えていると思われるランカーの主、ラーヴァナの必然的な設定なくしてはこの経典の本質を理解できないものとする、としている。常盤 [1992] 39 によれば南條 [1956] 245, 17-246, 11 の主旨「ラクシャサでさえも、如来たちの教えの核心を聞いて羅刹の本性を捨て、少なからぬ慈悲心を抱いて肉食を止めるものである。まして真実を求める人間 (dharmakāmājanāḥ) においては言うまでもない…」という第八章「断食肉品」を取り上げて、それをこの品の中心と考えた『楞伽經』の編纂者が経典の意味を明確にする為に『羅婆那王勸請品』を付加させた、としている。また「序章「ラーヴァナ勸請」が、第八章「肉を食うこと」と深く呼応しながら、『ディーパヴァンサ』に示される上座部の見解を批判しつつ、大乘経『ランカーに入る』の基本の考えを展開するための導入部として重要な役割をはたしていることを知るのである」と述べている。また『マハーバーラタ』第1章に見られるサウダーサ王の話が、『楞伽經』8章の基本的な考え方と見ている。

は1、9、10と同様に付加されている可能性が見受けられる。この章に関しては輪廻に関する問題に付随するともいえるが、他律的な規範の要素が見られるために附篇として別の観点から議論が付加されたとも考えられる。

### 1.1.2.2. 「羅婆那王勸請品」の構成に関して

「羅婆那王勸請品」の構成は明確に決められている訳ではないが、それを何節かに分類するとすれば、それは意味を考慮して翻訳者自身が分類する必要がある。またその節の内容を理解しやすくする為にその節に題を付しておきたい。以下に筆者の分類を示しておく<sup>21</sup>。

1. 帰敬序
2. ラーヴァナによる世尊の勸請
3. ラーヴァナの世尊に対する吟唱及び世尊のラーヴァナに対する允可
4. ラーヴァナによる真実の見極め
5. ラーヴァナによる不生の確信及び世尊の呵呵大笑
6. 世尊のラーヴァナに対する許諾
7. 在り方と否定的な在り方とに関する教説
8. 観念化の否定

### 1.1.2.3. 写本及び校訂テキストに関して

校訂テキストを想定するに当たり参照したサンスクリット語写本等<sup>22</sup>を以下に提示する<sup>23</sup>。

1. A: MS in the Royal Asiatic Society, London, Hodgson Sanskrit Mss. No. 5, Newari (script), Paper, size not recorded, 157 (leaves), 6 (lines,

<sup>21</sup> これに関して安井 [1976] 2-19、常盤 [1994] 2-19 参照。

<sup>22</sup> 井ノ口泰淳 責任編集, [1990], 梵文佛典写本聚英 (龍谷大学善本叢書/龍谷大学佛教文化研究所編 9), 京都: 法藏館にはネパール写本の『楞伽經』の一つが収集されている。また同経典に関して、限られてはいるが参考文献一覧も挙げてある。

<sup>23</sup> 略号 A から T までは南條 [1923] xvii、略号 T1 から Pa2 までは羽田野 [1993] Abbreviations を参照したものであり、先行研究としてサンスクリット語校訂テキストに反映させてある。また今回 NG1 に関しては全面的に参照することができた。

- partially 7 or 8 lines), no date.
2. C: MS in the University Library, Cambridge (Bendall Catalogue), No. 915, Newari (script), Paper,  $14 \times 4\frac{1}{2}$  (inch), 160 (leaves), 8 (lines), dated Saṃvat 916 ( $\doteq$  A. D. 1796).
- [ · I: Two parts (up to 144 of Nj) published by Sarat Chandra Das and Satis Chandra Acharya Vidyabhusana, at Darjeeling, India (1900, using in Nj edition).]
3. K: Matsunami (Catalogue), No. 331, Newari (script), Paper,  $14\frac{1}{5} \times 3\frac{1}{5}$  (inch), 145 (leaves), 6 (lines), dated Saṃvat 857 ( $\doteq$  A. D. 1737). (Originally collected by E. Kawaguchi)
- [ · R: Some extracts found in Rajendralala Mitra's "The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal"; 114.] (using in Nj's edition)
4. T: Matsunami (Catalogue), No. 333, Siddhānta (kuṭīla character?), Palm-leaf,  $23 \times 2\frac{1}{4}$  (inch), 92 (leaves), 6 (lines), no date. (Originally collected by J. Takakusu)
5. T1: Matsunami (Catalogue), No. 328, Newari (script), Paper,  $14\frac{1}{4} \times 3\frac{1}{4}$  (inch), 217 (leaves), 5 (lines), no date. (Originally brought by Kawaguchi)
6. T2: Matsunami (Catalogue), No. 329, Paper, Newari (script),  $14\frac{3}{4} \times 4\frac{1}{2}$  (inch), 141 (leaves), 7 (lines), no date. (Originally brought by Kawaguchi)
7. T3: Matsunami (Catalogue), No. 332, Paper, Newari (script),  $14 \times 3\frac{1}{4}$  (inch), 172 (leaves), 6 (lines), no date. (Originally collected by J. Takakusu)
8. T4: Matsunami (Catalogue), No. 330, Paper, Newari (script),  $14\frac{1}{2} \times 3\frac{1}{2}$  (inch), 115 (leaves), 6-7 (lines), modern. (Originally brought by Kawaguchi)
9. Pa1: Bibliothèque Nationale département des manuscrits, Catalogue du Fonds Sanscrit par J. Filliozat, no. 95.
10. Pa2: Bibliothèque Nationale département des manuscrits, Catalogue du

Fonds Sanscrit par J. Filliozat, no. 96.

11. NG1: Kaiser Library No. 119, Paper, Newari (script), 35.5×9.5, 150 (leaves), 6 (lines, up to folio 68), 7 (lines folio 69 onward), Reel No. C13/7 (photographed 2.12.1975). (Nepal-German Manuscript Preservation Project, Kathmandu)

・上記の写本や先行研究等に基づいて系統図を示すと以下のようになる<sup>24</sup>。

[I] T . . . . T3 — — — — Pa2

[II] Pa1

[III] T1 . . . . T4 . . . . NG1

[IV] K . . . . T2

[V] C . . . . A

サンスクリット語校訂テキストに関しては以下のものが挙げられる。

1. S. C. Das and S. C. Acharya Vidyābhūṣaṇa eds., *Laṅkāvatāra-sūtra*. (Darjeeling: 1900)<sup>25</sup>.
2. Nj: 南條文雄校訂『梵文入楞伽經』（京都：大谷大学，1923; 第二版 1956）<sup>26</sup>.
3. 若井信玄訳．1931．“世尊が錫蘭の首府ランカーを訪問し給ふ書”．大正大学々報第 11 輯．東京：大正大学出版部．

<sup>24</sup> 暫定的にはあるが [I] ～ [V] に分類できると考えられる。然しながら『楞伽經』の全ての章を網羅している訳ではない。また全ての写本関連の資料に関して限なく精査している訳ではない。この分類は校訂テキストを作成するにあたっての過程を主に J. Takasaki [1981] (1)–(4)、1–3 の先行研究に依っている。尚そこでは使用されていなかった Pa1、Pa2 を今回は取り入れることが出来た。尚 . . . と — 一重下線は影響していると思われるもの、— 実線と — 太い下線に関してはより影響力が強いと思われるものを示している。また Pa1 に関しては T3、Pa2、T4、NG1 の影響を多方向から受けていると思われたので上記の様に図示している。

<sup>25</sup> 部分的に校訂されたものであり南條 [1956] 1–144, 5 に相当する。

<sup>26</sup> この校訂テキストは A から T、求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』、菩提流支訳『入楞伽經』、実叉難陀訳『大乘入楞伽經』の三種類の漢訳及びチベット訳の解釈を総合的に勘考している。尚このテキストは『楞伽經』全章に及ぶ校訂テキストである。

4. P. L. Vaidya ed., *Saddharmalaṅkāvatārasūtram* (Darbhanga: Mithila Institute, 1963)<sup>27</sup>.
5. Jikido Takasaki ed., *A Revised Edition of the Laṅkāvatāra-Sūtra, Kṣaṇika-Parivarta* (Tokyo, 1981)<sup>28</sup>.
6. Yadunātha Prasād Dubey ed., *The Saddharma Laṅkāvatārasūtra: vaipulya sūtra* (Varanasi: Bauddha Bharati, 2006)<sup>29</sup>.

校訂テキストを想定するに当たり参照したチベット語刊本を以下に提示する<sup>30</sup>。

1. C: Co-ne edition of the tibetan versions of the Sūtra and the Vṛtti in the Library of Congress. (1721-1731)
2. D: sDe-dge edition of the texts in the Tohoku University Library, Ca56a1-191b7, No. 107<sup>31</sup>. (1733)

<sup>27</sup> 南條 [1956] の誤植等に訂正を施したものであり、他の写本に基づいて校訂されたものではないが、『楞伽經』全章に及ぶテキストである。

<sup>28</sup> Kṣaṇika-parivarta (刹那品) に関する校訂テキストであり、17 写本、南條 [1956]、P. L. Vaidya [1963]、チベット訳の解釈及び求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』、菩提流支訳『入楞伽經』、実叉難陀訳『大乘入楞伽經』の三種類の漢訳を総合的に勘考している。

また、J. Takasaki [1981] 2 ではネパール系写本を 4 系統に分類して示されている。

(A) T1('T'=M. C. #333) -T6 (#332) -N11

(B) C8('C') -R10('A') -N12

(C) T2('K'=M. C. #331) …T4…N13

(D) T3-T5-C9-N14-N16-N17

略号：T=Tokyo Univ.; M. C.=Matsunami Catalogue; N=Nepal-German MS Preservation; C=Cambridge Univ.; R=Royal Asiatic Society.

<sup>29</sup> このテキストは『楞伽經』全章に及ぶテキストである。

<sup>30</sup> 尚この内、C、D、N、P、Pc、Bm に関しては羽田野 [1993] Abbreviations の校訂をチベット訳校訂テキストに反映している。また K、L、Y、Z に関しては中国藏学研究中心“大藏經”対勘局編。2008。中华大藏经甘珠尔（対勘本）（藏文，49 卷）。北京：中国藏学出版社出版。49, 140 を参照。

<sup>31</sup> 北京版 No. 775 (Ngu 60b7-208b2; vol. 29, 26-85) では翻訳者に言及がなされて

- 〔= The Tibetan Tripitaka = 西藏大藏經. 1991. Taipei, 台北: SMC Publishing, 南天書局.〕
3. K: Khu-re edition 〔= Urga edition, Lokesh Chandra, ed. 1990-1994. New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan.〕
4. L: Li-thang edition 〔理（= 裏）塘版, 1608-1621〕
5. N: sNar-thang edition of the Vṛtti in the Tokyo University Library and two versions of the Sūtra in Sō-jiji（総持寺）〔= Lokesh Chandra, ed. 1998-2000. New Delhi: International Academy of Indian Culture.〕 (1730-1732)
6. P: Peking edition, Ngu60b7-208b2; Vol. 29, 26-85, Catalogue & Indexed. D. T. Suzuki. No. 775.  
〔西藏大藏經研究會編. 1955-1961. 東京: 西藏大藏經研究會.〕〔= 康熙版, 1684-1692〕
7. Pc: Pelliot's collection (M, Lalou: Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale, 1, No. 106)
8. Bm: Tibetan version of the Sūtra in the British Museum. (cf. Index der Abteilung mDo des Handschriftlichen Kanjur im Britischen Museum; von L. D. Bernett. Asia Major Vol. 7, 1931)
9. TM: Stog Palace Manuscript (1700-1750) of the Tibetan Kanjur, Published by C. Namgyal Tarusergar Leh, Ladakh, 1980. (Vol. 76, No. 107, 305-709)
10. Y: gYung-lo edition 〔永樂版, 1410〕
11. Z: Zhol edition 〔夏魯版〕

---

いないが、デルゲ版の『西藏大藏經総目録』[1970] 25によれば、翻訳者が 'Gos-Chos grub 法成とされており、漢訳からのチベット訳が為されたものとされている。これに対して高崎 [2009] 360-361 に於いて、ナルタン版・デルゲ版をも漢訳からチベット訳されたものとして見なされていることに関してナルタン版の伝承に誤りがあったことを推定している。また上山 [1990] 112-117 では北京版 No. 775（デルゲ版では No. 107）をサンスクリット原文からのチベット訳としている。註 39 参照。



[I] · · · Tshal pa (東系統 1347-1349) · · · Y (1410) · · · P (1684-1692)  
· · · · K (1908-1910)  
· · · Z · · · · · N (1730-1732)  
· · · · · D (1733)  
· · · L (1608-1621) · · · C (1721-1731)  
[II] · · · Them spangs ma (西系統 1431) · · · · · TM (1700-1750)  
· · · Pc  
· · · Bm

1. 金：金藏廣勝寺本  
2. 石：房山石經〔中国佛教協會，中国佛教圖書館文物館編，2000，房山石經（訂金

尚、北京図書館蔵敦煌写経及びスタイン将来敦煌文書漢訳文献に関しては羽田野「1993」 Abbreviations の校訂をチベット訳校訂テキストに反映している。

刻經 10). 北京：華夏出版社.]

3. 資：資福藏

4. 磧：磧砂藏〔易行 yixing 編. 2005. 磧砂大藏經 (Vol. 30-31). 北京：綫裝書局.〕

〔≡・宋（本）：南宋思溪版〕

5. 普：普寧藏〔＝・元（本）〕

6. 南：永樂南藏

7. 徑：徑山藏〔≡・明（本）：嘉興藏〕

8. 清：清藏〔＝新文豐出版股份有限公司編. 1991. 乾隆大藏經（新編縮本, Vol. 35). 臺北：新文化印書館有限公司.〕

9. 麗：高麗藏（再彫版）〔1959. 高麗大藏經（入楞伽經：外五十部, Vol. 10). ソウル：東國大學校.〕

10. 宮：宮内省図書寮書陵部本〔旧宋本（東禪寺版＋開元寺版）〕<sup>35</sup>

11. 大：大正新脩大藏經<sup>36</sup>

12. 金剛：金剛寺一切經<sup>37</sup>

13. 北京図書館蔵敦煌写經：実叉難陀（七卷本）；イ：No. 339、ロ：No. 340、ハ：No. 341、ニ：No. 342、ヘ：No. 344、ラ：No. 360

14. スタイン将来敦煌文書漢訳文献実叉難陀（七卷本）；c: No. 3945、s: No. 1074、t: No. 2920. 菩提流支訳（十卷本）；A: No. 937

・上記の大藏經等や先行研究等に基づいて系統図を示すと以下のように

<sup>35</sup> 『大正新脩大藏經』の脚註を参照している。

<sup>36</sup> 大藏經に関しては、蔡運辰編. 1983. 二十五種藏經目錄對照考釋. 臺北：新文豐出版. 75, 76. によれば諸漢訳が目錄としては全て揃っていることが確認できる。

<sup>37</sup> これに関しては『金剛寺一切經の総合的研究』〔2007〕153-155 に書誌情報が纏められているのでそちらを参照。また金剛寺の他に七寺、興聖寺、西方寺、新宮寺、松尾社の古写經があるとされているが残念ながら今回は金剛寺のみしか参照出来なかった。また『大乘入楞伽經』では聖語藏もあることが確認されているが、大学に於けるデータベース上ではそれを聖語藏に確認することが出来なかった。国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編. 2006. 日本現存八種一切經対照目錄. 東京：国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会. 70, 71 参照。

なる<sup>38</sup>。

〔I〕…金（1139-1172）

〔II〕…石

〔III〕…宮〔福州版：東禪寺版（宗寧藏 1080-1122）、開元寺版（毘盧藏 1112-1151）〕

〔IV〕…宋〔南宋思溪版、円覚藏≡資（1241-1252）〕…普〔元本（1277-1290）〕  
 ≡ 磧（1216-1322）≡ 南（1413-1420）  
 …≡ 明（嘉興藏 1573-1620）≡ 徑（1589-1676）≡ 清（1735-1738）

〔V〕麗（1236-1251）≡ 大

〔VI〕…金剛

〔VII〕…敦煌写經・敦煌文書

#### 1.1.2.4. チベット語訳に関して<sup>39</sup>

サンスクリット原文からの翻訳とされる『楞伽經』のチベット訳に関し

<sup>38</sup> 暫定的にはあるが〔I〕～〔VII〕に分類できると考えられる。然しながら『楞伽經』の全ての章を網羅している訳ではない。また全ての蔵經関連の資料に関して限なく精査している訳ではない。この分類は校訂テキストを作成するにあたっての過程を中華大藏經編輯局編。2002. 中華大藏經（漢文部分總目）。北京：中華書局。の1-16と菅沼見博士古稀記念論文集刊行会編。2005. インド哲学仏教学への誘い：菅沼見博士古稀記念論文集。東京：大東出版社。279-282とF. Deleanu [2006] 113-115等の諸資料・諸研究を参考にして例示しただけに過ぎない。現段階では明確にできない部分は今後の課題としたい。

尚、太い下線、≡に関してはそれぞれの分類内で関連性があると思われるものを示し、…に関しては今回扱えなかった、或いは想定できなかった資料等があると思われるものに関して付している。

<sup>39</sup> 『楞伽經』のチベット訳には二種類があるとされている。北京版でいうところのNo. 775とNo. 776（漢訳からのチベット訳）とである。今回、校訂を施したのはNo. 775であるが、これはサンスクリット原典からの翻訳と考えられている。一方No. 776は大谷勘同目錄の識語にて'Gos Chos grub（法成）によって訳出されたことがわかる。上山 [1990] 85-86に於いてそれに対する識語が挙げられている。それを示すと「聖神贊普の命によって、シナの論師 Wenhvi（円暉）が造れる疏と結びあわせて、翻訳師・比丘 'Go Chos grub が翻訳し、校正した」とある。またNo. 776は *'phags pa lan-kar gshegs pa rin po che'i mdo las sangs rgyas thams cad kyi*

ては以下のものを使用した。

・ *'phags pa lang-kar gshegs pa'i theg pa chen po'i mdo* (Skt. *Ārya-Laṅkāvatāra-mahāyāna-sūtra*)

### 1.1.2.5. 漢訳に関して

『楞伽經』の漢訳としては以下のものが伝えられているがこの内、求那跋陀羅訳、菩提流支訳、実叉難陀訳を使用した。

〔・ Dharmakṣema 曇無讖<sup>40</sup> (385-433) 訳『楞伽經』四卷、414 訳出<sup>41</sup>〕

1. Guṇabhadra 求那跋陀羅 (394-468) 訳『楞伽阿跋多羅宝經』四卷 (T. 16. 480a-514b)、443 訳出〔宋訳<sup>42</sup>〕

2. Bodhiruci 菩提流支 (?-527) 訳『入楞伽經』十卷 (T. 16.514c-586b)、514

---

*gsung gis nying po shes bya ba'i le'u*. 「聖入楞伽宝經中一切仏語心品」という題であり、漢訳の『四卷楞伽』のチベット訳とされている。上山 [1990] 85-86, 高崎 [2009] 360 参照。また袴谷 [2001] 113-116 に敦煌出土のチベット語唯識文献に関する研究がある。その中で『楞伽經』に関する記述があるが、既に同経が敦煌に於いて『法雲經』と共に重要視されていたこと、『デンカルマ目録』とプトウンの「目録」とが巻 11 としているのに対して、北版. No. 775 と同経写本 P608 との巻数の数え方や切り方が巻 9 としており、「目録」と異なっていること等が述べられている。然しながらここで問題となるのは法成に関することである。これに関する見解として上山 [1990] 96 では〔呉〕法成が *'Go Chos grub*, つまり漢字の「呉」を音写して *'Go*、「法成」を意識して *Chos grub* とし、〔シナ・〕チベット語族の翻訳者ではなく漢民族として推定しており、中国語とチベット語との所謂バイリンガルとして同一人物としている。これに関しては山口 [1999] 34-42 には敦煌は 786 年に吐蕃王国により陥落して以来、848 年以前にチベット人の手を離れたとしている。このことから推察すると敦煌は 60 年程チベットの領域であるからして、中国語とチベット語とのできる学僧が存在していても然程問題ではないかとも思われる。法成に関しての詳しい考察は上山 [1990] 84-243 を参照。

<sup>40</sup> 『高僧伝』(T. 50.335c15-337b4) 参照。

<sup>41</sup> 『歴代三宝記』(T. 49.84b7) に「楞伽經四卷」の記述が見られ、414 に翻訳されたとしているが、この翻訳は現存していない。記述の信憑性が疑われる。高崎 [2009] 358-359 参照。

<sup>42</sup> これに関しては『高僧伝』(T. 50.344b3-5) の記述を参照。

訳出〔魏訳〕<sup>43</sup>

3. Śikṣānanda 実叉難陀 (652-710) 訳『大乘入楞伽經』七卷 (T. 16. 587a-640c)、700-704 訳出〔唐訳〕<sup>44</sup>

### 1.1.2.6. 註釈に関して

#### 1.1.2.6.1. チベット訳の註釈

『楞伽經』の註釈としては以下のチベット訳が伝えられているが、今回は註釈を校訂テキストに反映していない。

1. *'Phags pa lang kar gshegs pa 'i 'grel pa* (*Ārya-Laṅkāvatāravṛtti*, 『聖入楞伽註』Jñānaśrībhadrā, 智吉祥賢著)<sup>45</sup> (『西藏大藏經』北京版 No. 5519)

2. *'Phags pa lang kar gshegs pa zhes bya ba theg pa chen po 'i mdo 'i 'grel pa de bzhin gshegs pa 'i snying po 'i rgyan zhes bya ba*

(*Ārya-Laṅkāvatāra-nāma-mahāyāna-sūtra-vṛtti Tathāgata-hṛdayālaṃkāra-nāma*, 『聖入楞伽經註・如来心莊嚴』Vijñānavajra, 智金剛著) (『西藏大藏經』北京版 No. 5520)

3. *'Phags pa lang kar gshegs pa rin po che 'i mdo las sangs rgyas thams cad kyi gsung gi snying po 'i le 'u rgya cher 'grel pa* (聖入楞伽宝經中一切仏語心品疏)

この註釈に関しては『西藏大藏經』及び『大正新脩大藏經』等の既刊藏經に収録されていない敦煌写本から見いだされたものである。写本に記さ

<sup>43</sup> これに関しては『続高僧伝』(T. 50.428a21-429c5)の記述を参照。

<sup>44</sup> これに関しては『宋高僧伝』(T50.718c18-719a17)の記述を参照。またこの經典の訳出に際しては則天武后の命を受けてのものである。

高崎 [2009] 359 では『四卷楞伽』・『十卷楞伽』・『七卷楞伽』の三訳を比較した『入楞伽心玄義』(T.39.430b24-c1)を特に『四卷楞伽』に対する否定的な見解をそこでは述べられているにも拘らず、後世それが菩提達摩への伝承、『楞伽師資記』に見られる北宋禪に於ける伝承、その系統の敦煌に於ける展開からそれがチベット訳にされるに至るまでの過程等にわたっての比較として提示されている。

<sup>45</sup> これに関しては羽田野 [1993] が挙げられる。カシミールのバンディタ・ジュニャーナ・シュリー・バドラ (Jñānaśrībhadrā, Ye shes dpal bzang po) が『楞伽經』に対して註釈を施したものに『楞伽經』のサンスクリット原文、チベット訳、漢訳等を総合的に勘考して纏め上げられた研究書である。詳細に関しては羽田野 [1993] I-XII, Abbreviations を参照。

れている撰者は Wenhvi (円暉)<sup>46</sup>とされ、彼に対する題下の識語は「聖神賛普の命によって、大校閼翻訳師・比丘 'Go Chos grub がシナ語の本より翻訳し、校正し決定した」とある。また写本の識語は「鳥の年<sup>47</sup>の夏の初めの月 [=4月] のうちに、主の功德と一切衆生の功德を廻向して(?)、比丘ドルジェが『入楞伽經疏』一部を写した。本文はチェンザンが写した…」とある。またこの写本は Stib219 に於いて確認できる。これに対する漢訳文献としては中大雲寺沙門円暉撰『楞伽阿跋多羅宝經疏』(Sch5603, Pch2198, Ptib609) がある<sup>48</sup>。

また東アジアの思想に影響を与えていることは恐らく『楞伽阿跋多羅宝經』四卷の菩提達摩への伝承に起因していると思われる。ここではまた中国・日本撰述の『楞伽經』関係の註釈書の主要とされているものを紹介したい<sup>49</sup>。

#### 1.1.2.6.2. 中国撰述の註釈

1. 『入楞伽心玄義』一卷<sup>50</sup>法蔵〔華嚴宗第三祖、賢首大師〕(643-712)：諸漢訳

<sup>46</sup> 円暉に関しては上山 [1990] 389-397 参照。

<sup>47</sup> チベットが敦煌を支配している時期 (786-848) のうち 841、829、817 等があるようであるが、Chos grub の活躍年代から 818 が妥当であるとしていて、翻訳はそれよりも前であるとしている。上山 [1990] 115 参照。

<sup>48</sup> 上山 [1990] 114-115 では『聖入楞伽宝經中一切仏語心品』の識語と『聖入楞伽宝經中一切仏語心品疏』の識語とを比較して 'Go Chos grub は円暉疏、即ち『聖入楞伽宝經中一切仏語心品疏』の全文をもチベット訳していたことを確認し、そのチベット訳した疏の中から『聖入楞伽宝經中一切仏語心品』即ち經文だけを抽出したと見ている。註 39 参照。

略号：Sch = スタイン蒐集敦煌出土漢文写本；Pch = ペリオ蒐集敦煌出土漢文写本；Stib = スタイン蒐集敦煌出土チベット写本（番号：プサン目録）；Ptib = ペリオ蒐集敦煌出土チベット写本（番号：ラルー目録）。

<sup>49</sup> 『国訳大藏經』[1974] 86-87 の日本撰述文献中には『楞伽卿季潭本別考』、『楞伽經講録』、『楞伽經講翼』二卷〔靈空〕光謙〔天台宗江戸時代中期承応元年 1652-元文四年 1739 写本にて伝承〕が挙げられているが、現段階ではそれに関する概要を確認できていない。

を勘考させてサンスクリット原文の内容を明確にするために著わされた註釈書。

- 2.『楞伽經註』七卷〔大敬愛寺〕智巖：『楞伽阿跋多羅寶經』四卷の注釈書。
- 3.『楞伽經通義』六卷〔柏庭〕善月（1149-1241）：『楞伽阿跋多羅寶經』四卷の註釈書。
- 4.『楞伽經集註』四卷〔雷庵〕正受（1195-1200-?）：『楞伽阿跋多羅寶經』四卷を底本として菩提流支訳、実叉難陀訳『大乘入楞伽經註』十卷〔宋宝臣〕、『宗鏡録』百卷〔北宋永明延寿〕等を勘考させた註釈書。
- 5.『觀楞伽經記』八卷〔憨山〕德清〔臨済宗楊岐派〕（1546-1623）：『楞伽阿跋多羅寶經』四卷の註釈書。
- 6.『楞伽經註解』八卷或いは四卷如玘（1320-1385、洪武十一年 1378 著）：『楞伽阿跋多羅寶經』四卷に基づいているが、実叉難陀訳をも参照している註釈書。

#### 1.1.2.6.3. 日本撰述の註釈

- 1.『佛語心論』十八卷〔虎関〕師鍊〔臨済宗鎌倉時代後期から南北朝時代弘安元年 1278-興国 7 年/貞和 2 年 1346、正中二年 1324 著）：『楞伽阿跋多羅寶經』四卷を註釈したもので、全体の内、百八句までを総論とし、これ以降は「復問答第十」として、八十六段に分段している。段落分けされているために内容の理解に資するところがある。
- 2.『楞伽經論疏折衷』十卷〔徳巖〕養存〔曹洞宗江戸時代前期?-元禄十六年 1703、貞享五年 1688 刊〕：菩提流支訳、実叉難陀訳を参照しながらも『楞伽阿跋多羅寶經』四卷を註釈したものであり、さらに虎関師鍊〔臨済宗鎌倉

---

<sup>50</sup>『入楞伽心玄義』（T.39.428b18-429c8）に於いて『楞伽經』の内容を十種類に区分して示している。1.性相円融の無宗、2.唯妄想、3.自覚聖智、4.唯心、5.開二諦、6.三無等義、7.五法・三性・八識・二無我の四門法義、8.教義相對或いは菩薩行と仏果との因果相對に至る五門相對、9.立破無礙、10.顯密自在の十門を所詮の宗趣、としている。また成立年代に関しては鍵主、木村〔1991〕80によれば、長安四年（704）正月十五日から翌年正月二十四日までの間として、この一時期法藏は西明寺にいた、と想定している。また高崎〔2009〕373 参照。

時代後期から南北朝時代 1278-1346] の『仏語心論』の体系を多角的に考察しながらも養存独自の見解をもって註釈を施している<sup>51</sup>。

### 1.1.2.7. 翻訳等に関して

#### 1.1.2.7.1. 訓読

1. 山上曹源訳. 1974. 国訳大藏經：經部第 4 卷（国民文庫刊行会編輯），東京：国民文庫刊行会<sup>52</sup>。
2. 三井晶史編. 1977. 昭和新纂國譯大藏經：楞伽經・首楞嚴經・圓覺經（經典部第 7 卷，昭和新纂國譯大藏經編輯部），東京：名著普及會。
3. 常盤大定訳. 1934. 国訳一切經：印度撰述部經集部 7. 東京：大東出版社<sup>53</sup>。
4. 高崎直道. 2006. 楞伽經. 東京：大蔵出版社<sup>54</sup>。

#### 1.1.2.7.2. 現代語訳

##### 1.1.2.7.2.1. 〔日本語〕

1. 南條文雄 泉芳璟〔共〕訳. 1927. 邦訳梵文入楞伽經. 京都：南條先生古稀記念祝賀会。
2. 若井信玄訳. 1931. “世尊が錫蘭の首府ランカーを訪問し給ふ書”. 大正大学々報第 11 輯. 東京：大正大学出版部<sup>55</sup>。
3. 光寿会稿. 1936. 梵文邦訳入楞伽經. 京都：光寿会本部。
4. 安井広済訳. 1976. 梵文和訳入楞伽經. 京都：法蔵館<sup>56</sup>。

<sup>51</sup> これに関しては佐々木 [1987] 235-240, 高崎 [2006] 410-419 の文献目録参照。

<sup>52</sup> 『大乘入楞伽經』七卷実叉難陀 (Śikṣānanda) 訳の訓読。

<sup>53</sup> 『入楞伽經』十卷菩提流支 (Bodhiruci) 訳の訓読。

<sup>54</sup> 『楞伽伽阿跋多羅宝經』四卷求那跋陀羅 (Guṇabhadra) 訳の訓読であるが全体の 4 分の 1 程度の訓読とそれに関する研究を纏めている。

<sup>55</sup> 南條 [1956] に加筆訂正して、註記を付して、サンスクリット原文のローマナイズと日本語訳とを施している。全校訂・全訳ではなくて 1.1.1.2. に従えば 1 の部分校訂テキスト・和訳である。

<sup>56</sup> 南條 [1956] に加筆訂正をして、梵文訂正表や索引をも完備しており、サンスクリット原文の全訳がなされている。またサンスクリット原文によってでは把握で



5. 中村元編. 1983. 仏陀・大乘仏教集（仏教教育宝典 1）. 東京：玉川大学出版部<sup>57</sup>.
6. 常盤義伸訳. 1994. 『ランカーに入る』：梵文入楞伽經の全訳と研究（第2冊本文・研究）. 京都：花園大学国際禅学研究所.
7. 中村元. 2003. 『華嚴經』『楞伽經』（現代語訳大乘仏典 5）. 東京：東京書籍<sup>58</sup>.

#### 1.1.2.7.2.2. [中国語]

1. 頼永海訳. 2002. 楞伽經（中國佛教經典寶藏精選白話版，佛光經典叢書 1166）. 三重（臺北縣）：佛光文化事業<sup>59</sup>.
2. 黄宝生译注. 2011. 入楞伽經：梵汉对勘（梵汉佛经对勘丛书）. 北京：中国社会科学出版社<sup>60</sup>.

#### 1.1.2.7.2.3. [英語]

- ・ Daisetz Teitaro Suzuki. 1956. *The Lankavatara Sūtra: A Mahāyāna*

---

きないところ等はチベット訳を補って翻訳している。時にはチベット訳からサンスクリット語の単語等を還元している。然しながらこの書は訳註を省略してしまっている。

<sup>57</sup> この著作の中の 377-390 を土田龍太郎氏がサンスクリット原文・チベット訳・諸漢訳・諸研究に基づいて翻訳され、訳註を施している。全訳ではなく 1.1.1.2. に従えば 1、2、3、10 の更にその中の箇所部分訳である。

<sup>58</sup> この著作の中で『華嚴經』の他に『楞伽經』に関して翻訳が為されているのだが、その際には実叉難陀訳『大乘入楞伽經』を中心として部分的に書下し文・翻訳が為されている。また漢訳の術語をサンスクリット原文と対比させており、中にはサンスクリット原文からの翻訳箇所もある。また簡潔な説明も付されていて一般の読者に便宜を図っていることが見受けられる。1.1.1.2. に従って部分的な翻訳箇所を示せば 1、2、8 となる。

<sup>59</sup> 『大乘入楞伽經』七卷実叉難陀（Śikṣānanda）訳に対する翻訳と術語に関する簡潔な註が施されている。

<sup>60</sup> 南條 [1956]、P. L. Vaidya [1963]、『楞伽伽阿跋多羅宝經』四卷求那跋陀羅（Guṇabhadra）訳、『大乘入楞伽經』七卷実叉難陀（Śikṣānanda）訳を対照させて、翻訳・註記を付している。

*Text/Translated for the First Time from Original Sanskrit*. London: Routledge<sup>61</sup>.

#### 1.1.2.7.2.4. 〔ドイツ語〕

・Golzio, Karl-Heinz tr. 1996. *Die makellose Wahrheit erschauen: Die Lehre von der höchsten Bewusstheit und absoluten Erkenntnis: Das Lankavatara-Sutra*. München: Otto Wilhelm Barth<sup>62</sup>.

#### 1.1.2.7.2.5. 〔フランス語〕

・Carré, Patrick tr. 2006. *Soutra de l'entrée à Lankā: Laṅkāvatārasutra/ Traduit de la version chinoise de Shikshānanda (Dasheng ru lengjia jing)*. Paris: Fayard.

## 1.2. 『楞伽經』の文化的背景

『楞伽經』と『ラーマーヤナ』とに何らかの関連性があること自体はランカー<sup>63</sup>やラーヴァナ<sup>64</sup>〔サンスクリット原文・チベット訳・漢訳（菩提流支

<sup>61</sup> The Lankavatara Sutra: An Epitomized Version/Translated by D. T. Suzuki; Compiled and Edited by Dwight Goddard; Foreword by John Daido Loori. 2003. Rhinebeck. NY: Monkfish Book Publishing Company. 鈴木大拙氏の英訳の要約本もある。

<sup>62</sup> サンスクリット原文からの翻訳であり、術語に対する簡明な説明が付されている。

<sup>63</sup> ランカー：ランカーに関しては『大唐西域記』（T. 51.934b19-20）に國東南隅有「馬+𑖀」勒陞迦山。巖谷幽峻神鬼遊舍。在昔如來於此說「馬+𑖀」迦經。「國の東南の隅に「馬+𑖀」迦山あり。巖谷は、幽峻にして、神鬼遊舍せり。在昔、如來は、此に於いて「馬+𑖀」迦經を説き給へり」と記されていることが知られているが、この記述からはランカーが山であることが理解できる。また谷が深く岩が聳えていることや鬼神等〔例えば羅刹や夜叉或いは阿修羅か〕が建物に出没することや如來がこの場所で『楞伽經』を説示したことを窺い知ることができる。ところでランカーが4-5世紀の間に成立したとされるインドの叙事詩『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』に於いて度々言及されていることは、周知の通りであるが『楞伽經』の研究上最も基本的な問題としての經典の題名ともなる「楞伽」即ち Laṅkā

がどのような地理的な位置にあるのか、等に関しては A. Sarkar [1987], A. Guruge [1991], R. K. Shukla [2003] 等に詳細な研究が盛り込まれているのでここでは部分的に略説するにとどめたい。ランカーでは理不尽な儀式等を介して行われるヴェーダ信仰の全ての掟を破った裕福なアーリヤ人が構成する社会に基づいて、全うに暮らしを営んでいた場所である、とされているが、これはパーンディヤ朝 Pāṇḍya がパニ (Paṇi) エンタープライズの創立とされるように裕福な町としてカヴァタ町 (Kavatapura) に言及している『ラーマーヤナ』によるものである。またランカーの町はラクシャサ (恐らく先住民) の住居であるとされているが、彼らによって培われたことにより文化的水準が高く、宮殿、要塞、学術、軍事能力或いはラーヴァナや彼の弟であるヴィビーシャナのような統治者の国政術からするにかなり程度の高い文明に至っていた、と〔ランカーの統治者がパニ達であり、パーンディヤの王たちであったことに比して〕ヴァールミーキのものは思わせる。

一方セイロンに於ける最初期の先住民たちは様々な土着の種族がおり、〔それを例えて〕ヤクシャ、ラクシャサ、アスラ、ナーガ、デーヴァとして知られているが、その後に数回に亘って侵入、侵略が〔インド亜大陸を介して〕繰り返される。最終的なアーリヤ人の到来はアショカ王の息子であるマヒンダであったが、このように各々の時代に於いて様々な崇拜〔例えばスカンダ、シヴァ等〕が入り乱れていたようである。またランカーの町はラーヴァナの住処であって、これはセイロンの南東の端に位置するトリクータと言われる山〔の上〕にあるとも記されているが、見解は分かれている。ここでランカーとセイロンとが同一視されて然るべきであるのかどうかという問題に直面することとなるのであるが、その問題に関して地理的な問題を踏まえると以下ようになる。タームラパルニ川 (Tāmraparṇi) を渡って、海の中で連なっているマヘンドラ山脈 (Mahendra) の南へ向かうと、ランカーに達するためには海を渡る必要性が浮上する。或いはランカー島はマヘンドラ山の南部を形成しているカルダムン (Cardamum) 山地の南に位置することとなる。一方セイロンが古代のランカーであると仮定すると、アダムス・ブリッジを通してランカーに至ることになれば、マヘンドラ山の南端に向かってタームラパルニ川を渡る必要性を欠くことになるのである、と述べられているが、詰まる所ここでは、ランカーとセイロンとは同一視されないのである。これに関する同一視・非同一視の問題は経線上の位置問題とする天文学者やマハーヴァンサ (Mahāvamsa) による解釈等が様々に為されている。

ランカーに位置するラーヴァナの宮殿は雪の如き純白であり、宮殿内は多くの宝石で装飾されている。宮殿の食堂からはワインや酒や上等な料理の匂いが漂ってきて、宮殿の大広間の床は水晶が用いられていて、象牙や真珠、ダイヤモンド、珊瑚、金や銀の象嵌細工が施されている。宮殿の外は種々なる鬼神で護衛されている。ランカーの要塞には野性的な水棲の動物たちがいる深くて広い水で満たされている堀があり、城壁によって取り囲まれている。その他4つの頑強な門があること、敵に対

して攻撃をするものがあること、4つの吊り上げ橋によって、〔それを封鎖してしまえば〕外部からの侵入が困難であること等が記されている。

次にランカーに関する考古学者の見解を挙げておきたい。H. D. Sankalia はラーヴァナのランカーはソネブル（Sonepur）に位置するが、それはバスター（Bastar）付近の密林にあって、オリッサ（Orissa）州、マハナディ（Mahanadi）の土手の所である、と述べられている。ソネブル町で発掘された土器の先行調査が決め手となってラーヴァナのこの地域での統治が立証されたのである。史実と図解とに基づく証拠は、その町がほぼ長さとしては1 km、幅としては0.5 km であって、ラーヴァナのランカーであることを一段と明らかにしたのである。それは川の土手にある塚であり、マハナディの合流点に近接しており、バスターのジャガダルプル（Jagadarpur）から凡そ250 kmで、川底幅が凡そ1.5 km である、としている。これらに関してはA. Sarkar [1987] 16-23, 30-31, A. Guruge [1991] 68 参照。

またR. K. Shukla [2003] にもランカーに関する記述が纏められているので見てみたい。『ラーマヤナ』にランカーの町はTrikūṭa 丘陵がある南方の海岸に位置して5.2.1、7.3.26、7.5.22、要塞化されていること5.53.14、またランカーの町が金製の柱や格子窓でできた邸宅の列で満たされていること5.25.1、それらは聳え立ち、壮麗であり水晶や金で鏤められており、猫目石や真珠製の糸で装飾されていること5.2.51-53、街中は庭園や木々等で彩られて、森の主要な木としてはマツ等の様々な木々があること3.48.12、5.2.9-10、5.3.34、6.41.31、街は旗など彩られていたことが記されている。更に諸学者たちのランカーの場所に関する見解が述べられている。

(1) Dāsa と Nārmaṅga はアマラカントカ（Amarakaṇṭaka）付近としている。尚アマラカントカに関してはN. N. Bhattacharya [1999] 58-59 参照。(2) Vāḍera はモルディブ（Maldives）と同一視している。(3) Śukla はゴダーヴァリー盆地に位置していたとする。尚ゴダーヴァリー盆地に関してはN. N. Bhattacharya [1999] 138 参照。Dube は(1)を支持するとともにAnuradhapura 付近のPolannaruwa が昔のランカーの町としていて、それは古代のPulastinagara と言われていた。またChansarakar は考古学上の証拠、ラーマ物語の民衆の伝承、南アジア諸国の様々な校訂本に基づいてPolannaruwa がPulastinagara であり、ランカーの名前で知られていると結論付けたのであるが、然しながらこれらの見解に関しては更なる詳細な検討が必要とされる為に現時点ではランカーを想定するのみで確定はし難い。これに関してはR. K. Shukla [2003] 178-189 参照。

また『ラーマヤナ』に於けるランカーと大都市との空路の検討がなされているがこれに関してはR. K. Shukla [2003] 136-139 参照。またランカーのマラヤに関しては「セイロンの中央の丘陵」の名前であると天文・地理・数学者であるプトレマイオス、トレミーがMalaea として地図上に記していたことを論拠の一端とする説もある。またA. Guruge は『ディーパヴァンサ』、『マハーヴァンサ』或いはタミール文献等の伝統を承けてセイロンを大海原の中の島であるランカーと同一視してい

ることを窺い知ることができる。A. Guruge [1991] 68-69, 『楞伽經畫卷』 [2003] 18-19 参照。

<sup>64</sup> A. Sarkar [1987] によれば、ヴァールミーキの『ラーマーヤナ』に於けるラーヴァナは冷酷と好色とを兼ね備えたものとして表現されている。彼は強固であり知的ではあったが札付きの快楽主義者であった。熱情に酔いしれていて、過度に粗野であり冷酷で利己的であった。〔正しき〕教えを厭い、一時の運命の力に揺り動かされ、一連の非行を行う傾向があるとされる。ラーマの実際のモチーフがデカン高原の侵略にあるとしても『ラーマーヤナ』ではそのことを正当化しようとするものではないのである。そのことはアーリヤ人以前の同等の発展した文化がすでに存在していた南方の文化をアーリヤ人自身が如何に拡張しているのかを詩人たちの言外のモチーフとして述べられている可能性があった。そして言わば後ほどアーリヤ人の英雄と交戦させる為にラーヴァナの性格を中傷する必要があったのである、とされるが、二者間の交戦は歴史的なものとして或いはそこからラーヴァナの叙述が推察されることは、大いに神話的性格を帯びている為に適当な判断とは言い難い、とされる。モンスターとしてのラーヴァナの通俗的な観念は十の頭と二十の腕を持つとされるが、把握し難い。この考えは芸術上と同じく通俗的な言葉でそのことが理解し得るというそのような根深さを持っている。古代の彫刻では無数の頭と腕とを持って描かれているが、『ラーマーヤナ』では通常の人間の如く記されている箇所もある。またラーヴァナという言葉は大変に興味深くプラーナ文献によればラーヴァナは人々を泣かせるものを意味している。またラーヴァナには二重の解釈があるが、一つには農耕に於ける恵みの雨、即ち Rāvaṇa は Śrāvaṇa を意図していて、言い換えれば洪水 (vanya) となるが、Rāvaṇa の語根である Ravṇ はサンスクリットでなく、アヴェスタで見いだされ、川或いは川の流れを意味するとされる。こういう訳でラーヴァナという洪水がシーターという農耕をさらう、と説明され得ることがあるのと、他方 Rāvaṇa は、蛇 (nāga) であり、水の守護者であって、ヴェーダ神話上の水の妨害者たるヤクシャやラクシャであるとされ、海の島にシーターを幽閉したとされるとの両解釈がある。また非アーリアン言語に起源を発するとされる。一方『マハーバーラタ』にはラーヴァナに関する記述がみられるがその内「彼世界の人々を恐怖させた (rāvayāmāsa)」からラーヴァナと呼ばれるようになった、と記されている。ラーヴァナの誕生に関しては二種類のエピソードがあるが、『マハーバーラタ』では梵天の息子プラスティヤ (ヴィシュラヴァス) と羅刹の女ブシュポートカターとの間に生まれた子がラーヴァナとされるが、『ラーマーヤナ』では梵天の息子プラスティヤとトリナビンドウ王仙の娘から生まれたヴィシュラヴァスとスマーリンの娘のカイカシーとの間に生まれた子がラーヴァナとされる。『マハーバーラタ』 3.258-260, 『ラーマーヤナ』 7.3-14, A. Sarkar [1987] 108-121, 上村 [2004] 214-224 参照。

訳・実叉難陀訳〕等の用語が見られることから窺い知ることができる。然しながら求那跋陀羅訳では第一章自体が見られない。『楞伽經』に於いてランカーは町（都城）として用いられる<sup>65</sup>のに対して『ラーマーヤナ』に於いてはラクシャサの国であり且つラーヴァナの宮殿のある場所をも指し示している<sup>66</sup>。また『マハーヴァンサ』に於いてランカーは現在のスリランカの呼称であり、その中のヤクシャの住する場所等ともされる<sup>67</sup>。現段階ではランカーそのものを特定することはできていないが、第一章に於いては仏陀の説法する場所となり、舞台設定として採用されていることは明らかである。ここでは『楞伽經』に影響を与えたと考えられる『ラーマーヤナ』及び仏典等に於ける『ラーマーヤナ』の記述に関して簡単に紹介したい。

### 1.2.1. ラーマーヤナの概要

ヴァールミーキに帰せられる叙事詩『ラーマーヤナ』は七篇二万四千詩節からなり、概要は次のようなものである。アヨードヤー (Ayodhyā) を都とするコーサラ (Kosala) 国の王であるダシャラタ (Daśaratha) の長子ラーマ (Rāma) はジャナカ王の娘であるシーター (Sītā) と結婚するもカイケーイー (Kaikeyī) 夫人の謀によって国外追放される。ラーマはシーターと彼の弟であるラクシュマナ (Lakṣmaṇa) と共にダンドカ (Dandaka) の森に退くが、ラクシャサ (rākṣasa) の王であるラーヴァナ (Rāvaṇa) が、シーターの美貌に翻弄され、彼女を略奪しランカーへ連れて行く。ラーマ兄弟は猿王スグリーヴァ (Sugrīva)、その宰相ハヌマット (Hanumat, Hanumān) をはじめとする猿軍に助けられて、最終的にはラーヴァナを討

<sup>65</sup> 南條 [1956] 1, 5-6 等を参照。

<sup>66</sup> Manmatha Nath Dutt. 1987. *The Rāmāyana: Translated into English Prose from the Original Sanskrit of Vālmiki Vol. II*. Patna: Eastern Book House. 616-619 等を参照。

<sup>67</sup> Geiger, Wilhelm, tr. 2010. *Mahāvamśa: Text with English Translation Vol. 1/Edited with Furnishing Original Pāli Text, Revised English Translation, Index and Glossary*. New Delhi: Bharatiya Kala Prakashan. 4, 5-12; 123, 9-10; 128, 11-12 等を参照。

伐し、シーターを奪還してアヨードヤーに帰還した。その後、ランカーにて幽閉されている間にラーヴァナとシーターとの間に不純な関係があったのではないか、という疑念を持っている国民に対して、即ちそのことが国内に於ける女性の貞操観念を乱すものとなりかねないとしてラーマはシーターとの別離を余儀なくされる。

## 1.2.2. 仏典に於ける『ラーマーヤナ』の紹介

### 1.2.2.1. ジャータカに見られる『ラーマーヤナ』

『ラーマーヤナ』に於けるラーマやシーター等に関する記述は仏教に於ける『ダサラタ王前生物語』（Daśaratha-Jātaka）で見られる。そこではダサラタ大王、シーター姫、バラタ王子、賢者ラーマ、ラッカナ等の名前を確認できる。この物語は父親を亡くした資産家に対して師たる仏陀が語った王位継承に關しての法話であるが、そこに於ける配役として、ダサラタ大王をスッドーダナ大王、シーター姫をラーフラの母、バラタ王子をアーナンダ、ラッカナをサーリプッタ、そして賢者ラーマを師たる仏陀として対応させているが、この物語の中に於いてはラーヴァナによるシーターの連れ去りやハヌマト等に関する記述は見られない。また『ラーマーヤナ』2.63ではダサラタ大王がカウサリヤー妃にかつて自分が犯した罪を語る、というところから物語が始まる。これは目の見えなくなった修行者の両親の世話をするサーマが、ある日、狩りに来たピリヤッカ王の毒矢に脇腹を不注意にも射抜かれるという内容の『サーマ前生物語（Sāma-Jātaka）』と共通の物語である<sup>68</sup>。

<sup>68</sup> 岩本 [1980] 259-264 によると『ラーマーヤナ』の成立に關して言及されていて、それに関する内容を考察した結果、第1篇から第7編の内、第7篇を後代に付加されたものとし、第1篇も作者であるヴァールミーキのものでないとしている。また『マハーバーラタ』との前後の成立關係については『マハーバーラタ』3.273-290に『ラーマーヤナ』が現存のものに基づいた要約として収められている点、〔常に〕人間の英雄としてのラーマではなくて、伝説的にヴィシュヌ神の権化として用いられている点や他の箇所ではパーンダヴァ族の英雄ビーマが山の中でハヌマトと会い、押し問答の末に「俺は『ラーマーヤナ』で一番よく知られているハヌマトだ」と名乗る点、また『ラーマーヤナ』の作者ヴァールミーキを『マハーバーラ

## 1.2.2.2. 漢訳に見られる『ラーマーヤナ』

漢訳仏典に見られる『ラーマーヤナ』に関しては渡辺 [1977] 252-258 に紹介されている。その論考の中で唐の顕慶元年（656）―顕慶四年（659）に翻訳されたとされる『阿毘達磨大毘婆沙論』（T. 27.236c24-27）〔玄奘訳〕を挙げて、

如邏摩衍拏（Rāmāyaṇa）書有一萬二千頌。唯明二事。一明邏伐拏（Rāvaṇa）劫私多（Sītā）去。二明邏摩（Rāma）將私多（Sītā）歸。…

「邏摩衍拏（Rāmāyaṇa）書に一萬二千頌あるが如し。唯、二事を明かす。一は邏伐拏（Rāvaṇa）私多（Sītā）を劫やかして去るを明かす。二は邏摩（Rāma）の私多（Sītā）を將いて歸するを明かす。…」と例示している。また菩提流支訳〔請仏品〕と実叉難陀訳〔羅婆那王勸請品〕とに Rāvaṇa（ラーヴァナ）の名前が見られることを提示している。また渡辺 [1977] 259-260 に於いて『仏所行讃』（T. 4.53b2-53b8）羅摩爲私陀殺害諸鬼國。「羅摩（Rāma）、私陀（Sītā）の爲に諸鬼國を殺害せり」とあることや『仏本行經』

タ』では古代の聖仙と記してある点等を考慮して現存の『マハーバーラタ』の成立時に先立って『ラーマーヤナ』が成立していたとする見方をしている。また『マハーバーラタ』の成立年代に関してはヴィンテルニッツの研究を示しており西暦4世紀以前に現在の形が成立したとしている。また『ラーマーヤナ』の成立に関しては「ジャータカ物語」に出てくる「ラーマ物語」を踏まえると西暦紀元前2世紀頃には存在していたのではないかと推定している。また西暦前3世紀の中頃にアショカ Aśoka 王（在位前 268 頃-232 頃）が法勅碑文を交付した際に西北はカシミールからアフガニスタン、西はカーティヤーワール半島、西南はキストナー河流域、東南はマハーナディー河河口付近にまで及んでいるとしているが、ゴダーヴァリー河の流域一帯とその東に連なるマハーナディー河上流流域一帯からは碑文が発見されていないとし『ラーマーヤナ』でラーマとシーターが永きに亘り住んでいたダンダカ Daṇḍaka の森のダンダカをイクシュヴァーク王の息子とし『マハーバーラタ』に於けるパールガヴァ仙の娘を凌辱して、呪われ、その王国を荒廃させたものと同じ視して、そのダンダカの森をダンダカ＝アラニヤ（ダンダカの荒野）と呼ばれたとしている。更に『マハーバーラタ』によればダンダカ＝アラニヤはデカン高原方面にあったことが知られるようである。また更にその場所を特定して現在のビラスプール、ライプール地方ではないかと推定している。A. Sarkar [1987] 54-56, 『ジャータカ全集 6』[1989] 123-129, 『ジャータカ全集 8』[1982] 67-95, N. N. Bhat-tacharyya [1999] 114, R. K. Shukla [2003] 74-79, 上村 [2002] 330-399 参照。



(T. 4.113c6-7) の昔者華上子號曰十頭神堅固著色欲緣喪沒身命。「昔は華上子 (Rāvaṇa)、號して十頭神 (Daśakaṇṭha, Daśagrīva) と曰い、堅固に色欲に著して、緣りて身命を喪沒せり」とあることを提示している。『マハーバーラタ』の所伝では大仙であるプラスティヤに仕えたラクシャシー (羅刹女) の一人であるプシュポトカター (Puṣpotkāṭā) に授けられたのがクンバカルナとラーヴァナとであるがこの内、Puṣpa は「華」を意味し、utkāṭa は「程度が甚だしい」を意味するので「上」と訳され「プシュポトカターの子供」ということでクンバカルナ或いはラーヴァナの意味となるが、その直後に「十頭神」と出てくるのはラーヴァナの異名であり、この場合はラーヴァナを指すことがわかる。

一方、南方 [1975] 379-386 では平安時代末期の治承年間 (1177-1181) に成立したとされる『宝物集』巻五 [平康頼著] を節略・引用してラーマ物語が古くから日本に於いても知られていたことを紹介しているが『宝物集』の中には『六波羅密經』に詳説してある旨が記されている。また三国呉の訳経僧である康僧会訳の『六度集經』 [呉太元元年 (251) 一天紀四年 (280) 訳出] に於いても節略・引用してラーマ物語が見られることを紹介している。然しながらこのなかにはラーマやシーターといった固有名詞は見られない。その他としては『大莊嚴論經』 (T. 4.273a23, 281a1-2) [鳩摩羅什訳] には「羅摩 (ラーマ) が草橋を造って楞伽 (ランカー) 城に至る」ことや「聚落の主の為に羅摩延書 (ラーマヤナ) 又婆羅他書 (マハーバーラタ) を説く」こと、『大智度論』 (T. 25.229b4-9) [鳩摩羅什訳] では「十頭羅刹 (ラーヴァナ) がラーマの妃シーターを掠奪した時」のこと『大方広仏華嚴經』 (T. 10.731c17-21) [般若訳] では「天と阿修羅とが常に共に戦い、十頭羅刹を伐ち、南海の楞伽大城を焚焼する…」との記述が見られる、としている。また同書では『三世相<sup>69</sup>大雜書』、『東海道名所記』<sup>70</sup>四に記載さ

<sup>69</sup> 三世相：仏教の因果説と卜筮の法と陰陽家の五行相生・相剋の説とを交え、人の生年月日等から三世の因果・吉凶・善惡を判断すること。またそれを説いた書物のことを言う。日本大辞典刊行会編。1975。日本国語大辞典 (Vol. 9)。東京：小学館。268 参照。

<sup>70</sup> 『東海道名所記』 [仮名草子。6 卷 6 冊。浅井了意作。万治年間 (1658-1661)]

れている「牛頭天王（祇園精舎の守護神）が頗利采女を娶って南天竺夜叉国の巨旦王を伐つ」という物語や御伽草子『梵天国』に見られる「中納言が梵天王の娘を娶ったのを羅刹国の「はくもん」王に奪われた後に取り戻した」とする物語に対してラーマ物語との関連性を示唆している。

ここで『楞伽阿跋多羅宝經』四卷を翻訳したとされる求那跋陀羅〔Guṇabhadra、太元十九年（394）—泰始四年（468）〕が劉宋元嘉十二年（435）—元嘉二十年（443）に訳出したとされる『寶頭盧突羅闍為優陀延王說法經』（T. 32.785a17-18）には勇健雄武。如羅摩延阿純之等。「勇健にして、雄武なること羅摩延阿純の等の如し」とある。上述の波線箇所であるが、ここで『ラーマーヤナ』（羅摩延）の阿純（Arjuna）なのか、或いは「羅摩とアルジュナ」として「羅摩延」の「延」を誤りとみるのか、或いは「羅摩王とアルジュナ」として、「延」と「王」との発音の混同によったものとみるか、ここでは恐らく「ラーマとアルジュナ」として例示していると思われる。また同經（T. 785c12-13）にも羅摩。害十頭羅刹。及數千億羅刹之衆。「羅摩、十頭羅刹及び數千億羅刹の衆を害せり」としていてラーマ（Rāma）と十頭羅刹（Rāvaṇa）とのことが記されている。四卷楞伽では『羅婆那王勸請品』に関しての言及は為されていないが、それと緊密な関係を持つ『ラーマーヤナ』等に関する見聞が求那跋陀羅にあったことは窺い知ることが出来る<sup>71</sup>。

#### サンスクリット校訂テキストの補註

1. 南條 [1956] 2, 1-2 等では「様々な衆生の心の行動の形〔に依じて〕、〔救済の爲の〕方法である制御を身に付けた者であって」となるが、ここでは實叉難陀訳の隨衆生心現種種形、方便調伏。「衆生の心に隨い、種種の形を現じて、方便し調伏し

---

の成立・刊行.]

樂阿彌という道心者の京への旅を、諧謔等をおりまぜて綴った道中記。日本大辞典刊行会編。1975。日本国語大辞典（Vol. 14）。東京：小学館。424 参照。

<sup>71</sup> またこの他にも原實。1978。「ラーマ物語と桃太郎童話」。オリエント学インド学論集：足利淳氏博士喜寿記念／日本オリエント学会編。東京：国書刊行会。523-539。がある。そこではラーマ物語と桃太郎童話との関係性を民俗学的視点から考察している。

たまえり」とチベット訳の *sems can gyi sems sna tshogs dang | gzugs dang | tshul dang | 'dul ba rnam pa tha dad pa'i cha byad'chang ba* | 「衆生の様々な種類の心と形と方法と教化との様々な種類を保持しており」と Pa1 とに基づいて推定している。

2. 南條 [1956] 7-8 (…*svapratyātmāryajñānatarkadr̥ṣṭitirthyāśrāvaka-pratyeka-buddhārya viṣaye tadbhāvitodharmodeśitah.*) に於ける解釈として安井 [1976] 3, 336 では下線部の箇所を校訂して *°pratyekabuddhānāryaviṣaya* としている。また常盤 [1994] 2, 132 では菩提流支訳を勘考させて *°pratyekabuddhāviṣayāryaviṣaye* と校訂している。また『入楞伽經』[1936] 2 の翻訳も菩提流支訳を勘考させているものと思われる。また『梵文入楞伽經』[1927] 1 の翻訳では「…自内身の聖智、臆度邪見、外道声聞独覺の聖場に於て（のみ）行すべき法は説かれたり」としており、全面的にサンスクリット語を直接的に訳している。一方 D. T. Suzuki [1956] 4 では …the Truth realisable by noble wisdom in one's inmost self, which is beyond the reasoning knowledge of the philosophers as well as the state of consciousness of the Śrāvakas and Pratyekabuddhas. と翻訳されていてこれに関する註で漢訳を勘考させたことが述べられている。また土田 [1983] 378 (1.1.2.7.2.1 の5を参照) でも「…自らの内面の聖なる智という（哲学論師たちの）思惟の見解や外道・声聞・縁覚（の理解）を超えたことがらについて、このような（聖智）によって思惟された法を説いている」と翻訳されていて、これに関する註でチベット訳や漢訳の如く何らかの否定辞の必要性を述べている。ここで菩提流支訳を確認すると「…説自内身聖智證法、離於一切邪見覺觀、非諸外道、聲聞、辟支佛等修行境界、」…自内身の聖智證法を説き給へり。一切の邪見、覺觀を離れて諸の外道、聲聞、辟支佛等の修行の境界には非ざりき、となっている。またチベット訳を確認しても (…*'phags pa so so rang gis rig pa'i ye shes | rtog ge'i lta ba mu stegs can dang | nyan thos dang rang sangs rgyas dang | 'phags pa'i yul ma yin pa de dag gis bsgoms pa'i chos bstan te* |) となっていて、漢訳に於ける「…非…境界」に該当する箇所がチベット訳では (*yul ma yin pa*…) とされ、明らかに各々否定辞が付されていることを確認することができる。然るに漢訳とチベット訳とからこの箇所の想定をするにあたり三種類を提示したい。先ず 1. *°pratyeka-buddha-anārya-viṣaye*, 2. *°pratyekabuddha-aviṣaye* を見てみると 1 の場合は *ārya* を残して *an* という否定辞を付すことによって、できる限り〔写本等の〕テキストを含めた形の残存可能な想定によるものであり、チベット訳を念頭においている。2 の場合は *ārya* を削除して *a* という否定辞を *viṣaya* に直接的に付すことによって漢訳に依拠している。

また 3 の場合は菩提流支訳に於ける「辟支佛等」の「等」がサンスクリット原文、チベット訳、実又難陀訳では確認されないが、「等 *adi*」の意味をサンスクリット原文から反映させているとすると *°pratyekabuddha-ādy-aviṣaye* と復元されると思われる。この場合 *ādy* の *dy* と *ārya* の *ry* との発音の混同、更に写本では全てではないにせよ、通常〔子音等の〕重複が見込まれているので *adyya* と *āryya* とによつ

て一段と発音の同化が見られ、更に北方写本文字からすると *dyya* と *yya* との結合関係の判別が困難なことも想定され得るのでこの様な誤写が伝承されたとも考えられる。現段階では3に基づいて校訂する。G. Bühler [2004] PLATE6, TABLE6 等参照。

3. この箇所に関しては、サンスクリット原文では以下のようにになっている。Ye paśyanti yathādr̥ṣṭam na te paśyanti nāyakam, apravṛttivikalpāś ca yadā buddham na paśyati, apravṛttibhave buddhaḥ sambuddho yadi paśyati. 問題となるのは下線部の否定辞 *a* であるが、このまま訳すと「[あるものを] 見たままに理解する者達、彼らは、導師を理解することがない。その場合に、観念が働いていない者も、覚りを体験できない。[彼] が完全なる覚者を体験するには、[観念が] 働いていない状態に於いてである」とされ、明らかに整合性を欠いていると思われる。チベット訳もこれに従うが、次に菩提流支訳を見てみると、如見物爲實、彼人不見佛、不住分別心、亦不能見佛。「如し物を見て實と爲さば、彼の人、佛を見ず。分別心に住せざるも、亦佛を見ること能はず」となる。こちらは観念が働いていなくとも、覚りを体験できない、という意味になると思われるが、「観念が働いている」と「観念が働いていない」とのその両者〔ここでは後者が強調されると思われる〕から離れた状態を明示していることは窺い知ることができる。更にこれに続く偈頌として不見有諸行、如是名爲佛、若能如是見、彼人見如來。「諸行有るを見ざる。是の如きを名づけて佛と爲す。若し能く是の如く見ば、彼の人如來を見る」とあり前の偈頌が後に接続することによって一応の繋がりが保たれているとみることができ、サンスクリット語原文では先に挙げた偈頌で終わっているのでここでは否定辞 *a* を省略して読むことが妥当と言える。一方、実叉難陀訳によれば、見佛聞法皆是分別。如向所見不能見佛。不起分別是則能見。「佛を見、法を聞くこと皆是れ分別なり。向に見る所の如く佛を見ること能わず。分別を起こさざるは、是れ則ち能見なり」としてこの解釈もまた、「観念が働いている」ことの否定によって覚りの体験が可能であることが述べられているので、サンスクリット原文の否定辞の省略を反映させているのものであるとも考えられ得る。安井 [1976] 10 はチベット訳を勘考させて翻訳しているようあり、サンスクリット原文のように否定辞は付されたままである。然しながら『梵文入楞伽經』[1927] 6 或いは『入楞伽經』[1936] 9 は実叉難陀訳を勘考させて翻訳しているようである。一方、D. T. Suzuki [1956] 9 では、「観念が働いている」と「観念が働いていない」との二元論的な認識の停止によって、意識の領域ではあるがそれを超越した境地を示しているように捉えられていて、サンスクリット原文のまま翻訳されている。また、常盤 [1994] 9 はサンスクリット原文のまま翻訳されているのであるが、その註で『金剛般若經』[T. 8.775a13-17] を比較として引用して「覚者そのもの」と「覚者の体験そのもの」との対応関係を提示しているものと思われる。

### 1.3. 『楞伽經』に関する編集規定

#### 1.3.1. サンスクリット語校訂テキストについて

サンスクリット語校訂テキストを作成するに当たり、筆者が心がけたことは、先ず出版された刊本、マイクロフィルム、データベース化されたものの等の参考文献類から更に筆者の都合上、現段階で参照し得たものを校訂テキストに反映させようとしたことである。当然のことながらそれらを全面的に駆使して校勘することが必然的であるが、残念ながら時間の都合上、省略されているところがある。然しながら写本 NG1 に関しては全面的に参照することが可能だった。よって同写本の異読に関しては出来る限り忠実に註記しようとしたので、一度凡例に示して以下同様、とすれば許されそうなものに関しても繰り返し註記した。例えば写本中の表記で *sarvva*, *dharma*, *pūrvva* 等に関しては *r* に接続する子音の重複を敢えて註記し、また、例えば *sattva* を *satva* としている箇所に関しても異読を挙げている。また、校訂テキスト作成に於いては南條 [1956] を底本としているが、P. L. Vaidya [1963] も十分に活用している。異読の提示に関しては異読が示されている写本等の略号を最初に示し、その後には：(コロン) を挟んで直後に異読を挙げている。その際に筆者が写本等と校勘して妥当であると推察した単語が本文中に挿入されている。然しながら底本や他の参照し得た写本類とチベット訳或いは漢訳と比較して、サンスクリット原文を校訂する方が妥当であると見做した場合には、em (emendation, 訂正箇所) として訳註に提示してある。また、必要がある場合には、それに関する解釈を和訳の訳註に反映させてある。それ以外に関しては em として提示してあるか、或いは底本の中の綴り間違いが、別の研究によって指摘されている場合には校訂テキストに直接的にそれらが反映されている為に、提示していないことがある。また、訳註に [cf. BHG]、[cf. BHD] が記されている箇所が数ヵ所あるが、これは文法的或いは辞書的な見解の提示を意味している(羽田野 [1993] の註記参照)。また、例えば、テキスト中の (NG1: 1, 6) とは NG1 の写本の頁と行数とを表している。この写本は、一葉が 6 行で終わっているが、その 6 行目の最後の文字の後に挿入している。これによって

写本箇所が速やかに確認できるように便宜的に付してある。

### 1.3.2. チベット訳校訂テキストについて

チベット訳校訂テキストに関してもサンスクリット語校訂テキストと同様とまでは言えないものの P（北京版）を底本としながら異読などを記した。然しながらこの校訂作業に関しても全ての写本と全面的に対決していない。そこでサンスクリット語と同様に種類の写本、即ち TM に関しては全面的に参照することが出来た。そこでこれに関しても例えば句の区切りを示す shad (I) や節・文の区切りを示す nyis shad (II) 或いは文章の大段落を示す bzhi shad (III) 等を何れかの読み方、例えば、dang の後続に shad (I) が必ずはあるとか、或いは並列に事物が挙げられている時〔例えば、外道 | 声聞 | 独覚 |、或いは外道 声聞 独覚 |〕等に、または、文脈上等によっても異なる場合があるので統一する必要があると思われるが、時間の都合上、北京版を模範としながらその他の版の区切りによる区切り方を提示するに留めてある。また、異読の提示に関してはサンスクリット語校訂テキストと同様であるが、em に関しては時間の都合上、行っていない。また、サキャ派やカルマ派等のデルゲ版系統では、rin chen spungs shad が使用されていたようであるが、今回はそれを表記せずにあくまでも shad (I) を使用した。また、葉の書き出しの雲型の二連雲 (nyi zla) 等に関しても表記していない。また、表記に関してはワイリー方式を使用している。また、慣例上サンスクリット語校訂テキスト及び漢訳校訂テキストで使用した記号等は使用せずにしてある。

### 1.3.3. 漢訳校訂テキストについて

漢訳校訂テキストに関してもチベット語校訂テキストとはほぼ同様である。また、数多の古写経の内、金剛（『金剛寺一切経』）に関しては全面的に参照することが出来た。底本としては大（『大正新脩大藏経』）の本文を全面的に採用している。また、その脚注に関しては校訂テキストの註記に挙げている。また、漢字の字体に関して、校訂テキストは大と同様の〔正〕字体であるが、註記に関しては常用漢字を使用している箇所もある。また、異

体字に関しては註記していない箇所もある。また、『金剛寺一切經』の行間の訂正をテキストには採用している。

#### 1.3.4. 訓読について

訓読に関しては、菩提流支訳を『国訳一切經』〔印度撰述部 經集 7〕[1989] 71-86、実叉難陀訳を『国訳大藏經』89-105〔第4巻〕[1974]、『昭和  
新纂国訳大藏經』〔經典部第7巻〕[1977] 1-14の伝統的な訓読方法に全面的に基づいている。

#### 1.3.5. 記号について

ここでは『楞伽經』第1章の羅婆那王勸請品 (Rāvaṇādhyeṣanā-parivartah) を扱う際の校訂テキストの記号について説明をしたい。先ず、最初に便宜上、見出しを付した。然しながらその分け方は必ずしも内容等に基づいて為されている訳ではなく、校訂テキストと註記との調和をとる為に、つまり1頁に校訂テキストのみが、次頁にそれに対する註記だけになることを避ける為に、敢えて歪な切り方をしている場合もある。サンスクリット語校訂テキスト1頁を例にとると [Skt. 1.1. Nj. 1, 2] という箇所の [Skt. 1.1.] が見出しを示している。これは初めの1が「節」、次の1が「項」という意味である。通常ならば「羅婆那王勸請品」をも取り入れると同箇所が [Skt. 1.1.1] となるが、同品は以下同様なので敢えて記さなかった。また、「項」をより細分化させて「目」という見出しを付けることも可能であったが今回は省略した。よって [Skt. 1.1.] とは [サンスクリット語テキス1節1項] という意味である。

#### 校訂テキストに使用した記号

- … 判読ができない文字
- … 文字が欠けているまたは欠けているが推定可能〔可能なものはテキストに反映〕
- 一文字分のスペース
- <> 消去すべき文字

／／ を消去すると同時に消去されるべき文字

サンسكريット語の音写語

[ ] 想定された註記

[. cho, i, tib.] 〔求那跋陀羅訳・菩提流支訳・チベット訳に基づいて〕想定された註記

[. chi, ii, tib.] 〔菩提流支訳・実叉難陀・チベット訳に基づいて〕想定された註記

[. chii.] 〔実叉難陀訳に基づいて〕想定された註記

[. tib.] 〔チベット訳に基づいて〕想定された註記

BHG *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* の Grammar の該当箇所参照

BHD *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* の Dictionary の該当箇所参照

em 訂正箇所

## 略号

サンسكريット語テキスト関係

- ・ A: Royal Asiatic Society.
- ・ C: Cambridge Univ.
- ・ I: Tow parts published by S. C. Das and S. C. A. Vidyabhusana, at Darjeeling, India.
- ・ K: Kawaguchi, No. 331.
- ・ R: Some extracts found in Rajendralala Mitra's works.
- ・ T: Takakusu, No. 333.
- ・ T1: Kawaguchi, No. 328.
- ・ T2: Kawaguchi, No. 329.
- ・ T3: Takakusu, No. 332.
- ・ T4: Kawaguchi, No. 330.
- ・ Pal: Bibliothèque Nationale département des manuscrits, Catalogue du Fonds Sanscrit par J. Filliozat, no. 95.



- ・ Pa2: Bibliothèque Nationale département des manuscrits, Catalogue du Fonds Sanscrit par J. Filiozat, no. 96.
- ・ Ng1: Nepal-German Manuscript Preservation Project.

## チベット語テキスト関係

- ・ C: Co-ne edition.
- ・ D: sDe-dge edition.
- ・ K: Khu-re edition.
- ・ L: Li-thang edition.
- ・ N: sNar-thang edition.
- ・ P: Peking edition.
- ・ Pc: Pelliot's collection.
- ・ Bm: British Museum.
- ・ TM: Stog Palace Manuscript.
- ・ Y: gYung-lo edition.
- ・ Z: Zhol-edition.

## 漢訳テキスト関係

- ・ 金：金藏廣勝寺本.
- ・ 石：房山石經.
- ・ 資：資福藏.
- ・ 磧：磧砂藏. [≡・宋（本）：南宋思溪版]
- ・ 普：普寧藏. [=・元（本）]
- ・ 南：永樂南藏.
- ・ 徑：徑山藏. [≡明（本）：嘉興藏]
- ・ 清：清藏. [=乾隆大藏經]
- ・ 麗：高麗藏（再彫版）.
- ・ 宮：宮内省図書寮書陵部本〔旧宋本（東禪寺版＋開元寺版）〕
- ・ 大：大正新脩大藏經.
- ・ Zh：中華大藏經.

- ・金剛：金剛寺一切經.
- ・北京図書館蔵 敦煌写經：実叉難陀（七卷本）；イ：No. 339, ロ：No. 340, ハ：No. 341, ニ：No. 342, ヘ：No. 344, ラ：No. 360
- ・スタイン将来敦煌文書漢訳文献 実叉難陀（七卷本）；c: No. 3945, s: No. 1074, t: No. 2920. 菩提流支訳（十卷本）；A: No. 937

## 1.3.1.1. Critical Edition of the Sanskrit Original

*Laṅkāvatāra-sūtram*<sup>1</sup>

[Skt.1.Nj.1.2] Oṃ namo ratnatrayāya, om namaḥ sarvabuddhabodhisattvebhyaḥ<sup>2</sup>.

[Skt.1.1.Nj.1.2] Nairātmyaṃ<sup>3</sup> yatra dharmāṇāṃ<sup>4</sup> dharmarājena<sup>5</sup> deśitam<sup>6</sup>, Laṅkāvatāraṃ<sup>7</sup> tatsūtram iha<sup>8</sup> yatnena likhyate<sup>9</sup>.

[Skt.2.1.Nj.1.5] Evaṃ<sup>10</sup> mayā śrutam: Ekasmin<sup>11</sup> samaye, Bhagavāṃ<sup>12</sup> Laṅkāpure<sup>13</sup> samudra-malayaśikhare<sup>14</sup> viharati<sup>15</sup> sma. Nānāratnagotra<sup>16</sup>

<sup>1</sup> Vd: ||saddharmalaṅkāvatārasūtram||

<sup>2</sup> In A. only. C, I, K: *oṃ namaḥ sarva* (NG1: *sarvva*) *jñāya* || *samāptā ca suvikrāntavikrami pariṣṛcchā prajñāpāramitā nirdeśaḥ* (NG1: *nirddeśaḥ*) *sarva* (NG1: *sarvva*) *sattva* (NG1: *satva*) *saṃ* (NG1: *san*) *toṣaṇād bodhisattva* (NG1: *bodhisatva*) *piṭakāḥ* || R: *om namaḥ śrīāryyasarvvajñāya, samāptā ca suvikrāntavikrami pariṣṛcchā prajñāpāramitā nirdeśaḥ sarvasattvasaṃtoṣaṇād bodhisattvapīṭakāntaṃ*

<sup>3</sup> NG1: *nairātmya*

<sup>4</sup> R: *dharmā hi*

<sup>5</sup> NG1: *dharmma*<sup>o</sup>

<sup>6</sup> R: *bhāṣitaṃ* NG1: *deśitaṃ*

<sup>7</sup> R: *laṅkāvatāre* NG1: *laṃkāvatāra*

<sup>8</sup> R: *idaṃ*

<sup>9</sup> A, Vd, Tib omit this śloka verse. Vd: add *1 rāvaṇādhyeṣaṇāparivartaḥ prathamah* |

<sup>10</sup> Pa1, NG1: *evam*

<sup>11</sup> T3, Pa1: *ekasmiṃ*

<sup>12</sup> T3, Pa1, Pa2: *bhagavāṃ* NG1: *bhagavān*

<sup>13</sup> T3, Pa1, Pa2: *\*puri* NG1: *laṃkāpūra*

<sup>14</sup> T3, Pa1, Pa2: *\*malayagiriśikhare*

<sup>15</sup> Pa1: *viharati* NG1: *viharatir*

puṣpapratimaṇḍite mahatā bhikṣusaṃghena, sārdhaṃ mahatā ca bodhisattva<sup>17</sup>gaṇena nānābuddha<sup>18</sup>kṣetrasaṃnipatitair<sup>19</sup> bodhisattvair mahāsattvair<sup>20</sup> anekasaṃmādhivaśitābalābhijñāvikrīḍitair<sup>21</sup>, Mahāmati<sup>22</sup> bodhisattvapūrvam-gamaiḥ<sup>23</sup> sarvabuddhapāṇyabhiṣekābhiṣiktaiḥ<sup>24</sup>, svacittadr̥śyagocaraparijñānārthakuśalair<sup>25</sup> nānāsattvacittacitrarūpanayavinayadhāribhiḥ<sup>26</sup>, (NG1: 1, 6) pañca<sup>27</sup>dharmasvabhāvavijñāna-nairātmyādvayagatim<sup>28</sup> gataiḥ.

[Skt.2.2.Nj.2,3] Tena khalu punaḥ<sup>29</sup> samayena Bhagavān Sāgaranāgarājabhavanāt<sup>30</sup> saptāhenottir-ṇo<sup>31</sup> 'bhūt<sup>32</sup>. Anekaśakrabrahmanāgakanyāko-

<sup>16</sup> Pal: *nānāratnagośātra*°

<sup>17</sup> T2: *bedhisatva*° NG1: *bodhisatva*°

<sup>18</sup> T2: *nābuddha*°

<sup>19</sup> NG1: *\*taiḥ*

<sup>20</sup> Vd: *mahāsattvaiḥ*

<sup>21</sup> NG1: *\*vaśitā*° T3, Pa2: *\*vaśitābalobhi*° T3: *\*vikrīḍitair* Pal: *\*vikrīḍitair*

<sup>22</sup> T3, T4: *mahāmatir* T2: *mahā*°

<sup>23</sup> NG1: *ma tibodhisatvapūrvam*°

<sup>24</sup> NG1: *sarvva*° T2: *\*buddhayāṇy*° Pal: *\*pāṇyebhiṣ*° A, I, K, R, T1, T2, T4: *\*abhiṣikābhiṣiktaiḥ*

<sup>25</sup> T3: *\*dr̥ṣṭya* R: om. *\*dr̥ṣya* Pal: *\*gocala*° A, K: *\*parijñāna cārtha*° C: *\*parijñānāvartha*° R: *\*parijñānārtha*° T1, T4: *\*parijñānanāva*° T2: *\*parijñānā ca*° Pal: *\*parijñānabhāve*° T1, NG1: *\*kuśalai* [cf. BHG 8.107. Inst. Pl. -ai?]

<sup>26</sup> Pal, NG1: *nānāsattva*° Pal, Tib: *\*cittacitra*° Nj, Vd, T1, T2, T4: *\*cittacaritra*° T3, Pa2: missing T3: *\*rūpaveśavinaya*° R: *\*rūpaṇavinaya*° T4: *\*vinayadveśadhāribhiḥ* Pal: *\*vinayadveśadhāribhiḥ* T2: *\*vinayadveśadhāribhirih* em: *nānā-sattva-citta-citra-rūpa-naya-vinaya-dhāribhiḥ*, see Supplementary Notes 1 of the pp. 82–81.

<sup>27</sup> Nj, Vd, Pal: *pañca*° *paṃca*°: in other Mss

<sup>28</sup> NG1: *dharmma*° Pal: *\*gatibhi*° [*\*nairātmyadvaya*° cho, i, tib.]

<sup>29</sup> NG1: *ṇo*

<sup>30</sup> Pal: *sāgalanāga*° Pa2: *\*bhavanān*

<sup>31</sup> Nj, Vd: *sapto*° [cf. BHG 17. 11. sg. -ena] T3, Pa2: *\*heto*° T2, T3, Pa2: *\*tīrṇā*

<sup>32</sup> In other manuscripts, *\*bhūd*. Vd: *\*bhūt*

ṭibhiḥ<sup>33</sup> pratyudgamyamāno Lankāmalayam<sup>34</sup> avalokya smitam akarot:  
 “Pūrvakair<sup>35</sup> api tathāgatair arhadbhiḥ samyaksambuddhair<sup>36</sup> asmiṃ<sup>37</sup>  
 Lankāpurīmalayaśikhare<sup>38</sup> {sva<sup>39</sup>pratyātmāryajñānaḥ, tarka<sup>40</sup>drṣṭitīrthya<sup>41</sup>  
 śrāvakapratyeka<sup>42</sup> buddh-ādyāviśaye<sup>43</sup>}<sup>44</sup> tadbhāvito<sup>45</sup> dharmo<sup>46</sup> deśitaḥ.  
 Yan nv<sup>47</sup> aham apy atraiva Rāvaṇaṃ Yakṣādhi-patim adhikṛtyaitad  
 evodbhāvayaṃ<sup>48</sup> dharmam<sup>49</sup> deśayeyam<sup>50</sup>”.

Asrauṣīd Rāvaṇo rākṣasā<sup>51</sup> dhipatis tathāgatādhiṣṭhānāt: Bhagavān  
 kila Sāgaranāgarājabhava-nād uttīryānekaśakrabrahmanāgakanyākoṭibhiḥ<sup>52</sup>  
 parivṛtaḥ puraskṛtaḥ samudratarāṅgān<sup>53</sup> avalok-yā<sup>54</sup>layaviññāno (NG1: 12)

---

<sup>33</sup> NG1: *koṭihīḥ*

<sup>34</sup> NG1: *laṃkā°*

<sup>35</sup> NG1: *pūrvva°*

<sup>36</sup> NG1: *\*buddhaiḥ°*

<sup>37</sup> NG1: *asmi*

<sup>38</sup> NG1: *laṃkā°sikhale*

<sup>39</sup> T4: *om. sva*

<sup>40</sup> NG1: *\*āryya°* T2: *\*ñānakarka°* T4: *\*ñānatatka°*

<sup>41</sup> A, K: *\*drṣṣṭi tīrya°* T2: *\*drṣṭitīrya°*

<sup>42</sup> Pa1: *\*śrāvakapreka°*

<sup>43</sup> NG1: *\*āryya°* Pa1: *\*vikhaye* T3, Pa2: *\*viśaya*

<sup>44</sup> In all manuscripts, {*svapratyātmāryajñānatarkadrṣṭitīrthyaśrāvakapratyeka-*  
*buddhāryaviśaye*}.

em: *svapratyātmāryajñānaḥ, tarkadrṣṭitīrthyaśrāvakapratyekabuddhādyāviśaye*, see  
 Supplementary Notes 2 of the pp. 81–80.

<sup>45</sup> Pa1: *\*bhāvibho*

<sup>46</sup> NG1: *dharmmo*

<sup>47</sup> NG1: *ya nv*

<sup>48</sup> A: *\*bhāvayem*

<sup>49</sup> NG1: *dharmmam*

<sup>50</sup> A: *deśayeyaya*

<sup>51</sup> T3: *yakṣā°*

<sup>52</sup> NG1: *uttīryyā°koṭihīḥ*

<sup>53</sup> Nj, T2: *\*taraṅgān* Vd, T4, Pa1: *\*taraṅgān* Pa2: *\*taraṅgām* T3: *taram* [cf. BHG 10.

165. Nom. -acc. pl. -in, -im.]

dadhipravṛttivijñānapavana<sup>55</sup> viṣaye preritāms<sup>56</sup> tebhyaḥ saṃnipati<sup>57</sup>  
tebhyaś cittāny avalokya, tasminn eva sthita udānam udānayati sma.

[Skt.2.3.Nj.2,15] “Yan nv<sup>58</sup> ahaṃ<sup>59</sup> gatvā Bhagavantam adhyeṣya Laṅkā<sup>60</sup>  
praveśayeyam<sup>61</sup>, tan me syād dirgharātram arthāya hitāya sukhāya  
devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca”.

Atha Rāvaṇo Rākṣasādhipatiḥ saparivārah pauspakam vimānam adhir-  
uhya yena bhagavāms<sup>62</sup> tenopajagāmapetya vimānād avatīrya<sup>63</sup> saparivāro  
Bhagavantam<sup>64</sup> triṣṛtvaḥ pradakṣiṇīkṛtya tūryatālāvacaraiḥ<sup>65</sup> pravādyad-  
bhir<sup>66</sup> indranīlamayena daṇḍena vaiḍūryamusāra<sup>67</sup> pratyuptāṃ vīṇāṃ  
priyaṅgu<sup>68</sup> pāṇḍunānardhyeṇa vastreṇa pārśvāvalambitāṃ kṛtvā śaḍjaṣ-  
ṣabha<sup>69</sup> gāndhāra<sup>70</sup> -dhaiva<sup>71</sup> taniṣādamadhyamakaisiki<sup>72</sup> gītasvaragrāma-

<sup>54</sup> Pal: *avalokṣā*°

<sup>55</sup> Pal: *ṣavane*° NG1: *ṣavanaya*

<sup>56</sup> A: om. *ṣiṣaye* K: om. *ṣiṣa pre*° T3: *ṣiṣa*° C, I: om. *pre*° Pal: *ṣiṣaye citāms*  
[*ṣiṣayapre*°: chi, ii, tib.] [cf. BHG 8. 93. Acc. pl. -ās, -āḥ]

<sup>57</sup> NG1: *sannipati*

<sup>58</sup> NG1: *ya nv*

<sup>59</sup> NG1: *aha*

<sup>60</sup> NG1: *laṅkā*

<sup>61</sup> NG1: *praveśayeyan*

<sup>62</sup> NG1: *bhagavā*

<sup>63</sup> NG1: *avatīrya*

<sup>64</sup> NG1: *bhagavantam*

<sup>65</sup> NG1: *tūrya*°

<sup>66</sup> NG1: *bhiḥ*

<sup>67</sup> I, K: *susāra*°

<sup>68</sup> I: *priyaṅga*°

<sup>69</sup> In other manuscripts, *saharṣya*. Vd: *śaḍjaṣṣabha*°

<sup>70</sup> A: *parjjaṅgāndhāna*° C: *ṣaṅgaṅāndhāna*° NG1: *gāndhāna*°

<sup>71</sup> C: *vam*

<sup>72</sup> C: *kaisikau*° In other manuscripts, *kaisika*°.

em: *kaisikī*

mūrchanādiyuktenān usārya<sup>73</sup> salilam<sup>74</sup> vīṇām anupraviśya gāthābhir  
gītair anugāyati sma:

[Skt.3.1.Nj.3,10] “Citta<sup>75</sup> svabhāvanaya<sup>76</sup> dharmavidhiṃ<sup>77</sup> nairātmyam<sup>78</sup>  
drṣṭivigatam<sup>79</sup> hy

amalam<sup>80</sup>, pratyātma<sup>81</sup>vedyagati<sup>82</sup>sūcanakam deśe hi nāyaka<sup>83</sup> iha<sup>84</sup> dhar-  
manayam<sup>85</sup>. (1)

Śubha<sup>86</sup> dharmasaṃcita<sup>87</sup> tanuṃ sugatam nirmāṇanirmita<sup>88</sup> pradarśana-  
kam<sup>89</sup>,

Pratyātmavedyagatidharmaratam<sup>90</sup> Laṅkāṃ<sup>91</sup> hi gantu<sup>92</sup> samayo'dya,  
mune. (2)

<sup>73</sup> A: om. *usārya* NG1: *usāryya*

<sup>74</sup> I: *sariram*

<sup>75</sup> Pal: *cirtta*°

<sup>76</sup> A: om. *ya*°

<sup>77</sup> T3: *\*nidhiṃ* Pa2: *\*nidhim* Pal: *\*vidhin* NG1: *\*vidhi* [*dharmavidhiṃ*. chi, ii, tib.]

<sup>78</sup> T3, Pal, Pa2: *\*ātmya*

<sup>79</sup> Pal: *\*vigata*

<sup>80</sup> NG1: *amalam*

<sup>81</sup> T3: *\*pratyātmya*°

<sup>82</sup> Pal: *\*vedyaghati*°

<sup>83</sup> [*nātha*. ch, tib]

<sup>84</sup> T3: *nāyakeha* Pal: *nāthaha*

<sup>85</sup> NG1: *dharmmanaya*

<sup>86</sup> A, I, K, T1, T2, T4: *subha*°

<sup>87</sup> T1: *\*dharmāḥ tanuṃ*° T3: *\*dharmacayatatanuṃ*° P2: *\*dharmasaṃcayatatanuṃ*° NG1: *\*dharmma*°

<sup>88</sup> C, I, T1, T4: *\*nirvāṇa*° T2: *\*nirvārvā*° Pal: *\*nirvāṇanistita*° NG1: *nirmāṇanirmmi-  
ta*°

<sup>89</sup> Pal: *\*pradarśakam* NG1: *\*pradarśanakam*

<sup>90</sup> NG1: *\*dharmma*°

<sup>91</sup> T3: *laṅkā* NG1: *laṅkā*°

<sup>92</sup> Pal: *gantuṃ* A, NG1: *saṃtu* I: *gaṃ tuṃ* K: *saṃtuṃ*

Laṅkā<sup>93</sup> imā<sup>94</sup> pūrva<sup>95</sup>jinādhyuṣitā<sup>96</sup> putraiś ca teṣāṃ bahurūpadhar-  
aiḥ,  
deśe hi nātha, iha dharmavaraṃ<sup>97</sup> śroṣyanti<sup>98</sup> Yakṣabahurūpadharāḥ”. (3)

[Skt.3.2.Nj.4.5] Atha Rāvaṇo Laṅkādhīpatiḥ<sup>99</sup> (NG1: 2, 6) totakavṛttenānu-  
gāyya punar api gāthābhi-gītenānugāyati sma:  
“Saptarātreṇa<sup>100</sup> Bhagavān<sup>101</sup> sāgarān<sup>102</sup>Makarālayāt,  
Sāgaarendrasya bhavanāt samuttīrya<sup>103</sup> taṭe sthitaḥ. (4)  
Sthitamātrasya buddhasya Rāvaṇo hy Apsaraiḥ saha,  
yakṣaiś ca nānāvividhaiḥ Śuka<sup>104</sup>Sāraṇamaṇḍalaiḥ<sup>105</sup>. (5)  
Rddhyā gatvā tam adhvānaṃ yatra tiṣṭhati nāyakaḥ,  
avatīrya<sup>106</sup> pausṣpakād yānād vandyā pūjya tathāgatam,  
nāma saṃśrāvayaṃs tasmai jinendreṇa adhiṣṭhitaḥ<sup>107</sup>. (6)  
Rāvaṇo'haṃ<sup>108</sup> Daśagrīvo<sup>109</sup> rākṣasendra ihāgataḥ,

<sup>93</sup> NG1: *laṅkā*

<sup>94</sup> Pa1: *imā* NG1: *imām*

<sup>95</sup> NG1: *pūrvva*°

<sup>96</sup> A: *pūrvajinādhyuṣitā*

<sup>97</sup> A, C, K, T: *dharmapāraṃ* T1: *dharmaparaṃ* Pa1: *dharmavala* NG1: *dharmma*°

[*dharmavaraṃ*. tib]

<sup>98</sup> Pa1: *soṣyanti* NG1: *śroṣyamti*

<sup>99</sup> NG: *laṅkā*°

<sup>100</sup> Pa1, Pa2: *°rātrena*

<sup>101</sup> T3, Pa1: *bhagavāṃ*

<sup>102</sup> A, C, K, T, NG1: *sāgarāt*°

<sup>103</sup> NG1: *samuttīrya*

<sup>104</sup> A, C, K, T, NG1: *suka*°

<sup>105</sup> Except Vd, *paṇḍitaiḥ* Vd: *maṇḍitaiḥ* [*maṇḍitaiḥ*. tib]

em: *maṇḍalaiḥ*

<sup>106</sup> NG1: *avatīrya* [otīrya. tib]

<sup>107</sup> C: *adhiṣṭhitaṃ*

<sup>108</sup> NG1: *ahan*

<sup>109</sup> A: *dasagravo* C: *daśagrāvo* K: *dasagravo*



anugrñāhi<sup>110</sup> me Lāṅkāṃ<sup>111</sup> ye<sup>112</sup> cāsmiṃ<sup>113</sup> pure<sup>114</sup> vāsinaḥ<sup>115</sup>. (7)  
 Pūrvair<sup>116</sup> api hi<sup>117</sup> sambuddhaiḥ<sup>118</sup> pratyātmagatigocaram<sup>119</sup>,  
 śikhare ratnakhacite<sup>120</sup> puramadhye prakāśitam<sup>121</sup>. (8)

[Skt.3.3.Nj.5,2] Bhagavān api tatraiva<sup>122</sup> śikhare ratnamaṇḍite<sup>123</sup>,  
 deśe tu dharmavirajaṃ<sup>124</sup> jinaputraiḥ parivṛtaḥ<sup>125</sup>,  
 śrotukāmā vayaṃ cādyā ye ca Lāṅkānivāsinaḥ<sup>126</sup>. (9)  
 Deśanāyananirmuktaṃ<sup>127</sup> pratyātmagatigocaram<sup>128</sup>,  
 Lāṅkāvatārasūtraṃ<sup>129</sup> vai pūrvabuddhānuvarṇitaṃ<sup>130</sup>. (10)  
 Smarāmi pūrvakair<sup>131</sup> buddhair jinaputrapuraskṛtaiḥ,

<sup>110</sup> A, I, K: *anugrñāhi* C: *anugrñāsi*

<sup>111</sup> NG1: *laṅkāṃ*

<sup>112</sup> Pal: om. *ye*

<sup>113</sup> A, I, K, T1, T2, T3, T4, Pal, Pa2, NG1: *cāsmiṃ*

<sup>114</sup> T4: *purevāsinaḥ*° In other manuscripts, *puravāsinaḥ*°.

em: *pure*

<sup>115</sup> Pal: *vāsinaḥ*

<sup>116</sup> NG1: *pūrvvair*

<sup>117</sup> C: *hi* I: *ca* NG: om. *hi*

<sup>118</sup> A: *buddhaiḥ* NG1: *sambuddhaiḥ*

<sup>119</sup> NG: *°gocara* [*°gocararaḥ*]

<sup>120</sup> NG: *ratnakhaciṃte*

<sup>121</sup> [*prakāśitaḥ*]

<sup>122</sup> A, C, K, T, NG1: *tataiva*

<sup>123</sup> K, NG1: *tnamaṇḍite*

<sup>124</sup> NG1: *dharmma*°

<sup>125</sup> C: *ri*

<sup>126</sup> NG1: *laṅkā*°

<sup>127</sup> Pal: *°nimuktaṃ* NG1: *°nirmuktaṃ*

<sup>128</sup> Pal: *pratiātmagatiḥ gācaram* NG1: *°gocaraṃ*

<sup>129</sup> Pal: *laṅkāvatālasūtras* NG1: *laṅkāvatārasūtra*

<sup>130</sup> NG1: *pūrvabuddhānuvarṇitaṃ*

<sup>131</sup> NG1: *pūrvvakaiḥ*

sūtram etan<sup>132</sup> nigadyate Bhagavān api bhāṣatām<sup>133</sup>. (11)  
 Bhaṣiṣyanty<sup>134</sup> anāgate kāle buddhā buddhasutās ca ye,  
 etam eva nayaṃ<sup>135</sup> divyaṃ<sup>136</sup> śikhare ratnabhūṣite,  
 deśayiṣyanti yakṣāṇām anukampāya nāyakāḥ. (12)  
 Divya-Laṅkāpurīramyām<sup>137</sup> nānāratnair vibhūṣitām<sup>138</sup>,  
 prāgbhārāiḥ śitalai ramyai ratnajālavitānakaiḥ. (NG: 2, 12) (13)  
 Rāgadoṣavinirmuktāḥ<sup>139</sup> pratyātmagaticintakāḥ<sup>140</sup>,  
 santy<sup>141</sup> atra Bhagavan<sup>142</sup> yakṣāḥ pūrvabuddhaiḥ<sup>143</sup> kṛtārthināḥ<sup>144</sup>,  
 mahāyānanaye<sup>145</sup> śraddhā<sup>146</sup> niṣiṣṭhānyonya<sup>147</sup>yojakāḥ<sup>148</sup>. (14)

[Skt.3.4.Nj.5.17] Yakṣiṇyo yakṣaputrāś ca mahāyānabubhutsavaḥ,  
 āyātu Bhagavān chāstā Laṅkā<sup>149</sup>-Malayaparvatam. (15)  
 Kumbhakārṇapurogāś<sup>150</sup> ca rākṣasāḥ puravāsinaḥ,

---

<sup>132</sup> NG1: *etat*

<sup>133</sup> C: *bhāṣate*

<sup>134</sup> [*bheṣyanti*]

<sup>135</sup> NG1: *nayan*

<sup>136</sup> NG1: *divya*

<sup>137</sup> NG1: *laṅkāpurīramyāt* [*laṅkāpurīramyā*]

<sup>138</sup> NG1: *‘bhūṣitām* [*bhūṣitā*]

<sup>139</sup> T3: *rāgadoṣavinirmukta* Pa1: *yogadoṣavinirmuktā* Pa2: *rāgadoṣavinirmuktaḥ*  
 NG1: *rāgadoṣavinirmuktāḥ* [*yogadoṣa*°. chi, ii, tib.]

<sup>140</sup> T3, Pa2: *‘cittakāḥ* Pal: *‘cinrnnikāḥ*

<sup>141</sup> T2, Pa2: *saṁty* T3, Pa1: *saty*

<sup>142</sup> T3, Pa2: *bhagavān*

<sup>143</sup> NG1: *pūrvabuddhaiḥ*

<sup>144</sup> T3, Pa1, Pa2: *kṛtāvinaḥ*

<sup>145</sup> T3, Pa2: *‘naya*

<sup>146</sup> T3, Pa2: *śraddhāḥ*

<sup>147</sup> T3, Pa2: *‘yānni*° Pal: *‘yāni*°

<sup>148</sup> Pa1: *yojakāḥ*

<sup>149</sup> NG1: *laṅkā*°

<sup>150</sup> NG1: *kumbha*°

śroṣyanti pratyātmagatiṃ<sup>151</sup> mahāyānaparāyaṇāḥ. (16)

Kṛtādhikārā buddheṣu kariṣyanty<sup>152</sup> adhunā ca vai,  
anukampārtham<sup>153</sup> mahyaṃ<sup>154</sup> vai yā hi Laṅkāṃ<sup>155</sup> sutaiḥ<sup>156</sup> saha. (17)

Gṛham Apsaravargās<sup>157</sup> ca hārāṇi vividhāni ca,  
ramyāṃ cāśokavanikāṃ pratigṛhṇa<sup>158</sup>, mahāmune. (18)

Ājñākaro'ham<sup>159</sup> buddhānāṃ<sup>160</sup> ye ca teṣāṃ jinātmajāḥ,  
nāsti tad yan<sup>161</sup> na<sup>162</sup> deyaṃ<sup>163</sup> me anukampa, mahāmune. (19)

[Skt.3.5.Nj.6.9] Tasya tadvacanāṃ śrutvā uvāca tribhaveśvaraḥ<sup>164</sup>,  
atitair api yakṣendra nāyakai ratnaparvate<sup>165</sup>. (20)

Pratyātmadharma<sup>166</sup> nirdiṣṭaḥ tvaṃ caivāpy anukampitaḥ<sup>167</sup>,  
anāgatāś ca vakṣyanti girau ratnavibhūṣite. (21)

Yogināṃ<sup>168</sup> nilayo hy eṣa dṛṣṭadharmavihāriṇāṃ<sup>169</sup>,  
anukampyo'si yakṣendra sugatānāṃ mamāpi ca. (22)

---

<sup>151</sup> NG1: *gatirm*

<sup>152</sup> NG1: *kariṣyaty*

<sup>153</sup> NG1: *anukampārtham*

<sup>154</sup> K, NG1: *mahya*

<sup>155</sup> A, C: *laṅkā* NG: *laṃkā*

<sup>156</sup> NG1: *sutais*

<sup>157</sup> C: *gṛham-apsaro* ° [*°vargāṃś ca*]

<sup>158</sup> A, C, K, T: *pratigṛhṇa*

<sup>159</sup> NG1: *'ham*

<sup>160</sup> NG1: *buddhānā*

<sup>161</sup> NG1: *yam*

<sup>162</sup> NG1: *naṃ*

<sup>163</sup> NG1: *deyam*

<sup>164</sup> T1, Pa1, NG1: *tr* ° [cf. BHD 256]

<sup>165</sup> NG1: *°parvvate*

<sup>166</sup> NG1: *°dharmmo*

<sup>167</sup> NG1: *anukampitaḥ*

<sup>168</sup> K, NG1: *yoginā*

<sup>169</sup> NG1: *°dharmmavihāriṇāṃ*

Adhivāśya<sup>170</sup> Bhagavāṃs<sup>171</sup> tūṣṇīśamabuddhyā<sup>172</sup> vyavasthitāḥ<sup>173</sup>,  
 ārūḍhaḥ puṣpake<sup>174</sup> yāne Rāvaṇenopanāmite. (23)  
 Tatraiva Rāvaṇo'nye ca jinaputrā viśāradāḥ<sup>175</sup>,  
 Apsarair<sup>176</sup> hāśya lāsyād yaiḥ pūjyamānāḥ<sup>177</sup> purīm<sup>178</sup> ga (NG1: 3-6) tāḥ.  
 (24)  
 Tatra gatvā purīm<sup>179</sup> ramyām<sup>180</sup> punaḥ pūjāṃ pralabdhavān,  
 Rāvaṇādyair yakṣavargair yakṣiṇibhiś ca pūjitāḥ. (25)

[Skt.3.6.Nj.7.4] Yakṣaputrain yakṣakanyābhi<sup>181</sup> ratnajālaiś ca pūjitāḥ,  
 Rāvaṇēnāpi buddhasya hārā ratnavibhūṣitāḥ,  
 jīnasya jīnaputrāṇām uttamāṅgeṣu<sup>182</sup> sthāpitāḥ<sup>183</sup>. (26)  
 Pragṛhya pūjāṃ Bhagavān<sup>184</sup> jīnaputraiś ca paṇḍitaiḥ,  
 dharmam<sup>185</sup> vibhāvayāmāsa pratyātmagatigocaram<sup>186</sup>. (27)  
 Rāvaṇo yakṣavargāś ca saṃpūjya vadatāṃ varam<sup>187</sup>,

---

<sup>170</sup> [dhivāśya]

<sup>171</sup> NG1: bhagavāṃs uṣṇīśamabudhyā

<sup>172</sup> C: tūṣṇīmadhigamya

<sup>173</sup> C: vyatiṣṭhata

<sup>174</sup> C: paṣyike

<sup>175</sup> A, I, K, NG1: viśāradāḥ

<sup>176</sup> C: apsaroḥa

<sup>177</sup> A, K: pūjamānāḥ

<sup>178</sup> C: purīm NG1: pūrī

<sup>179</sup> A, I, K: puraṃ NG1: pūram

<sup>180</sup> NG1: rarmyām

<sup>181</sup> A, C, K, T, NG1: 'kanyābhi [yakṣakanyāyakṣaputrai. tib.]

<sup>182</sup> NG1: uttamāṅgeṣu

<sup>183</sup> [syāpitāḥ]

<sup>184</sup> A, C: bhagavān jina° I, K, NG1: bhagavāṃ jina°

<sup>185</sup> NG1: dharmma

<sup>186</sup> NG1: 'gocaram

<sup>187</sup> NG1: varam

Mahāmatim<sup>188</sup> pūjayanti adhyeṣanti<sup>189</sup> punaḥ punaḥ. (28)  
 Tvaṃ praṣṭā<sup>190</sup> sarvabuddhānām<sup>191</sup> pratyātmagatigocaram<sup>192</sup>,  
 ayaṃ<sup>193</sup> hi śrotā yakṣās ca jinaputrās ca sann iha,  
 adhyeṣayāmi tvāṃ yakṣā<sup>194</sup> jinaputrās<sup>195</sup> ca paṇḍitāḥ<sup>196</sup>. (29)  
 Vādinām tvaṃ mahāvādī yoginām yogavāhakaḥ,  
 adhyeṣayāmi tvāṃ bhaktyā nayaṃ<sup>197</sup> prccha<sup>198</sup> viśārada. (30)  
 Tīrthyadoṣair<sup>199</sup> vinirmuktaṃ<sup>200</sup> pratyekajinaśrāvakaiḥ,  
 pratyātmadharmatāśuddhaṃ<sup>201</sup> buddhabhūmi<sup>202</sup>prabhāvakam<sup>203</sup>. (31)

[Skt.3.7.Nj.8.2] Nirmāya<sup>204</sup> Bhagavāṃs<sup>205</sup> tatra śikharān<sup>206</sup> ratnabhūṣitān  
 anyāni caiva divyāni<sup>207</sup> ratnakoṭīr alaṃkṛtāḥ<sup>208</sup>. (32)

---

<sup>188</sup> NG1: *mahāmatim*

<sup>189</sup> K, NG1: *adhyeṣanti*

<sup>190</sup> I: *tvapraṣṭhāt* K: *tvāṃ praṣṭhā*

<sup>191</sup> NG1: *sarvva*<sup>o</sup>

<sup>192</sup> NG1: *gocaram*

<sup>193</sup> NG1: *aya* [*ahaṃ*. chi, tib.]

<sup>194</sup> A, C: *yakṣām* [*yakṣān*]

<sup>195</sup> A, C: *putrām*

<sup>196</sup> A, C: *paṇḍitān*

<sup>197</sup> A, C: *yakṣāna ahaṃ* I: *bhakṣyāhan naya* K: *yakṣyāha nayaṃ*

<sup>198</sup> A: *prcche*

<sup>199</sup> T1, NG1: *tīrthyadoṣai* T3, Pa2: *tīrthyadoṣa* K: *tīrthādoṣair* [cf. BHG 8.107. Inst. Pl. -ai?]

<sup>200</sup> T2: *vinimuktaṃ* NG1: *vinirmuktaṃ*

<sup>201</sup> NG1: *dharmma*<sup>o</sup>

<sup>202</sup> T1, T2, T4: *buddhabhūmī* K, NG1: *buddhaṃ bhūmī*

<sup>203</sup> T2: *prabhā* [*prāpakam*. chi, tib.]

<sup>204</sup> NG: *nirmāya*

<sup>205</sup> T2: *om. nirmāya bha* Pa1: *nirmāya bhavāns* NG1: *bhavāṃs*

<sup>206</sup> NG1: *śikharā*

<sup>207</sup> C: *divyāni* K, NG1: *divyānī*

<sup>208</sup> [*ratnakoṭīr alaṃkṛtā*]

Ekaikasmin<sup>209</sup> girivara<sup>210</sup> ātmabhāvaṃ vidarśayan,  
 tatraiva Rāvaṇo yakṣa ekaikasmin<sup>211</sup> vyavasthitaḥ. (33)  
 Atra<sup>212</sup> tāḥ<sup>213</sup> parśadaḥ<sup>214</sup> sarvā<sup>215</sup> ekaikasmin<sup>216</sup> hi dṛśyate<sup>217</sup>,  
 sarvakṣetrāṇi tatraiva ye ca teṣu vināyakāḥ. (34)  
 Rākṣasendraś ca tatraiva ye ca Laṅkānivāsi (NG1: 3, 12) naḥ<sup>218</sup>,  
 tatpratispardhinī Laṅkā<sup>219</sup> jinena abhinirmita. (35)  
 Anyās cāśokavanikā vanaśobhāś ca tatra yāḥ,  
 ekaikasmin<sup>220</sup> girau nātho Mahāmatipracoditaḥ. (36)  
 Dharmam<sup>221</sup> dideśa<sup>222</sup> yakṣāya pratyātmagatisūcakam<sup>223</sup>,  
 dideśa nikhilaṃ sūtram<sup>224</sup> śatasāhasrikaṃ<sup>225</sup> girau. (37)

[Skt.3.8.Nj.8,14] Śāstā ca jinaputrāś ca tatraivāntarhitāś<sup>226</sup> tataḥ<sup>227</sup>,

---

209 I, K: *ekaikasmim*

210 A, C, I: *girivare*

211 I, K: *ekaikasmim*

212 T1, T2: *ada* Pal: *anu*

213 T3, Pa2: *tā* Pal: *nā*

214 T3, Pa2: *parśadā*

215 K: *ṣatsarvā*

216 I, K, T2: *ekaikasmim*

217 A, C, K, T: *dṛśya*

218 NG1: *laṃkā*<sup>°</sup>

219 NG1: *laṃkā*<sup>°</sup>

220 I, K: *ekaikasmim* NG1: *ekaikasmi*

221 NG1: *dharmma*

222 K, NG1: *deśa*

223 A: *pratyātmagatisūrakam* NG1: *śūcakam*

224 T3, Pa2: *dideśa sūtram* *nikhilaṃ*

225 Pa2: *śatasāśriyāṃ* I, K: *śatasāhasrakam*

226 T4: *tatraivāṃtarhitā* T1: *tatraivāntahitā* NG1: *tatraivāntarhitā*

[cf. BHG8.78. Nom. pl. -ā]

227 T2: *tante* T3: *nate* Pal: *nante* Pa2: *nabhe*

adrākṣid Rāvaṇo yakṣa<sup>228</sup> ātmabhāvaṃ grhe sthitam<sup>229</sup>. (38)  
 Cinteti<sup>230</sup> kim idaṃ ko'yaṃ deṣitaṃ kena vā śrutam<sup>231</sup>,  
 kiṃ dṛṣṭam kena vā dṛṣṭam nagaro vā kva saugataḥ. (39)  
 Tāni kṣetrāṇi te buddhā ratnaśobhāḥ kva saugatāḥ<sup>232</sup>,  
 svapno'yaṃ atha vā māyā nagaram gandharvaśabditam<sup>233</sup>. (40)  
 Timiro mṛgatṛṣṇā vā svapno<sup>234</sup> bandhyāprasūyatam<sup>235</sup>,  
 alātacakradhūmo vā yad ahaṃ dṛṣṭavān iha. (41)  
 Atha vā dharmatā<sup>236</sup> hy eṣā dharmāṇām<sup>237</sup> cittagocare<sup>238</sup>,  
 na ca bālābubudhyante mohitā<sup>239</sup> viśvakalpanaiḥ<sup>240</sup>. (42)  
 Na dṛṣṭā<sup>241</sup> na ca dṛṣṭavyaṃ<sup>242</sup> na vācya<sup>243</sup> nāpi<sup>244</sup> vācakaḥ<sup>245</sup>,  
 anyatra hi vikalpo'yaṃ<sup>246</sup> buddhadharmākṛtisthitiḥ<sup>247</sup>. (43)

---

<sup>228</sup> T2, Pa2: *yakṣā* T3: *yakṣaḥ*

<sup>229</sup> Nj, Vd, T4, NG1: *sthitam*

<sup>230</sup> A, C, I: *cinteti*

<sup>231</sup> Nj, Vd: *śrutam*

<sup>232</sup> NG1: *saugatā*

<sup>233</sup> NG1: *gandharvva*\* K: *śanditam*

<sup>234</sup> [*svapne*. chii]

<sup>235</sup> NG1: *taṃ*

<sup>236</sup> NG1: *dharmmatā*

<sup>237</sup> NG1: *dharmmāṇām*

<sup>238</sup> NG1: *gocara*

<sup>239</sup> NG1: *mohitāḥ*

<sup>240</sup> [*hi svakalpanaiḥ*. chii, tib.]

<sup>241</sup> T3, Pa2: *draṣṭā*

<sup>242</sup> T2: *dṛṣṭavyaṃ*

<sup>243</sup> Pa1: *vācya* Pa2: *vācye*

<sup>244</sup> NG1: *nāpi*

<sup>245</sup> Pa1: *vācakaḥ* T3: *vācakaṃ* Pa2: *vācakam*

<sup>246</sup> T1, T2, T3, T4, Pa1, Pa2: *yaṃ*

<sup>247</sup> NG1: *buddhadharmmā*\* Pa1: *buddhadharmākṛtisthiti* Pa2: *buddhadharmākṛtiḥ sthitiḥ* T3: *buddhadharmākṛtiḥ sthita*

Ye paśyanti<sup>248</sup> yathādr̥ṣṭam<sup>249</sup> na te paśyanti<sup>250</sup> nāyakam<sup>251</sup>,  
 pravṛttivikalpaś<sup>252</sup> ca yadā buddham na paśyati,  
 apravṛttibhave buddhaḥ sambuddho yadi paśyati". (44)

---

<sup>248</sup> Pa1: *paśyaṃti*

<sup>249</sup> T1, T2, T4, Pa1: *dr̥ṣṭān* NG1: *°dr̥ṣṭanr te*

<sup>250</sup> Pa1: *paśyaṃti*

<sup>251</sup> Nj, Vd, Pa2: *nāyakam*

<sup>252</sup> T2, Pa2: *pravṛttivikalpaś* In other manuscripts, *apravṛtti°*.  
 em: *pravṛtti°*, see Supplementary Notes 3 of the p. 80.



## 1.3.2.1. Critical Edition of the Tibetan Translation

*'Phags pa Lang-kar gshegs pa'i theg pa chen po'i mdo*

| rgya gar skad du| ārya Lang ka a ba tā ra ma hā yā na sū tra| bod skad  
du| 'phags pa Lang kar  
gshegs pa'i<sup>1</sup> thegs pa chen po'i mdo| bam po dang po|

[Tib.1.P.Ngu60b7] sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la  
phyag 'tshal lo||

[Tib.2.1.P.Ngu60b8] 'di skad bdag gis thos pa dus gcig na| bcom ldan 'das  
Lang ka'i grong rdal na| rgya mtsho'i<sup>2</sup> ri Ma la ya'i rthe mo rin po che'i rigs  
dang| me tog sna tshogs kyis brgyan pa la<sup>3</sup> dge slong gi dge 'dun chen po  
dang| byang chub sems dpa' sems dpa' chen po dang<sup>4</sup>| sangs rgyas kyi  
zhing sna tshogs pa<sup>5</sup> nas<sup>6</sup> 'dus pa<sup>7</sup> ting nge 'dzhin dang| dbang dang<sup>8</sup> stobs  
dang| mngon par shes pa du mas rnam par rol pa| byang chub sems dpa'  
blo gros chen po la sogs pa dag sangs rgyas thams cad kyi phyag gi<sup>9</sup> dbang  
bskur<sup>10</sup> bas dbang bskur<sup>11</sup> ba bdag gi sems snang ba'i spyod yul yongs su  
shes pa'i don la mkhas pa| sems cen gyi sems sna tshogs dang| gzugs

---

<sup>1</sup> TM: om. 'i

<sup>2</sup> Bm: *mtsho*

<sup>3</sup> TM: add. |

<sup>4</sup> C, L, N, P, Y.: add. *dang*

<sup>5</sup> Bm, P, TM: om. *pa*

<sup>6</sup> P: add. |

<sup>7</sup> TM: add. 'i

<sup>8</sup> N, TM: add. |

<sup>9</sup> TM: *gis*

<sup>10</sup> P, Y: *skur*

<sup>11</sup> P, Y: *skur*

dang<sup>12</sup> tshul dang| 'dul ba rnam pa tha dad pa'i cha byad 'chang ba| chos lnga dang| rang bzhin dang| rnam par shes pa dang| bdag med pa gnyis khong du chud par rtogs pa'i byang chub sems dpa' dag gi tshogs chen po dang |thabs cig<sup>13</sup> tu bzhugs te,|<sup>14</sup>

[Tib.2.2.P.Ngu61a4] yang de'i tshe<sup>15</sup> na bcom ldan 'das rgya mtsho'i klu'i rgyal po'i gnas nas<sup>16</sup> zhag bdun lon te byung nas<sup>17</sup> brgya byin dang| tshang pa dang| klu'i bu mo bye ba du mas bsu ba dang<sup>18</sup> Lang ka'i ri Ma la ya la gzigs te| Lang ka'i grong rdal gyi ri<sup>19</sup> Ma la ya'i rtse mo 'dir<sup>20</sup> sngon gyi de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams kyis kyang 'phags pa so so<sup>21</sup> rang gis<sup>22</sup> rig pa'i ye shes<sup>23</sup> rtog ge'i lta ba mu stegs can dang| nyan thos dang<sup>24</sup> rang sangs rgyas dang| 'phags pa'i yul ma yin pa de dag gis bsgoms pa'i chos bstan te| ngas kyang<sup>25</sup> de nyid du gnod sbyin gyi bdag po 'bod 'grogs<sup>26</sup> kyi phyir de nyid bsnyad cing chos bstan to snyam nas<sup>27</sup> 'dzum pa mdzad do||

---

<sup>12</sup> P, TM: add. |

<sup>13</sup> L, P, Y, Z: *gcig*

<sup>14</sup> TM: om. */thabs'te, /*

<sup>15</sup> L, N, P, Y: add. *de*

<sup>16</sup> TM: gnas|, om. *nas*

<sup>17</sup> TM: add. |

<sup>18</sup> TM: add. |

<sup>19</sup> TM: om. *ri*

<sup>20</sup> TM: om. |

<sup>21</sup> K: *sor*

<sup>22</sup> Bm: *gi*

<sup>23</sup> TM: om. |

<sup>24</sup> TM: add. |

<sup>25</sup> TM: om. *kyang*

<sup>26</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>27</sup> TM: add. |

de<sup>28</sup> nas gnod sbyin gyi bdag po 'bod 'grogs<sup>29</sup> de bzhin gshegs pa'i byin  
 gyi<sup>30</sup> ralbs<sup>31</sup> kyis<sup>32</sup> bcom ldan 'das rgya mtsho'i klu'i rgyal po'i gnas nas  
 byung ste<sup>33</sup> brgya byin dang<sup>34</sup> tshangs pa dang| klu'i bu mo brgya stong du  
 mas bskor cing mdun du bdar nas<sup>35</sup> rgya mtsho'i rlabs la gzigs te| kun gzhi  
 rnam par shes pa'i<sup>36</sup> rgya mtsho la 'jug pa'i rnam par shes pa yul gyi rlung  
 gis bskyod cing<sup>37</sup> de dag gi sems 'byung bar gzigs te| ched du brjod pa ched  
 du brjod pa mdzad dol||<sup>38</sup> zhes thos nas|

[Tib.2.3.P.Ngu61b2] bdag song la bcom ldan 'das la gsol ba btab ste<sup>39</sup> Lang  
kar gshegs par bya' o|| de ni bdag dang<sup>40</sup> lha dang<sup>41</sup> mi rnams la yun ring  
 po'i don dang| phan pa dang<sup>42</sup> bde bar 'gyur rol|| snyam ste|

de nas gnod sbyin gyi bdag po 'bod 'grogs<sup>43</sup> 'khor dang bcas pa me tog gi  
 gzhal med khang du zhugs<sup>44</sup> nas| bcom ldan 'das ga la ba der song ste<sup>45</sup>  
 phyin pa dang|<sup>46</sup> 'khor dang bcas te<sup>47</sup> gzhal med khang nas babs nas<sup>48</sup> rnga

---

<sup>28</sup> TM: before *de*, add |

<sup>29</sup> N, Z: *sgrogs* TM: add. |

<sup>30</sup> P, Y: *gyis*

<sup>31</sup> C, L: *brlabs*

<sup>32</sup> TM: add. |

<sup>33</sup> TM: *te*

<sup>34</sup> TM: add. |

<sup>35</sup> TM: add. |

<sup>36</sup> TM: om. *pa'i*

<sup>37</sup> TM: add. |

<sup>38</sup> TM: om. |

<sup>39</sup> TM: add. |

<sup>40</sup> TM: add. |

<sup>41</sup> TM: add. |

<sup>42</sup> TM: add. |

<sup>43</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>44</sup> K: *bzhugs*

<sup>45</sup> TM: add. |

<sup>46</sup> TM: om. |

dang sil snyan rnams rab tu bsgrags<sup>49</sup> te| bcom ldan 'das la lan gsum<sup>50</sup>  
bskor ba byas nas<sup>51</sup> pi bang<sup>52</sup> gi khog pa in dra nī<sup>53</sup> la la<sup>54</sup> bai dūrya<sup>55</sup> dang|  
mu sa ras spras pa| gos ngur ka pri yang ku 'dra ba<sup>56</sup> rin thang med pas  
tshar<sup>57</sup> du dpyangs<sup>58</sup> te| 'khor rnams rab tu dag' bar byas nas<sup>59</sup> | glu<sup>60</sup>  
dbyangs ṣaḍḍā<sup>61</sup> dang| ri ṣa<sup>62</sup> bha dang| gān<sup>63</sup> dha ra dang| dhai bā<sup>64</sup> ta  
dang| nī ṣā da<sup>65</sup> dang| ma<sup>66</sup> dhya<sup>67</sup> ma dang| kau<sup>68</sup> shi ka dang| glu'i  
dbyangs mang por sbyar ba la sogs pa dang ldan zhing| rgyud rjes su  
'thun<sup>69</sup> pa dang<sup>70</sup> pi bang<sup>71</sup> gi nang du chud par byas te<sup>72</sup> tshigs su bcad pa'i

---

47 TM: add. |

48 TM: add. |

49 L, N, P, Y: *sgrogs*

50 TM: add. *du*

51 TM: add. |

52 Z, TM: *wang*

53 P, Y: *nī*

54 TM: om. *la*

55 C, N, Z: *dūrya*

56 TM: add. |

57 TM: *mchan*

58 C, L, N, P, Y, TM: *spyangs*

59 TM: *te*

60 K, Y: *klu' i*

61 C, N, Y: *sha rdza* TM: *sha rdza* L, P: *brjod* Z: *ṣa rdzā*

62 Y, TM: *sha*

63 K, P, Y: *gan* TM: *'ga' lan*

64 Y: *bhe bā* C, L, N: *dhai ba* TM: *dhe bā*

65 Y, TM: *nī sha dha* P: *nī ṣa dha* K: *nī ṣā da*

66 P, Y: *mad*

67 TM: *dha ya*

68 Y, TM: *ke* P: *kai*

69 N, Z: *mithun*

70 TM: add. |

71 Z, TM: *wang*

72 TM: add. |

dbyangs kyis glu blangs pa|

[Tib.3.1.P.Ngu61b6] sems kyi rang bzhin tshul nyid chos kyi gter| |bdag med lta<sup>73</sup> dang rnam bral dri ma med| |so so rang rig shes pa<sup>74</sup> ston pa yin| |chos tshul mgon po 'dir yang bshad du gsol| (1)

|dge ba 'i chos kyis yang dag bsags<sup>75</sup> pa'i sku| |bde gshegs 'phrul pas<sup>76</sup> sprul pa ston pa ste| |<sup>77</sup>so so rang rig rtogs pa 'i chos dgyes<sup>78</sup> pa| |thub pa deng<sup>79</sup> ni Lang kar gshegs pa 'i dus| (2)

|Lang ka'di na<sup>80</sup> sngon gyi rgyal ba dang| |de yi sras rnam gzug mang 'chang ba<sup>81</sup> bzhugs| |mgon po 'dir ni chos rab bshad du gsol| |gzugs mang<sup>82</sup> ldan pa'i gnod sbyin kun kyang nyan| (3)

[Tib.3.2.P.Ngu62a1] |de ltar Lang ka'i bdag po<sup>83</sup> 'bod 'grogs<sup>84</sup> kyis<sup>85</sup> to ta<sup>86</sup> ka'i<sup>87</sup> rgyud du glu blangs nas<sup>88</sup> yang tshigs su bcad pa'i dbyangs kyis glu blangs pa|

---

<sup>73</sup> TM: *lha*

<sup>74</sup> Bm: *yes shes*

<sup>75</sup> P, Y: *bstsags*

<sup>76</sup> Bm: *sphrul pa*

<sup>77</sup> TM: om. |

<sup>78</sup> Bm: *bgyis*

<sup>79</sup> TM: *de*

<sup>80</sup> Bm, P, TM: *ni*

<sup>81</sup> P: *'chad ba* N: *'chang ba* Bm: *'chang bar*

<sup>82</sup> P, Pc, Y: *med*

<sup>83</sup> TM: add. *'i*

<sup>84</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>85</sup> TM: add. |

<sup>86</sup> TM: *ta*

<sup>87</sup> TM: *yi*

<sup>88</sup> TM.add. |

bcom ldan 'das ni dgung<sup>89</sup> bdun te| |chu srin gnas kyi rgya mtsho yi| |rgya  
mtsho'i<sup>90</sup> dbang po'i gnas nas ni| |slad du byung ste 'gram na<sup>91</sup> bzhugs| (4)  
|sangas rgyas bzhugs ma thag tu yang| |ne tso Sa ra nas brgyan<sup>92</sup> pa'i<sup>93</sup>|  
|gnod sbyin rnam pa mang po dang| |'bod 'grogs<sup>94</sup> lha mo lhan cig tu| (5)  
|mgon po gang na bzhugs pa yi| |lam der 'phrul gyis song nas ni| |me tog  
bzhon las babs nas kyang| |de bzhin gshegs la mchod phyag 'tsal| |rgyal  
ba'i dbang pos byin bralbs nas| |de la mgon par mi<sup>95</sup> bsnyad pa| (6)  
|bdag ni 'bod 'grogs mgrin<sup>96</sup> bcu ste| |srin po'i dbang po 'dir mchis so||  
grong rdal 'di na su gnas dang| |bdag gi Lang ka rjes su zung<sup>97</sup>| (7)  
|rdzogs pa'i sangs rgyas snga mas kyang| |so so rang rig spyod yul ni| |rtse  
mo rin chen brgyan pa yi| |gron rdal dbus su rab tu bshad| (8)

[Tib.3.3.P.Ngu62a5] | bcom ldan gyis kyang de nyid kyi| |rtse mo rin chen  
brgyan pa<sup>98</sup> la| |rgyal ba'i sras kyi<sup>99</sup> yongs bskor cing| |rdul med chos ni  
bshad du gsol| |gang rnam Lang kar gnas pa dang| |bdag cag de ring  
nyan par 'tshal| (9)

|bshad pa'i tshul las rnam grol ba| |so so rang rig spyod yul te| |Lang kar  
gshegs pa'i mdo sde<sup>100</sup> ni| |sangas rgyas snga mas gsungs pa 'o|| (10)  
rgyal ba'i sras kyi yongs bskor cing| |sngon gyi sangs rgyas dag gis kyang|

---

<sup>89</sup> Y, P: *dgun*

<sup>90</sup> Y: *mtsho yi* P: *mtsho' yi*

<sup>91</sup> TM: *du*

<sup>92</sup> K: *brgyan pa*

<sup>93</sup> P: *pa yi*

<sup>94</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>95</sup> Y, P, TM: *ming*

<sup>96</sup> Y, P: *'grogs 'grin* N, Z: *sgrogs mgrin*

<sup>97</sup> N: *gzung* Z, TM: *bzung*

<sup>98</sup> TM: *ba*

<sup>99</sup> K: *kyi*

<sup>100</sup> TM: *pa'i spyod yul*

|mdo sde 'di ni bshad par dran| |bcom ldan 'das<sup>101</sup> kyis<sup>102</sup> bshad du gsol|  
(11)

|ma 'ongs dus na 'byung ba yi| |sangs rgyas sangs rgyas sras dag kyang|  
|'phrul gyi tshul te 'di<sup>103</sup> nyid ni| |rtse mo rin chen brgyan pa la| |gnod  
sbyin rnams la thugs brtse<sup>104</sup> phyir| |'dren<sup>105</sup> pa rnams ni ston par 'gyur|  
(12)

|'phrul gyi lang ka'i grong rdal 'di<sup>106</sup>| |mdangs dag' rin chen sna tshogs dang|  
|thel sdings rdo sdengs<sup>107</sup> dga' ba dang| |rin chen dra ba'i bla res<sup>108</sup> brgyan|  
(13)

|rnal 'byor nyes dang rnam bral ba| |so so rang rig sems pa yi| |bcom ldan  
'di na<sup>109</sup> gnod sbyin dag| |sangs rgyas snga mas mdzad srung ba| |theg  
chen tshul la dad pa yi<sup>110</sup>| |mngon par zhen cing gzhan 'dzud pa| (14)

[Tib.3.4.P.Ngu62b2] |gnod sbyin mo dang gnod sbyin bu| |theg chen rtogs  
par 'tshal ba mchis| |Lang ka ma<sup>111</sup> la ya yi rir| |ston pa sangs rgyas  
gshegs su gsol| (15)

|bum pa rna la sogs pa rnams| |srin po<sup>112</sup> grong rdal gnas pa dag| |theg pa  
che la rton<sup>113</sup> pa rnams| |so so rang rig nyan par 'tshal| (16)

|sangs rgyas rnams la bgyi ba bgyis| |da ltar na yang shin tu bgyid| |bdag

---

<sup>101</sup> TM: om. 'das

<sup>102</sup> TM: add. *kyang*

<sup>103</sup> K: *de*

<sup>104</sup> TM: add. 'i

<sup>105</sup> P: *bden*

<sup>106</sup> Y, L, P, N, C: *ni*

<sup>107</sup> Y, P: *sdengs* Z: *steng* TM: *stengs*

<sup>108</sup> N, Z: *bres*

<sup>109</sup> TM: *ni*

<sup>110</sup> Y, P, TM: *yis*

<sup>111</sup> TM: *mā*

<sup>112</sup> TM: add. 'i

<sup>113</sup> Y, P, TM: *ston*

la rjes su thegs brtse'i phyir| Lang kar sras dang bcas te gshegs| (17)  
 |khyim dang lha mo tshogs rnams dang| |se mo do yang sna tshogs dang|  
 |mdangs dga' a sho ka yi<sup>114</sup> tshal| |thub pa chen po bzhes su gsol| (18)  
 |bdag ni rgyal sras de dag dang| |sangs rgyas rnams kyi bka' bzhin bgyid|  
 |bdag gis mi dbul gcig ma mchis| |thub pa chen po thugs brtser<sup>115</sup> dgongs|  
 (19)

[Tib.3.5.P.Ngu62b5] | de yi<sup>116</sup> tshig de gsan pa dang<sup>117</sup> | |srid gsum dbang  
 pos gsungs pa ni| |gnod sbyin dbang po 'das pa yi| |mgon pos<sup>118</sup> rin chen ri  
 bo la| (20)

|so so rang rig chos rnams bstan| |khyod nyid la yang thugs brtser dgongs|  
 |rin chen rnam brgyan ri bo la| |ma 'ongs rnams kyang gsung bar<sup>119</sup> 'gyur|  
 (21)

|'di ni rnal 'byor ldan pa dag | |mthong ba'i chos la spyod pa'i gnas| |nga<sup>120</sup>  
 dang sras rnams dag gis kyang| |gnod sbyin dbang po<sup>121</sup> brtser dgongs  
 rigs| (22)

|bcom ldan gnang nas mi gsung bar| |zhi ba'i blo yis rnam par bzhugs|  
 |'bod 'grogs<sup>122</sup> kyis ni phul ba yi<sup>123</sup>| |me tog bzhon<sup>124</sup> par bzhugs<sup>125</sup> par gyur|  
 (23)

---

<sup>114</sup> Y, L, P: *ka'i*

<sup>115</sup> TM: *rjer*

<sup>116</sup> Y: *de'i*

<sup>117</sup> Y, L, P, N, C, Z: *na*

<sup>118</sup> L, N, C, Z: *po*

<sup>119</sup> K: *gsungs par*

<sup>120</sup> Y, P: *gang*

<sup>121</sup> TM: *por*

<sup>122</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>123</sup> TM: *yis*

<sup>124</sup> L, N: *gzhon* P: *gzhen*

<sup>125</sup> TM: *zhugs*



|de nyid du ni 'bod 'grogs<sup>126</sup> dang| |'jigs med rgyal sras gzhan yang ste| |lha  
mos bzhad gad<sup>127</sup> rol mo yis| |rab tu mchod cing grong du gshegs| (24)  
|dga' ba'i grong rdal der gshegs nas| |mchod pa rab tu yang brnyes so|  
|'bod 'grogs<sup>128</sup> la sogs gnod sbyin gyi| |sde dang gnod sbyin mos kyang  
mchod| (25)

[Tib.3.6.P.Ngu63a1] |gnod sbyin bu mo gnod sbyin bus| |rin po che yi<sup>129</sup>  
dra bas mchod| |'bod 'grogs kyis<sup>130</sup> kyang sangs rgyas kyi| |rin chen  
brgyan pa'i se mo do| |rgyal ba'i sras dang rgyal ba yi<sup>131</sup>| |stod kyi yan lag  
rnams la btags| (26)

|bcom ldan rgyal sras mkhas bcas pa| |mchod pa phul ba bzhes nas ni| |so  
so rang rig spyod yul gyi| |chos ni rnam par bstan pa mdzad| (27)  
|gnod sbyin sde dang 'bod 'grogs<sup>132</sup> kyis| |smra ba rnams kyi mchog mchod  
de<sup>133</sup>| |blo gros chen po<sup>134</sup> rab mchod cing| |gsol ba yang dang yang 'debs  
pa| (28)

|khyod ni sangs rgyas thams cad la| |rang rig spyod yul 'dri ba yin| |'di ni<sup>135</sup>  
bdag dang gnod sbyin dang| |rgyal ba'i sras rnams nyan pa mchis| |khyod  
la rgyal sras mkhas pa dang| |gnod sbyin rnams kyang gsol ba 'debs| (29)  
|smra ba'i nang na smra chen khyod| |rnal 'byor can gyi 'ng rnal 'byor  
zhugs| |khyod la gus par<sup>136</sup> gsol 'debs kyis<sup>137</sup>| (30)

---

<sup>126</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>127</sup> Y, L, P, N, C: *gzhan dag*

<sup>128</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>129</sup> Y: *che'i*

<sup>130</sup> N, Z: *sgrogs kyis* C: *'grogs kyi*

<sup>131</sup> Y: *ba'i*

<sup>132</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>133</sup> K: *do*

<sup>134</sup> TM: *pos*

<sup>135</sup> Y, L, P, N, C, Z: *na*

<sup>136</sup> TM: *pas*

l'jigs pa med pas tshul dris shig |rang rgyal nyan thos rnam dang ni| |mu  
stegs nyes las rnam par grol| |so so rang rig chos nyid gtshang| |sangs  
rgyas sa ni thob byed pa 'o<sup>138</sup>|| (31)

[Tib.3.7.P.Ngu63a5] rtse mo rin chen brgyan pa dang| |gzhan yang lha  
rdzas<sup>139</sup> rnam kyī ni| |rin chen bye bas brgyan pa dag<sup>140</sup> | |bcom ldan 'das  
kyis der sprul te| (32)

|mgon po<sup>141</sup> ri bo re re la| |nyid kyī sku ni rab tu bstan| |'bod 'grog<sup>142</sup> gnod  
sbyin de dag na| |re re la ni rnam par gnas| (33)

|thams cad 'khor ni ma bri bar| |re re na yang<sup>143</sup> shin tu<sup>144</sup> snang| |de na<sup>145</sup>  
zhing rnam thams cad dang| |gang yang de na 'dren pa dang| (34)

|de na srin po'i dbang po rnam| |gang dag Lang kar gnas pa 'ng snang| |de  
dang 'gran pa'i Lang ka dang| (35)

|a sho ka yi<sup>146</sup> tshal gzhan dang| |nags tshal bzang po de dag kyang| |rgyal  
ba yis ni mgon par sprul| |mgon po ri rnam re re la| |blo gros chen pos  
bskul ba dang| (36)

|so so rang rig rjod<sup>147</sup> pa yis| |chos ni gnod sbyin rnam la bstan| |stong  
phrag brgya pa'i mdo sde dag |ri bo la ni ma lus bshad| (37)

---

<sup>137</sup> Z: *kyi*

<sup>138</sup> TM: om. 'o

<sup>139</sup> Y, P: *rdzes*

<sup>140</sup> K: *dang*

<sup>141</sup> Y, P, N, TM: *pos*

<sup>142</sup> N, Z: *sgrog*s

<sup>143</sup> Y, P: *na'ng* TM: *re re yang*

<sup>144</sup> C: *du*

<sup>145</sup> TM: *nas*

<sup>146</sup> Y, L, P, C: *ka'i*

<sup>147</sup> Y, P, N, Z: *brjod*

[Tib.3.8.P.Ngu63b1] | ston pa dang ni rgyal sras rnams| |de nyid<sup>148</sup> du yang  
mi snang gyur| |gnod sbyin 'bod 'grogs<sup>149</sup> bdag gis<sup>150</sup> lus| |khyim na gnas  
par<sup>151</sup> mthong ba dang| (38)

|bsams pa 'di go ji<sup>152</sup> zhig snyam| |gang gis bshad de su yis thos| |ci zhig  
mthong gi<sup>153</sup> gang gis mthong| (39)

|grong khyer de dag gang du song| |sangs rgyas de dag zhing de rnams|  
|rin chen nags<sup>154</sup> bzang<sup>155</sup> de ga re| |'di na<sup>156</sup> sgyu ma 'am<sup>157</sup> rmi lam rol<sup>158</sup>|  
|dri za'i grong<sup>159</sup> zhes bsgrags pa 'ma| (40)

|rab rib<sup>160</sup> yin nas<sup>161</sup> smig rgyu<sup>162</sup> 'am| |rmi lam mo sham<sup>163</sup> bu byung ngam|  
|bdag gis 'dir ni gang mthong ba| |mgal me bskor tam du ba 'ama| (41)

|'on te sems kyi spyod yul la| |chos rnams kyi ni chos nyid dam| (42)

|lta<sup>164</sup> ba med cing blta ba 'ang med| |smra med smra bar bya med na|  
|rang gi rtog pas myos pa yi| |byis pa rnams kyis mi she so|| gzhan du  
rnam par rtog pa 'di| |sangs rgyas dang ni chos ltar gnas| (43)

|ji ltar mthong bzhin su lta ba| |de dag 'dren pa mi mthong ngo|| rnam par

---

<sup>148</sup> K: *ni*

<sup>149</sup> N, Z: *sgrogs*

<sup>150</sup> Y, P, TM: *gi*

<sup>151</sup> TM: *pa*

<sup>152</sup> Y, P: *go ci*    Z: *ko ji*

<sup>153</sup> Y, P, Z: *ge*

<sup>154</sup> TM: *na* ·

<sup>155</sup> Y, L, P: *bzangs*

<sup>156</sup> P, K, TM: *ni*

<sup>157</sup> N, Z: *ma'ng*

<sup>158</sup> Y, L, P, N, C: *rong*

<sup>159</sup> TM: add. *khyer*

<sup>160</sup> Y: *rim*

<sup>161</sup> K: *rnam*

<sup>162</sup> Y: *mig rgyu*    L, C: *smig sgyu*    P: *mig sgyu*

<sup>163</sup> Z, TM: *gsham*

<sup>164</sup> TM: *blta*

rtog pa mi 'jug cing| |gang tshe sangs rgyas mi mthong la| |'jug med sangs  
rgyas yin par ni| |gal te mthong na de sangs rgyas| (44)

## 1.3.3.1. Critical Edition of the Chinese Translation

## 入楞伽經

{入楞伽經卷第一

元魏天竺三藏<sup>1</sup>菩提留支<sup>2</sup>譯請佛品第一}{<sup>3</sup>[Ch.1.T.16.514c7,Zh.17.623b4] 歸命大智<sup>4</sup>海毘<sup>5</sup>盧遮那佛。

[Ch.2.1.T.16.514c7,Zh.17.623b4] 如是我聞：一時，婆伽婆住大海畔<sup>6</sup>摩羅耶山頂上楞伽城中，彼山種種 寶性所成。諸寶間錯 光明赫炎<sup>7</sup>，如百千日照曜金山。復有無量花園，香樹皆寶香林，微風吹擊 搖枝動葉，百千妙香一時流布，百千妙音 一時俱發。重巖屈曲處處皆有仙堂、靈室、龕窟，無數衆寶所成。內外明徹 日月光暉 不能復現，皆是古昔諸仙、賢、聖，思如實法得道之處，與大比丘僧及大菩薩衆，皆從種種他方佛土俱來集會，是諸菩薩具足無量自在三昧神通之力 奮迅遊化，五<sup>8</sup>法、自性、識、二<sup>9</sup>種無我究竟通達。大慧菩薩摩訶薩而爲上首，一切諸佛手灌其頂 而授佛位。自心爲境善解其義，種種衆生種種心色，隨種種心種種異念，無量度門隨所應度 隨所應見 而爲普現。

---

1 資，磧，普，南，徑，清，宮：三藏法師

2 資，宮，宋：流支；磧，普，南：留支第三

3 金剛：only {入楞伽經請佛品第一□□□卷一}

4 資，磧，普，南，徑，清，宮：智慧

5 ...

6 資，宋：毘

7 宮：焰

8 Before 五，add 善知，except 麗。

9 Before 二，add 識，except 麗。

## 1.3.3.2. Critical Edition of the Chinese Translation

## 大乘入楞伽經

大乘入楞伽經卷第一大周于闐國三藏法師實叉難陀奉 勅譯羅婆那王勸請品第一<sup>10</sup>

[Ch.2.1.T.16.587b15,Zh.17.733c18] 如是我聞：一時佛住大海濱摩羅耶山頂楞伽城中，與大比丘衆及大菩薩衆俱。其諸菩薩摩訶薩悉已通達五法、三性、諸識、無我，善知境界 自心現義，遊戲無量自在三昧<sup>11</sup>神通諸力，隨衆生心 現種種形，方便調伏，一切諸佛 手灌其頂，皆從種種 諸佛國土而來此會。大慧菩薩摩訶薩爲其上首。

[Ch.2.2.T.514c23,Zh.17.622c1] 爾時，婆伽婆於大海龍王宮說法，滿七日已度<sup>12</sup>至南<sup>13</sup>岸，時有無量那由他釋、梵天王、諸龍王等，無邊大衆悉皆隨從向海南岸。爾時，婆伽婆遙望觀察摩羅耶山楞伽城，光顏舒悅 如動金山，熙怡微笑 而作是言：“過去諸佛・應・正遍知，於彼摩羅耶山頂上楞伽城中，說自內身<sup>14</sup>聖智證法，離於一切邪見覺觀，非諸外道、聲聞、辟支佛等修行境界，我亦應彼摩羅耶山楞伽城中，爲羅婆那夜叉王上首 說於此法”。

爾時，羅婆那夜叉王<sup>15</sup>以佛神力 聞如來聲。時婆伽婆離海龍王宮度<sup>16</sup>大海已，與諸那由他無量釋、梵天王、諸龍王等圍遶恭敬。爾時，如來

<sup>10</sup> Except 金，麗，大，大乘入楞伽經羅婆那王勸請品第一。石：大唐天后代于闐三藏實叉難陀奉制譯；資，磧，宮，宋：大唐三藏實叉難陀譯；南，徑，清，明：唐于闐國三藏沙門實叉難陀奉制譯；普：大唐于天闐國三藏實叉難陀第四譯

<sup>11</sup> c, s: 摩地

<sup>12</sup> 麗，大，A: 度 In other manuscripts, 渡。

<sup>13</sup> 金剛：add 海 before 南。

<sup>14</sup> 金剛：說自內・聖智證法

<sup>15</sup> Except 石，王諸。

<sup>16</sup> 金剛：渡

觀察衆生阿梨耶識大海水波，爲諸境界猛風吹動，轉識波浪 隨緣而起。爾時，羅婆那夜叉王而自歎言<sup>17</sup>：

[Ch.2.2.T.16.587b22,Zh.17.734a2] 爾時，世尊於海龍王宮<sup>18</sup>說法，過七日已從大海出。有無量億梵、釋、護世諸天、龍等，奉迎於佛。爾時，如來舉目觀見摩羅耶山楞伽大城，即便微笑而作是言：“昔諸如來、應、正等覺皆於此城 說自所得 聖智證法，非諸外道臆度、邪見及以二乘修行境界。我今亦當爲羅婆那王開示此法”。

爾時，羅婆那夜叉王以佛神力 聞佛言音，遙知如來從龍宮出，梵釋、護世天、龍圍遶，見海波浪，觀其衆會藏識<sup>20</sup>大海境界風動轉識浪起，發歡喜心，於其城中 高聲唱言：

[Ch.2.3.T.515a8,Zh.17.622c18] “我應請如來入楞伽城，令我長夜於天人中，與諸人，天 得大利益快得安樂”。爾時，楞伽城主羅婆那夜叉王與諸眷屬乘花宮殿 至如來所，與諸眷屬從宮殿下遶佛三匝，以種種伎樂 樂於如來。所持樂器皆是大青因陀羅寶而用<sup>21</sup>造作，大毘琉璃、瑪瑙諸寶 以爲間錯<sup>22</sup>，無價色衣 以用纏裹，以梵聲等無量種音，歌歎如來一切功德，而說偈言：

[Ch.2.3.T.16.587c4,Zh.17.734a14] “我當詣佛 請入此城，令我及與諸天世人，於長夜中 得大饒益”。作是語已，即與眷屬乘花宮殿 往世尊所。到已，下殿右遶三匝，作衆伎樂 供養如來。所持樂器皆是大青因陀羅寶、琉璃等寶 以爲間錯，無價上衣而用纏裹，其聲美妙 音節相和，於中說偈而讚佛曰：

<sup>17</sup> 金剛：而自歎…

<sup>18</sup> 二：om. 宮

<sup>19</sup> c, s: 藥

<sup>20</sup> イ, s: 識藏 口：藏

<sup>21</sup> 金剛：而…造作

<sup>22</sup> 金剛：以爲間…

[Ch.3.1.T.515a17,Zh.17.623a5] “心具於法藏，離無我見垢，世尊說諸行，內心所知法。(1)<sup>23</sup>

白法得佛身，內身所證法，化身示化身，時到入楞伽。(2)<sup>24</sup>

今此楞伽城，過去無量佛，及諸佛子等，無量身受用。(3)<sup>25</sup>

世尊若說法，無量諸夜叉，能現無量身，欲聞說法聲”。(4)<sup>26</sup>

[Ch.3.1.T.16.587c10,Zh.17.734a22] “心自性法藏，無我離見垢，證智之所知，願佛爲宣說。(1)<sup>27</sup>

善法集爲身，證智常安樂，變化自在者，願入楞伽城。(2)<sup>28</sup>

過去佛菩薩，皆曾住此城，此諸夜叉衆，一心願聽法”。(3)<sup>30</sup>

[Ch.3.2.T.515a25,Zh.17.623a11] 爾時，羅婆那楞伽王以都吒迦種種妙聲，歌歎如來諸功德已，復更以伽他<sup>32</sup>妙聲 歌歎如來，而說偈言：

“如來於七日，大海惡獸中，渡海至<sup>33</sup>彼岸，出已即便住。(5)

羅婆那王共，妻子、夜叉等，及無量眷屬，大智諸大臣，(6)

叔迦、婆羅那，如是等天<sup>34</sup>衆，各各悉皆現，無量諸神通，(7)

乘妙花宮殿，俱來到佛所，到已下花殿，禮拜供養佛。(8)

<sup>23</sup> A: om. (1)

<sup>24</sup> A: om. (2)

<sup>25</sup> A: om. (3)

<sup>26</sup> A: om. (4)

<sup>27</sup> ラ: om. (1)

<sup>28</sup> ラ: om. (2)

<sup>29</sup> イ，ヘ: 葉

<sup>30</sup> ラ: om. (3)

<sup>31</sup> 宮: 陀

<sup>32</sup> 資，磧，普，南，徑，清，宮: 陀

<sup>33</sup> 資，磧，普，南，徑，清，宮: 到

<sup>34</sup> 資，磧，普，南，徑，清，宮: 大



依佛住持力，即於如來前，自說己名字，我十頭羅刹。(9)  
願垂哀愍我，及此城衆生，受此楞伽城，摩羅耶寶山。(10)  
過去無量佛，於此楞伽城，種種寶山上，說身所證法。(11)  
如來亦應爾，於此寶山中，同諸過去佛，亦說如是法。(12)

[Ch.3.2.T.16.587c16,Zh.17.734b3] 爾時，羅婆那楞伽王以都陀迦音 歌讚佛已，復以歌聲而說頌言：

“世尊於七日，住摩竭海中，然後出龍宮，安詳昇此岸。(4)  
我與諸姝女，及夜叉眷屬，輸迦、娑剌那，衆中聰慧者。(5)  
悉以其神力，往詣如來所，各下花宮殿，禮敬世所尊。(6)  
復以佛威神，對佛稱己名，我是羅刹王，十首羅婆那。(7)  
今來詣佛所，願佛攝受我，及楞伽城中，所有諸衆生。(8)  
過去無量佛，咸昇寶山頂，住楞伽城中，說自所證法。(9)

[Ch.3.3.T.515b15,Zh.17.623b1] 願共諸佛子，說此清淨法，我及楞伽衆，咸皆欲聽聞。(13)

入楞伽經典，過去佛讚歎，內身智境界，離所說名字。(14)  
我念過去世，無量諸如來，諸佛子圍遶，說此修多羅。(15)  
如來於今日，亦應爲我等，及諸一切衆，說此甚深法。(16)  
未來諸世尊，及諸佛子等，於此寶山上，亦說此深法。(17)  
今此楞伽城，微妙過天宮，牆壁非土石，諸寶羅網覆。(18)  
此諸夜叉等，已於過去佛，修行離諸過，畢竟住大乘。(19)  
內心善思惟，如實念相應，願佛憐愍故，爲諸夜叉說。(20)

[Ch.3.3.T.16.588a1,Zh.17.734b13] 世尊亦應爾，住彼寶嚴山，菩薩衆圍遶，演說清淨法。(10)

我等於今日，及住楞伽衆，一心共欲聞，離言自證法。(11)  
我念去來世，所有無量佛，菩薩共圍遶，演說楞伽經。(12)  
此入楞伽典，昔佛所稱讚，願佛同往尊，亦爲衆開演。(13)

請佛爲哀愍，無量夜叉衆，入彼寶嚴城，說此妙法門。(14)  
 此妙楞伽城，種種寶嚴飾，牆壁非土石，羅網悉珍寶。(15)  
 此諸夜叉衆，昔曾供養佛，修行離諸過，證知<sup>35</sup>常明了。(16)

[Ch.3.4.T.515c2,Zh.17.623b12] 願佛、天、人、師，入摩羅耶山，夜叉及妻子，欲得摩訶衍。(21)

甕耳等羅刹，亦住此城中，曾供養過去，無量億諸佛。(22)  
 今復願供養，現在大法王，欲聞內心行，欲得摩訶衍。(23)  
 願佛憐愍我，及諸夜叉衆，共諸佛子等，入此楞伽城。(24)  
 我所有宮殿，妻子及眷屬，寶冠、諸瓔珞，種種莊嚴具，(25)  
阿舒迦園林，種種皆可樂，及所乘花殿，施佛及大衆。(26)  
 我於如來所，無有不捨物，願大牟尼尊，哀愍我受用。(27)  
 我及諸佛子，受佛所說法，願佛垂哀愍，爲我受用說。(28)

[Ch.3.4.T.16.588a15,Zh.17.734b22] 夜叉男女等，渴仰於大乘，自信摩訶衍，亦樂令他住<sup>36</sup>。(17)

惟<sup>37</sup>願無上尊，爲諸羅刹衆，甕耳等眷屬，往詣楞伽城。(18)  
 我於去來今，勤供養諸佛，願聞自證法，究竟大乘道。(19)  
 願佛哀愍我，及諸夜叉衆，共諸佛子等，入此楞伽城。(20)  
 我宮殿姝女，及以諸瓔珞，可愛無憂園，願佛哀納受。(21)  
 我於佛菩薩，無有不捨物，乃至身給侍，惟<sup>38</sup>願哀納受”。(22)

[Ch.3.5.T.515c18,Zh.17.623b23] 爾時三界尊，聞夜叉請已，即爲夜叉說，過去、未來佛。(29)

<sup>35</sup> 石：智

<sup>36</sup> 南，徑，清，明：信

<sup>37</sup> 宮：唯

<sup>38</sup> 宮：唯

夜叉過去佛，此勝寶山中，憐愍夜叉故，說內身證法。(30)  
 未來佛亦爾，於此寶山中，爲諸夜叉等，亦說此深法。(31)  
 夜叉此寶山，如實修行人，現見法行人，乃能住此處。(32)  
 夜叉今告汝，我及諸佛子，憐愍汝等故，受汝施請說。(33)  
 如來略答竟，寂靜默然住，羅婆那羅刹，奉佛花宮殿。(34)  
 如來及佛子，受已即皆乘，羅婆那夜叉，亦自乘華殿。(35)  
 以諸姝女樂，樂佛到彼城，到彼妙城已，羅婆那夜叉，(36)  
 及其<sup>39</sup>夜叉妻，夜叉男女等，更持勝供具，種種皆微妙，(37)  
 供養於如來，及諸佛子等，諸佛及菩薩，皆受彼供養。(38)  
羅婆那等衆<sup>40</sup>，供養說法者，觀察所說法，內身證境界。(39)

[Ch.3.5.T.16.588a27,Zh.17.734c8] 爾時，世尊聞是語已，即告之言：“夜叉王，過去世中 諸大導師，咸哀愍汝 受汝勸請，詣寶山中 說自證法，未來諸佛 亦復如是。此是修行甚深觀行現法樂者之所住處。我及諸菩薩哀愍汝 故受汝所請”。作是語已 默然而住。

時羅婆那王即以所乘 妙花宮殿 奉施於佛，佛坐其上。王及諸菩薩前後導從，無量姝女 歌詠讚歎，供養於佛 往詣彼城。到彼城已，羅婆那王及諸眷屬，復作種種上妙供養。

[Ch.3.6.T.516a11,Zh.17.623c14] 供養大慧士，數數而請言，大士能問佛，內身行境界。(40)

我與夜叉衆，及諸佛子等，一切諸聽者，咸請仁者問。(41)  
 大士說法勝，修行亦最勝，我尊重大士，請問佛勝行。(42)  
 離諸外道邊，亦離二乘過，說內法清淨，究竟如來地。(43)

[Ch.3.6.T.16.588b7,Zh.17.734c18] 夜叉衆中童男童女，以寶羅網 供養於佛，

<sup>39</sup> 資，磧，普，南，徑，清，宮：諸

<sup>40</sup> 資，磧，普，南：界

羅婆那王施寶瓔珞奉佛菩薩，以掛<sup>41</sup>其頸。爾時，世尊及諸菩薩受供養已，各爲略說自證境界甚深之法。時羅婆那王并其眷屬，復更供養大慧菩薩，而勸請言：

“我今請<sup>42</sup>大士，奉問於世尊，一切諸如來，自證智境界。(23)

我與夜叉衆，及此諸菩薩，一心願欲聞，是故咸勸請。(24)

汝是修行者，言論中最勝，是故生尊敬，勸汝請問法。(25)

自證清淨法，究竟入佛地，離外道二乘，一切諸過失”。(26)

[Ch.3.7.T.516a19,Zh.17.623b20] 爾時佛神力，復化作山城，崔嵬百千相，嚴飾對須彌。(44)

無量億花園，皆是衆寶林，香氣廣流布，芬<sup>43</sup>馥未曾聞。(45)

一一寶山中，皆示現佛身，亦有羅婆那，夜叉衆等住。(46)

十方佛國土，及於諸佛身，佛子夜叉王，皆來集彼山。(47)

而此楞伽城，所有諸衆等，皆悉見自身，入化楞伽中。(48)

如來神力作，亦同彼楞伽，諸山及園林，寶莊嚴亦爾。(49)

一一山中佛，皆有大智<sup>44</sup>問，如來悉爲說，內身所證法。(50)

出百千妙聲，說此經法已，佛及諸佛子，一切隱不現。(51)

[Ch. 3.7. T. 16.588b20, Zh. 17.735a8] 爾時，世尊以神通力，於彼山中復更化作無量寶山，悉以諸天百千萬億妙寶嚴飾，一一山上 皆現佛身，一一佛前皆有羅婆那王及其衆會。十方所有一切國土 皆於中現。一一國中 悉有如來。一一佛前 咸有羅婆那王并其眷屬。楞伽大城阿輪迦園，如是莊嚴 等無有異。一一皆有大慧菩薩 而興請問，佛爲開示自證智境，以百千妙<sup>45</sup>音說此經已。

41 宮：挂

42 em: 請

43 資，宮，宋：芥

44 資，磧，普，南，徑，清，宮：慧

45 口，二：種

[Ch.3.8.T.516b6,Zh.17.624a7] 羅婆那夜叉，忽然見自身，在己本宮殿，更不見餘物。(52)

而作是思惟，向見者誰作，說法者爲誰，是誰而聽聞。(53)  
 我所見何法，而有此等事，彼諸佛國土，及諸如來身，(54)  
 如此諸妙事，今皆何處去，爲是夢所憶，爲是幻所作。(55)  
 爲是實城邑，爲乾闥婆城，爲是翳妄見，爲是陽炎起。(56)  
 爲夢石女生，爲我見火輪，爲見火輪烟，我所見云何。(57)  
 復自深思惟，諸法體如是，唯自心境界，內心能證知。(58)  
 而諸凡夫等，無明所覆障，虛妄心分別，而不能覺知。(59)  
 能見及所見，一切不可得，說者及所說，如是等亦無。(60)  
 佛法真實體，非有亦非無，法相恒如是，唯自心分別。(61)  
 如見<sup>46</sup>物爲實，彼人不見佛，不住分別心，亦不能見佛。(62)  
 不見有諸行，如是名爲佛，若能如是見，彼人見如來。(63)  
 智者如是觀，一切諸境界，轉身得妙身，是即<sup>47</sup>佛菩提”。(64)

[Ch. 3.8. T. 16.588b28, Zh. 17.735a17] 佛及諸菩薩皆於空<sup>48</sup>中隱而不現。羅婆那王唯自見身住本宮中，作是思惟：“向者是誰？誰聽其說？所見何物？是誰能見？佛及國城衆寶山林，如是等物今何所在？爲夢所作？爲幻所成？爲復猶如乾闥婆城？爲翳所見？爲炎所惑？爲如夢中石女生子？爲如<sup>49</sup>煙焰旋火輪耶？”復更思惟：一切諸法性皆如是，唯是自心分別境界，凡夫迷惑不能解了。無有能見亦無所見。無有能說亦無所說。見佛聞法皆是分別。如向所見不能見佛。不起分別是則能見”。

<sup>46</sup> 金：是

<sup>47</sup> 磧，普，南，徑，清：即是

<sup>48</sup> 石，資，磧，南，清：空

<sup>49</sup> 石：爲如

## 1.3.4.1. Translation into Classical Japanese

## 入楞伽經

## 入楞伽經卷第一

元魏天竺三藏 菩提留支 譯

請佛品第一

[訓読文.1.] <sup>ヴァイローチャナ</sup>大智海毘盧遮那佛に歸命し奉る。

[訓読文.2.1.] 是の如く我れ聞けり。一時、<sup>バガヴァツト</sup>婆伽婆、<sup>ほとり</sup>大海の畔の<sup>マ</sup>摩羅<sup>ヤ</sup>耶山の頂上の<sup>ランカー</sup>楞伽城中に住したまえり。彼の山、種種の寶性の成ずる所なり。諸寶は、間錯して、光明は、<sup>かくえん</sup>赫炎し、百千の日は、金山を照曜するが如し。復、無量の花園あり。香樹は、皆寶香林にして、微風の吹撃が、枝を搖がし葉を動かせば、百千の妙香一時に流布し、百千の妙音一時に俱發せり。重巖屈曲し、處處に<sup>あまね</sup>皆<sup>がんくつ</sup>仙の堂、靈室、<sup>ビク・サンガ</sup>龕窟あり。無數の衆寶の成ずる所なり。内外明徹し、日月の光暉も復現ずる能はず。皆是れ古昔の諸仙、賢、聖、如實の法を思いて道を得たる處なり。大比丘 僧 及び大菩薩衆と、皆種種他方の佛土より俱に來たりて集會す。是の諸の菩薩、無量の自在三昧神通の力を具足し、奮迅遊化し、五法、自性、識、二種の無我とに究竟して通達せり。<sup>マハーマテイ</sup>大 慧 菩薩摩訶薩を上首と爲して、一切の諸佛、手づから其の頂に灌ぎて佛位を授けたまえり。自心を境と爲して善く其の義を解す。種種の衆生の種種の心色は、種種の心、種種の異念に隨う。無量の度門、應に度すべき所に隨い、應に見るべき所に隨いて、爲に普ねく現ず。

## 1.3.4.2. Translation into Classical Japanese

## 大乘入楞伽經

## 大乘入楞伽經卷第一

大周于闐國三藏法師

實叉難陀奉 勅譯

## 羅婆那王勸請品第一

[訓読文.2.1.] 是の如く我れ聞けり。一時、佛、大海濱の摩羅耶山の頂、楞伽城中に、大比丘衆及び大菩薩衆と俱に住したまえり。其の諸の菩薩摩訶薩、悉く已に五法、三性、諸識、無我に通達し、善く境界を知り、自心の義を現わし、無量の自在三昧神通の諸力にて遊戲し、衆生の心に隨い、種種の形を現じて、方便し調伏したまい、一切の諸佛、手づから其の頂に灌ぎたまひ、皆種種なる諸の佛國土より此の會に來たり。大慧菩薩摩訶薩を其の上首と爲す。

[訓読文.2.2.] 爾の時、婆伽婆、大<sup>サーガラ・ナーガ・ラージャン</sup>海龍王の宮に於いて説法し、七日を満たし已わりて、度りて南岸に至りたまう。時に、無量那由他の<sup>帝釈天</sup>釋、梵天王、諸龍王等あり。無邊大衆、悉く皆隨從して海の南岸に向う。爾の時、婆伽婆、摩羅耶山の楞伽城を遙かに望みて觀察したまい、光顔舒悦して金山を動かすが如く、<sup>き</sup>熙怡微笑して、是の言を作し給へり。「過去の諸佛・<sup>應供</sup>應・正遍知、彼の摩羅耶山の頂上、楞伽城中に於いて、自内身の聖智證法を説きたまえり。一切の邪見覺觀を離れて、諸の外道、聲聞、辟支佛等の修行の境界には非ざりき。我も亦應に彼の摩羅耶山の楞伽城中にて、羅婆那夜叉王<sup>ラーグア・ナヤクシヤ</sup>上首の爲に此の法を説くべし」と。

爾の時、羅婆那夜叉王、佛の神力を以て如來の聲を聞きき。時に婆伽婆、海龍王宮を離して、大海を度り已りて、諸の那由他無量の釋、梵天<sup>ナユタ</sup>王、諸龍王等と與に圍遶、恭敬せられたまう。爾の時、如來、衆生の阿梨耶識<sup>アーラ</sup>の大海の水波が、諸の境界の猛風の爲に吹動せられて、轉識の波浪が、縁に隨いて起こることを觀察したまいぬ。爾の時、羅婆那夜叉王、自ら歎じて言さく。

[訓読文.2.2.] 爾の時、世尊、海龍王の宮に於いて法を説きて、七日を過ぎ已わりて、大海従り出でたまう。無量億の梵<sup>梵天</sup>、釋、護世の諸天、龍等ありて、佛を迎え奉りぬ。爾の時、如來、目を舉げて摩羅耶山の楞伽大城を觀見し、即便ち微笑して是の言を作したまえり。「昔諸の如來・應・正等

覺は、皆此の城に於いて、自ら得られる所の聖智證法を説きたまうも、諸の外道の臆度、邪見及び以て二乗の修行の境界には非ざりき。我も今、亦當に羅婆那王の爲に此の法を開示すべし」と。

爾の時、羅婆那夜叉王、佛の神力を以て佛の言音を聞きき。遙に如來、龍宮從り出でて、梵梵天、釋帝釈天、護世天、龍に圍遶せられたるを知りたまひ、海の波浪を見そなはして、其の衆會の藏識アーラヤの大海は境界の風動によりて轉識の浪の起こるを觀ぜたまひ、歡喜の心を發し、其の城中に於いて、高聲に唱えて言さく。

---

[訓読文.2.3.]「我れ應に如來の楞伽城に入りたまわんことを請ひ、我をして長夜に、天人の中に於いて、諸の人、天と與に、大利益を得、快く安樂を得せしむべし」と。爾の時、楞伽城主羅婆那夜叉王、諸の眷屬と與に花の宮殿に乗じて如來の所に至りて、諸の眷屬と與に、宮殿從り下りて佛を遶ること三匝そうし、種種の伎樂を以て如來を樂しましめ奉る。持す所の樂器、皆是れ大青因陀羅寶だいしやういんだらほうを用いて造作せり。大毘琉璃、瑪瑙の諸寶、以て間錯を爲して、無價の色衣、以て用いて纏裹す。梵聲等の無量の種音を以て、如來の一切功德を歌歎し、偈を説いて言さく。

[訓読文.2.3.]「我、當に佛に詣で、此の城に入りたまわんことを請ひて、我れ及び諸天世人と與に長夜の中に於いて、大饒益を得せしむべし」と。是の語を作し已わりて、即ち眷屬と與に花の宮殿に乗りて世尊の所に往きき。到り已わりて殿を下り、右に遶ること三匝し、衆の伎樂を作して如來を供養しぬ。持する所の樂器、皆な是れ大青因陀羅寶によりており、琉璃等の寶、以て間錯を爲して、無價の上衣を用いて纏裹し、其の聲、美妙なる音節と相和する中に於いて、偈を説いて佛を讚じて曰く、

---

[訓読文.3.1.]「心に法藏を具して、無我にして見垢を離れる。世尊、諸行を説きたまえ、内心所知の法を。(1)



白法をもつて佛身を得たまひ、内身に所證の法あり、身を化して化身を示して、時到れり、楞伽に入りたまえ。(2)

今、此の楞伽城、過去に無量佛及び諸の佛子等、無量の身を受用したまいぬ。(3)

世尊、若し説法したまわば、無量の諸の<sup>ヤクシヤ</sup>夜叉、能く無量の身を現じて、説法のみ聲を聞かんと欲す」(4)

と。

[訓読文.3.1.]「心自性の法藏は、無我にして見垢を離る。證智の知しめす所を、願くば佛、宣説を爲したまえ。(1)

善法を集して身と爲し、智を證して常に安樂にして、變化自在なる者、願くば楞伽城に入りたまえ。(2)

過去の佛菩薩は、皆な曾て此の城に<sup>かつ</sup>住したまいき。此の諸の夜叉衆は、一心に法を聽かんことを願い奉る」(3)

と。

---

[訓読文.3.2.] 爾の時、羅婆那楞伽王、都吒迦<sup>トータカ</sup>の種種の妙聲を以て、如來の諸の功德を歌歎し已わり、復更に伽他<sup>ガータ</sup>の妙聲を以て、如來を歌歎し、偈を説いて言さく。

「如來、七日に於いて、大海の惡獸の中、海を渡りて彼岸に至り、出で已わりて即便ち住したまう。(5)

羅婆那王、妻子、夜叉等及び無量の眷屬、大智の諸大臣、(6)

叔迦<sup>シユカ</sup>、婆羅那<sup>サーラナ</sup>、是の如き等の天衆と共に。各各悉く皆、無量の諸の神通を現じて、(7)

妙花の宮殿に乗じて、俱に佛の所に來到し、到り已わりて花殿を下り、佛を禮拜供養し奉る。(8)

佛の住持の力に依りて、即ち如來のみ前に於いて、自ら己が名字を説く、我、十<sup>ダシヤ・グリーヴァ</sup>頭 羅刹なり。(9)

願はくば哀愍を我及び此の城の衆生とに垂れ、此の楞伽城、摩羅耶の寶山

を受けたまえ。(10)

過去に無量の佛、此の楞伽城の種種の寶山の上に於いて、身所證の法を説きたまえり。(11)

如來も亦應に爾るべし。此の寶山の中に於いて、諸の過去佛と同じく、亦是の如き法を説きたまえ。(12)

〔訓読文.3.2〕 爾の時、羅婆那楞伽王、都咤迦音<sup>トータカ</sup>を以て、佛を歌讃し已わり、復歌聲を以て頌を説きて言さく。

「世尊、七日に於いて、摩竭<sup>マカラ</sup>の海中に住し、然して後に龍宮を出で、安詳として此の岸に昇りたまう。(4)

我、諸の姝女及び夜叉の眷屬、輪迦<sup>シユカ</sup>、娑剌那<sup>サーラナ</sup>、衆中の聰慧なる者と與に。  
(5)

悉く其の神力を以て、如來の所に往詣し、各の花の宮殿を下りて、世の所の尊に禮敬しぬ。(6)

復佛の威神を以て、佛に對いて己が名を稱う。我、是れ羅刹王<sup>ラークシャヤ</sup>にして、  
十<sup>ダシヤ・グリーヴァ</sup>首の羅婆那なり。(7)

今、佛の所に來詣し奉る。願くは佛、我及び楞伽城中の所有諸<sup>あらゆる</sup>の衆生を攝受したまえ。(8)

過去の無量の佛、咸<sup>ことごと</sup>く寶山の頂に昇り、楞伽城中に住して、自ら所證の法を説きたまいき。(9)

---

〔訓読文.3.3〕 願はくば諸の佛子と共に、此の清淨法を説きたまえ。我れ及び楞伽衆、咸く皆聽聞せんと欲す。(13)

『入楞伽經典』は、過去佛の讚歎したまうところなり。内身智の境界にして、所説の名字を離るるなり。(14)

我れ念うに過去世に、無量の諸如來は、諸の佛子に圍遶せられて、此の修多羅<sup>スー</sup>を説きたまえり。(15)

如來、今日に於いて、亦應に我等及び諸の一切衆の爲に、此の甚深の法を説きたまうべし。(16)

未來の諸の世尊及び諸の佛子等も此の寶山の上に於いて、亦此の深法を説きたまわん。(17)

今、此の楞伽城、微妙にして天宮を過ぎたり。牆壁、土石に非ず。諸寶羅網によりて覆えり。(18)

此の諸の夜叉等、已に過去佛に於いて、修行して諸過を離れ、畢竟して大乗<sup>マハーヤーナ</sup>に住せり。(19)

内心に善く思惟して、如實に念相應す。願はくば佛、憐愍の故に、諸の夜叉の爲に説きたまえ。(20)

[訓読文.3.3.] 世尊も亦應に爾るべし。彼の寶嚴山に住し、菩薩衆に圍遶せられて、清淨の法を演説したまえ。(10)

我等、今日に於いて及び楞伽に住する衆、一心に共に離言自證の法を聞くを欲す。(11)

我、念うに去來の世に、所有無量の佛、菩薩、共に圍遶せられて、<sup>ランカー・アヴァターラ・スートラ</sup>『楞伽經』を演説したまいき。(12)

此の<sup>ランカー・アヴァターラ・スートラ</sup>『入楞伽典』、昔の佛の稱讃したまう所なり。願くは佛、往尊と同じく、亦衆の爲に開演したまえ。(13)

佛に請う、無量の夜叉衆を哀愍せん爲に、彼の寶嚴城に入り、此の妙なる法門を説きたまうことを。(14)

此の妙なる楞伽城、種種の寶もて嚴飾せられ、牆壁、土石に非ず、羅網、悉く珍寶なり。(15)

此の諸の夜叉衆、昔曾て佛を供養し奉り、修行して諸の過を離れ、證知にて常に明了なり。(16)

---

[訓読文.3.4.] 願はくば佛、天、人、師、摩羅耶山に入りたまえ。夜叉及び妻子、<sup>まかえん</sup>摩訶衍を得んと欲す。(21)

<sup>ように</sup>甕耳等の羅刹、亦此の城の中に住して、曾て過去の無量億の諸佛を供養し奉れり。(22)

今、復現在の大法王を供養せんと願ひ、内心の行を聞かんと欲し、摩訶衍

を得んと欲す。(23)

願はくば佛、我及び諸夜叉衆を憐愍し、諸の佛子等と共に此の楞伽城に入りたまえ。(24)

我が所有の宮殿、妻子及び眷屬、寶冠、諸瓔珞、種種の莊嚴具、(25)

アシヨウカ阿舒迦園林、種種皆楽しむべし。及び所乗の花殿を佛及び大衆に施し奉る。(26)

我、如來の所に於いて、捨てざる物あること無し。願はくば大牟尼尊、我を哀愍して受用したまえ。(27)

我れ及び諸の佛子、佛の所説の法を受けん。願はくば佛、哀愍を垂れて、我が爲に受用し説きたまえ。(28)

[訓読文.3.4.] 夜叉男女等、大乘を渴仰して、自ら摩訶衍を信じ、亦他をして信ぜしめんことを樂う。(17)

惟願くば無上尊よ、諸の羅刹衆、甕耳等の眷屬の爲に、楞伽城に往詣したまえ。(18)

我、去來今に於いて、勤めて諸佛を供養し奉り、自證の法を聞きて、大乘の道を究竟せんことを願う。(19)

願くば佛よ、我及び諸の夜叉衆を哀愍して、諸の佛子等と共に此の楞伽城に入りたまえ。(20)

我が宮殿、姝女及び以て諸の瓔珞、愛す可き無憂園を、願くば佛よ、哀れみ納受したまえ。(21)

我、佛菩薩に於いて、捨てざる物あること無し。乃至身の給侍を、惟願くば哀れみ納受したまえ」(22)

と。

---

[訓読文.3.5]. 爾の時、三界の尊、夜叉の請を聞き已わり、即ち夜叉の爲に説きたまう、過去、未來の佛を。(29)

夜叉よ、過去の佛、此の勝寶山の中にして夜叉を憐愍するが故に、内身の證法を説きたまへり。(30)

未來佛も亦爾なり。此の寶山の中に於いて、諸の夜叉等の爲に、亦此の深法を説きたまわん。(31)

夜叉よ、此の寶山、如實に修行する人、現見法行の人、乃し能く此の處に住す。(32)

夜叉よ、今汝に告ぐ。我れ及び諸の佛子、汝等を憐愍するが故に、汝の施と請とを受けて説かん。(33)

如來、略して答え竟わり、寂靜默然にして住したまい、羅婆羅刹、佛に花の宮殿を奉りぬ。(34)

如來及び佛子、受け已わりて即ち皆乗じ、羅婆那夜叉も亦自ら華殿に乗りたり。(35)

諸の姪女の樂を以て、佛を樂しましめて彼の城に到り、彼の妙城に到り已わりて、羅婆那夜叉、(36)

及び其の夜叉の妻、夜叉の男女等、更に勝れたる供具、種種の皆微妙なるを持ちて、(37)

如來及び諸の佛子等を供養し奉るに、諸佛及び菩薩、皆彼の供養を受けたまう。(38)

羅婆那等の衆、說法者を供養し、所説の法の内身證の境界を觀察す。(39)

[訓読文.3.5.] 爾の時、世尊、是語を聞き已わりて、即ち之に告げ言さく。「夜叉王よ、過去世中の諸の大導師、咸く汝を哀愍し、汝の勸請を受けて、寶山の中に詣り、自證の法を説きたまいき。未來の諸佛も亦復是の如くならむ。此れは是れ甚深の觀行を修行し、法樂を現ずる者の住する所の處なり。我及び諸の菩薩、汝を哀愍するが故に、汝の所請を受けむ」と。是の語を作し已わりて、默然して住したまう。

時に、羅婆那王、即ち乗る所の妙花の宮殿を以て、佛を奉施しければ、佛其上に坐したまう。王及び諸の菩薩、前後導從して、無量の姪女、歌詠讃歎し、佛を供養し奉り、彼の城に往詣しぬ。彼の城に到り已わりて、羅婆那王及び諸の眷屬、復種種なる上妙の供養を作せり。

〔訓読文.3.6.〕大慧士を供養し、數數<sup>さくさく</sup>請言すらく、大士よ、能く佛に問いたまえ、内身行の境界を（40）

我、夜叉衆及び諸の佛子等、一切の諸の聽者と咸く仁者の問われんことを請う。（41）

大士、説法に勝れ、修行も亦最勝なり。我、大士を尊重す。佛に勝行を請問したまえ。（42）

諸の外道の邊を離れ、亦二乗の過を離れ、内法の清淨なるを説きたまわば、如來地に究竟せん。（43）

〔訓読文.3.6.〕夜叉衆中の童男童女、寶の羅網を以て佛を供養し、羅婆那王は、寶の瓔珞を施し、佛菩薩に奉りて、以て其の頸に掛け奉りぬ。爾の時、世尊及び諸の菩薩、供養を受け已わりて、各の爲に自證境界の甚深の法を略説したまえり。

時に、羅婆那王并に其の眷屬、復更に大慧菩薩に供養し勸請して言さく。「我、今、大士を請して世尊に奉問せしむ、一切の諸の如來の自證智の境界を。（23）

我、夜叉衆及び此の諸の菩薩とが、一心に聞かんことを欲し願う。是の故に、咸く勸請す。（24）

汝は是れ修行者にして、言論中の最勝なり。是の故に、尊敬を生じ、汝に勧めて法を請問す。（25）

自證清淨の法、究竟して佛地に入り、外道二乗の一切の諸の過失を離る」（26）

と。

---

〔訓読文.3.7.〕爾の時、佛、神力によりて、復山城を化作したまう。崔嵬<sup>さいがい</sup>百千相にして、嚴飾なること須彌<sup>スメル</sup>に對す。（44）

無量億の花園、皆是れ衆寶の林にして、香氣、廣く流布して、芬馥<sup>ふんぷく</sup>たること未だ曾て聞かざるなり。（45）

一一の寶山の中に、皆佛身を示現し、亦羅婆那、夜叉衆等ありて住す。

(46)

十方の佛國土及び諸佛身、佛子夜叉王、皆來たりて彼の山に集る。(47)  
而して此の楞伽城の所有の諸の衆等も、皆悉く自身を見る。化の楞伽の中  
に入れるを。(48)

如來の神力の作も亦彼の楞伽に同じく、諸山及び園林、寶の莊嚴も亦爾な  
り。(49)

一一の山中の佛、皆大智ありて問うに、如來、悉く爲に内身の所證の法を  
説きたまう。(50)

百千の妙聲を出で、此の經法を説きたまうこと已わり、佛及び諸佛子、一  
切隠れて現ぜず。(51)

[訓読文.3.7.] 爾の時、世尊、神通力を以て彼の山中に於いて、復更に無  
量の寶山を化作し、悉く諸天の百千萬億の妙寶を以て嚴飾し、一一の山上  
に皆佛身を現じ、一一の佛前に皆羅婆那王及び其の衆會あり。十方の所有  
一切國土、皆中に於いて現ず。一一の國中に悉く如來あり。一一の佛前に  
咸く羅婆那王并に其の眷屬あり。楞伽大城、阿輸迦園、<sup>アシヨーカ</sup>是の如き莊嚴等は、  
異なることあること無し。一一に皆大慧菩薩ありて請問を興さば、佛、爲  
に自證智の境を開示するに、百千の妙音を以て此の經を説き已わる。

[訓読文.3.8.] 羅婆那夜叉、忽然として自身を見たり。己が本宮殿に在る  
を、更に餘物を見ず。(52)

而して是の思惟を作さく、向に見たるは誰か作せるや。說法者は、誰と爲  
すや。是れ誰が聽聞せるや。(53)

我が見し所は何の法なるや。而も此等の事ありし。彼の諸佛の國土及び諸  
の如來の身、(54)

此の如き諸の妙事、今皆何の處にか去れる。是れ夢に憶う所と爲さんや。

是れ幻の作す所と爲さんや。(55)

是れ實の城邑と爲さんや。<sup>ガンダルヴァ</sup>乾闥婆城と爲さんや。<sup>えいもう</sup>是れ翳妄の見と爲さんや。  
是れ陽炎の起と爲さんや。(56)

石女の生めるを夢と爲さんや。我れ火輪の見と爲さんや。火輪の烟の見と爲さんや。我が見し所は云何。(57)

復自ら深く思惟すらく、諸法の體は是の如し。唯自心の境界にして、内心に能く證知す。(58)

而も諸の凡夫等、無明の覆障せる所にして、虚妄心にして分別し、覺知すること能わず。(59)

能見及び所見は、一切不可得なり。説者及び所説は、是の如き等も亦無し。(60)

佛法の眞實の體は、有に非ず亦無に非ず。法相は、恒に是の如し。唯自心の分別のみ。(61)

如し物を見て實と爲さば、彼の人、佛を見ず。分別心に住せざるも、亦佛を見ること能わず。(62)

諸行有るを見ざる。是の如きを名づけて佛と爲す。若し能く是の如く見ば、彼の人如來を見る。(63)

智者は、是の如く觀ず。一切の諸の境界を。身を轉じて妙身を得。是れ即ち佛菩提なり」(64)

と。

[訓読文.3.8.] 佛及び諸の菩薩、皆空中に於いて、隠れて現じたまわず。羅婆那王、唯自ら身の本宮中に住するを見て、是れを思惟作さく。「向の者は、是れ誰ぞ。誰か其の説を聽きたる。見し所の何物が是れなるか。誰か能く見たる。佛及び國、城、衆寶山林を。是の如き等の物は、今、何所にか在る。夢の所作と爲さんか。幻の所成と爲さんか。復猶乾闥婆城の如しと爲さんか。翳の所見と爲さんか。炎の所惑と爲さんか。夢中の石女の子を生むが如しと爲さんか。煙焰の旋火輪の如しと爲さんか」と。復更に思惟すらく。「一切諸法の性は、皆な是の如く、唯是れ自心の分別の境界のみにして、凡夫、迷惑して、解了すること能わざるなり。能見あること無く亦所見無し。能説あること無く亦所説無し。佛を見、法を聞くこと皆是れ分別なり。向に見る所の如く佛を見ること能わず。分別を起こさざるは、是れ則ち能見なり」と。



## 1.4. 主要文献類

### 第一次資料：〔校訂テキスト・翻訳書・大藏經〕

1. サンスクリット語校訂テキストに関する資料（1.1.2.3、1.1.2.7.2.1、1.1.2.7.2.3、1.1.2.7.2.4 等）

- ・ I: Two parts (up to 144 of Nj) published by Sarat Chandra Das and Satis Chandra Acharya Vidyabhusana, at Darjeeling, India (1900, using in Nj edition).
- ・ Vidyabhushana, Satis Chandra. 1905. "Notes on the *Laṅkāvatāra Sūtra*". *Journal of the Royal Asiatic Society* 4.3 I: 831-837. [Two parts (up to 144 of Nj)]
- ・ Vidyabhushana, Satis Chandra. 1906. "Notes on the *Laṅkāvatāra-sūtra*". *Journal of the Royal Asiatic Society* 4.3 I: 159-164.
- ・ R: Some extracts found in Rajendralala Mitra's "*The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*"; 114.] (using in Nj's edition)
- ・ Vaidya, Paraśurāma Lakshmaṇa, ed. 1963. *Saddharmalaṅkāvatārasūtram* (Buddhist Sanskrit texts No. 3). Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- ・ Nj: 南條文雄校訂『梵文入楞伽經』（京都：大谷大学，1923；第二版 1956）
- ・ 若井信玄訳．1931．“世尊が錫蘭の首府ランカーを訪問し給ふ書”．大正大学々報第 11 輯．東京：大正大学出版部
- ・ Jikido Takasaki ed., *A Revised Edition of the Laṅkāvatāra-Sūtra, Kṣaṇika-Parivarta* (Tokyo, 1981)
- ・ Yadunātha Prasād Dubey ed., *The Saddharma Laṅkāvatārasūtra: vaipulya sūtra* (Varanasi: Bauddha Bharati, 2006)
- ・ 光寿会稿．1936．梵文邦訳入楞伽經．京都：光寿会本部．
- ・ 安井広済訳．1976．梵文和訳入楞伽經．京都：法蔵館．
- ・ 中村元編．1983．仏陀・大乘仏教集（仏教教育宝典 1）．東京：玉川大学出版部．
- ・ 常盤義伸訳．1994．『ランカーに入る』：梵文入楞伽經の全訳と研究（第

2 冊本文・研究). 京都: 花園大学国際禅学研究所.

- ・ 中村元. 2003. 『華嚴經』『楞伽經』(現代語訳大乘仏典 5). 東京: 東京書籍.
- ・ Daisetz Teitaro Suzuki. 1956. *The Lankavatara Sūtra: A Mahāyāna Text/Translated for the First Time from Original Sanskrit*. London: Routledge.
- ・ Golzio, Karl-Heinz tr. 1996. *Die makellose Wahrheit erschauen: Die Lehre von der höchsten. Bewusstheit und absoluten Erkenntnis: Das Lankavatara-Sutra*. München: Otto Wilhelm Barth.

## 2. チベット語校訂テキストに関する資料 (1.1.2.3.)

- ・ C: Co-ne edition of the tibetan versions of the Sūtra and the Vṛtti in the Library of Congress. (1721-1731)
- ・ D: sDe-dge edition of the texts in the Tohoku University Library, Ca56a1-191b7, No. 107. (1733)  
〔= The Tibetan Tripitaka = 西藏大藏經. 1991. Taipei, 台北: SMC Publishing, 南天書局.〕
- ・ K: Khu-re edition [ = Urga edition, Lokesh Chandra, ed. 1990-1994. New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan. ]
- ・ L: Li-thang edition. [ 理 (= 裏) 塘版, 1608-1621 ]
- ・ N: sNar-thang edition of the Vṛtti in the Tokyo University Library and two versions of the Sūtra in Sō-jiji (総持寺) [ = Lokesh Chandra, ed. 1998-2000. New Delhi: International Academy of Indian Culture. ] (1730-1732)
- ・ P: Peking edition, Ngu60b7-208b2; Vol. 29, 26-85, Catalogue & Indexed. D. T. Suzuki. No. 775.  
〔西藏大藏經研究會編. 1955-1961. 東京: 西藏大藏經研究會. 〕〔= 康熙版 (1684-1692)〕

- ・ Pc: Pelliot's collection (M, Lalou: Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale, 1, No. 106)
- ・ Bm: Tibetan version of the Sūtra in the British Museum. (cf. Index der Abteilung mDo des Handschriftlichen Kanjur im Britischen Museum; von L. D., Bernett. Asia Major Vol. 7, 1931)
- ・ TM: Stog Palace Manuscript (1700-1750) of the Tibetan Kanjur, Published by C. Namgyal Tarusergar Leh, Ladakh, 1980. (Vol. 76, No. 107, 305-709)
- ・ Y: gYung-lo edition. [永樂版, 1410]
- ・ Z: Zhol edition. [夏魯版]

### 3. 漢訳校訂テキストに関する資料 (1.1.2.3、1.1.2.7.1、1.1.2.7.2.2、1.1.2.7.2.5)

- ・ 金：金藏廣勝寺本.
- ・ 石：房山石經. [中国佛教協會, 中国佛教図書文物館編. 2000. 房山石經 (辽金刻經 10). 北京：華夏出版社.]
- ・ 資：資福藏.
- ・ 磧：磧砂藏. [易行 yixing 編. 2005. 磧砂大藏經 (Vol. 30-31). 北京：綫裝書局.] [≡・宋 (本)：南宋思溪版]
- ・ 普：普寧藏. [=・元 (本)]
- ・ 南：永樂南藏.
- ・ 徑：徑山藏. [≡・明 (本)：嘉興藏]
- ・ 清：清藏. [=新文豐出版股份有限公司編. 1991. 乾隆大藏經 (新編縮本, Vol. 35). 臺北：新文化印書館有限公司.]
- ・ 麗：高麗藏 (再彫版). [1959. 高麗大藏經 (入楞伽經：外五十部, Vol. 10). ソウル：東國大學校.]
- ・ 宮：宮内省図書寮書陵部本. [旧宋本 (東禪寺版 + 開元寺版)]
- ・ 大：大正新脩大藏經. [高楠順次郎編. 1989. 大正新脩大藏經 (Vol. 16. 經集部 3). 東京：大藏出版.]
- ・ 金剛：金剛寺一切經.
- ・ 北京図書館藏敦煌写經：実叉難陀 (七卷本)；イ：No. 339, ロ：No. 340,

- ハ：No. 341, ニ：No. 342, ヘ：No. 344, ラ：No. 360.
- ・ スタイン将来敦煌文書漢訳文献実叉難陀（七卷本）；c: No. 3945, s: No. 1074, t: No. 2920. 菩提流支訳（十卷本）；A: No. 937.
  - ・ 中華大藏經編輯局編. 1986. 中華大藏經（漢文部文 Vol. 17）. 北京：中華書局.
  - ・ 山上曹源訳. 1974. 国訳大藏經：經部第4巻（国民文庫刊行会編輯）. 東京：国民文庫刊行会.
  - ・ 三井昌史編. 1977. 昭和新纂國譯大藏經：楞伽經・首楞嚴經・圓覺經（經典部第7巻，昭和新纂國譯大藏經編輯部）. 東京：名著普及會.
  - ・ 常盤大定訳. 1934. 国訳一切經：印度撰述部經集部7. 東京：大東出版社.
  - ・ 高崎直道. 2006. 楞伽經. 東京：大蔵出版社.
  - ・ 頼永海訳. 2002. 楞伽經（中國佛教經典寶藏精選白話版，佛光經典叢書1166）. 三重（臺北縣）：佛光文化事業.
  - ・ 黄宝生译注. 2011. 入楞伽經：梵汉对勘（梵汉佛经对勘丛书）. 北京：中國社会科学出版社.
  - ・ Carré, Patrick tr. 2006. *Soutra de l'entrée à Lankā: Laṅkāvatārasutra / Traduit de la version chinoise de Shikshānanda* (Dashengrulengjiajing). Paris: Fayard.

第二次資料：〔参考文献・論文・辞書〕アルファベット順配列

- ・ Apte, Vaman Shivaram. 1998. *The Practical Sanskrit-English Dictionary (Revised and Enlarged Edition)*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- ・ 荒牧典俊訳. 1974. 大乘仏典第8巻十地經. 東京：中央公論社.
- ・ A. L. バシヤム；日野紹運・金沢篤・水野善文・石上和敬訳. 2004. バシヤムのインド百科. 東京：山喜房佛書林.
- ・ Buescher, Hartmut. 2008. *The Inception of Yogācāra-Vijñānavāda (Beiträge zur Kultur-und Geistesgeschichte Asiens Nr. 62, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische*

- Klasse. Sitzungsberichte, Band 776*). Wien: Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- ・ Bühler, Johann Georg. 2004. *Indian Paleography*. New Delhi: Munshiram Manoharlal.
  - ・ Kanjilal, Dileep Kumar. 1985. *Vimana in ancient India: Aeroplanes or Flying Machines in Ancient India*. Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.
  - ・ 張怡蓀主編. 1996. 藏漢大辭典（上，下）. 北京：民族出版社.
  - ・ Coomaraswamy, Ananda. Kentish. 1977. *Selected papers, traditional art, and symbolism*/edited by Roger Lipsey (*Bollingen series 89 Vol. 1*). Princeton, N. J.: Princeton University Press.
  - ・ Daisetz Teitaro Suzuki. 1975. *Studies in the Lankavatara sutra*. London: Routledge.
  - ・ 大蔵会編. 1989. 大蔵經：成立と変遷. 京都：百華苑.
  - ・ Deleanu, Florin. 2006. *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), annotated translation, and introductory study (Vol. I, II Studia philologica Buddhica Monograph Series XXa, b)*. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies.
  - ・ Deva, Bigamudre Chaitanya; 中川博志訳. 1994. インド音楽序説：An Introduction to Indian Music. 大阪：東方出版.
  - ・ Edgerton, Franklin. 2004. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary (Vol. I)*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
  - ・ Edgerton, Franklin. 2004. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary (Vol. II)*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
  - ・ 藤井教公訳. 2010. 現代語訳妙法蓮華經. 東京：アルヒーフ，すずさわ書店（発売）.
  - ・ 舟橋尚哉. 1971. “世親と楞伽經との前後関係”. 印度学仏教学研究 20-（1），321-326.
  - ・ 舟橋尚哉. 1972. “五法と三性について”. 印度学仏教学研究 21-（1），

371-376.

- ・賀世哲主编. 2003. 楞伽經畫卷（敦煌研究院主编敦煌石窟全集 11）. 香港：商務印書館.
- ・Goldman, Robert P. and Sutherland, Sally J, eds. 1996. *Sundarakāṇḍa/Introduction, Translation, and Annotation (The Rāmāyaṇa of Vālmiki: An Epic of Ancient India Vol. V)*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- ・Guruge, Ananda, W. P. 1991. *The Society of the Rāmāyaṇa*. New Delhi: Abhinav Publications.
- ・羽田野伯猷編，磯田熙文，密波羅圭之介，古坂紘一分担. 1993. 聖入楞伽經註／ヂニャーナシュリーバドラ著（チベット仏典研究叢書第4輯，チベット仏典研究会）. 京都：法蔵館.
- ・袴谷憲昭. 2001. 唯識思想論考. 東京：大蔵出版.
- ・伊吹敦. 2004. 禪の歴史. 京都：法蔵館.
- ・稲葉正就. 1986. チベット語古典文法學（増補版）. 京都：法蔵館.
- ・石井公成. 2001. “初期禪宗と『楞伽經』”. 駒沢短期大学研究紀要 29 (1), 235-255.
- ・Jäschke, Heinrich August. 1990. *A Tibetan-English Dictionary with Special Reference to the Prevailing Dialects: to which is added an English-Tibetan vocabulary*. 1990. London: St Edmundsbury Press.
- ・Jhalakikar, Bhīmācārya, Abhyamkar, Vāsudeva Śāstri. 1928. *Nyāyakośa: Or, Dictionary of Technical Terms of Indian Philosophy/Revised and Re-Edited (Bombay Sanskrit and Prakrit series No. XLIX)*. Poona: The Bhandarkar Oriental Research Institute.
- ・Jowita, Kramer. 2005. *Kategorien der Wirklichkeit im frühen Yogācāra: der Fünf-vastu-Abschnitt in der Vinīścayaśaṃgrahaṇī der Yogācārabhūmi (Contributions to Tibetan studies/edited by David P. Jackson Vol. 4)*. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- ・鍵主良敬，木村清孝編. 1991. 法蔵（人物中国の仏教）. 東京：大蔵出版.

- ・片山一良訳. 1998. パーリ仏典中部（マッジマニカーヤ）根本五十経篇 II. 東京：大蔵出版.
- ・片山一良訳. 2003. パーリ仏典長部（ディーガニカーヤ）戒蘊篇 I. 東京：大蔵出版.
- ・片山一良訳. 2006. パーリ仏典長部（ディーガニカーヤ）パーティカ篇 II. 東京：大蔵出版.
- ・上村勝彦訳. 2002. 原典訳マハーバーラタ 4. 東京：筑摩書房.
- ・上村勝彦. 2004. インド神話. 東京：東京書籍.
- ・金岡秀友. 2003. インド哲学史概説. 東京：佼成出版社.
- ・勝又俊教. 1961. 仏教における心識説の研究. 東京：山喜房佛書林.
- ・桂紹隆. 1998. インド人の論理学：問答法から帰納法へ. 東京：中央公論社.
- ・落合俊典研究代表. 2007. 金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究：研究成果報告書 第2分冊.
- ・Krishna Murthy, Konakondla. 1985. *Archaeology of Indian Musical Instruments*. Delhi: Sundeep Prakashan.
- ・久保田力. 1984. “『楞伽經』の形態的成立史論”. 東北印度学宗教学会論集 (11), 67-96.
- ・Kutumbiah, P; 幡井勉, 坂本守正訳. 1989. 古代インド医学. 東京：出版科学総合研究所, 研数広文館（発売）.
- ・松本史朗. 2001. 縁起と空：如来蔵思想批判. 東京：大蔵出版.
- ・松本史朗. 2004. 仏教思想論上. 東京：大蔵出版.
- ・南方熊楠. 1975. 南方熊楠全集 2. 東京：平凡社.
- ・水野弘元・中村元・平川彰・玉城康四郎責任編集. 2001. 仏典解題事典：新・仏典解題事典第2版. 東京：春秋社.
- ・水野弘元. 2004. 仏教要語の基礎知識. 東京：春秋社.
- ・Monier-Williams, Monier, Sir. 2001. *A Sanskrit-English Dictionary: Etymologically and Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European Languages. New Edition, greatly enlarged and improved by E. Leumann and C. Cappeler and other scholars.*

Ottawa: Laurier Books.

- ・長尾雅人，戸崎宏正訳．1992．大乘仏典（1 般若部経典）．東京：中央公論社．
- ・中村元監修・補註．1982．ジャータカ全集 8．東京：春秋社．
- ・中村元編．1988．図説佛教語大辞典．東京：東京書籍．
- ・中村元監修・補註．1989．ジャータカ全集 6．東京：春秋社．
- ・中村元訳．2003．ブツタ最後の旅：大パリニッバーナ経．東京：岩波文庫．
- ・中村元．2005．ヨーガとサーンキヤの思想（中村元選集決定版インド六派哲学I第24巻）．東京：春秋社．
- ・中村元．2010．広説佛教語大辞典縮刷版．東京：東京書籍．
- ・西田龍雄．1987．”チベット語の変遷と文字”．長野泰彦，立川武蔵編．チベットの言語と文化：北村甫教授退官記念論文集．東京：冬樹社．
- ・落合俊典研究代表．2007．金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究（研究成果報告書第2分冊）．東京．
- ・小川弘貫．1961．“楞伽經に於ける如来蔵思想”．印度学仏教学研究（17），213-216．
- ・定方晟．2009．須弥山と極楽：仏教の宇宙観．東京：講談社．
- ・榊亮三郎，西尾京雄編．梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集．1981．東京：国書刊行会．
- ・坂本幸男，岩本裕訳注．1981．法華經（下）．東京：岩波書店．
- ・桜部建．2002．俱舍論（佛典講座18）．東京：大蔵出版．
- ・Sarkar, Amal. 1987. A study on the Rāmāyaṇas. Calcutta: Rddhi India.
- ・佐々木章格．1987．“江戸期曹洞宗における楞嚴・楞伽の註釈について”．印度学仏教学研究 36-(1)，235-240．
- ・Schmithausen Lambert. 2007. “Some Philological Remarks on Chapter VIII of the *Laṅkāvatārasūtra*”. 仏典のテキスト学：データベースと日本古写経公開シンポジウム講演資料集／国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集．東京：国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会．



- ・ Shukla, R. K. 2003. *The Geography of the Rāmāyaṇa*. Delhi: Koshal Book Depot.
- ・ Silk, Jonathan A, ed. 2000. *Wisdom, Compassion, and the Search for Understanding: the Buddhist Studies Legacy of Gadjin M. Nagao*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- ・ 菅沼晃. 1971. “入楞伽經における五法説の研究”. 東洋学研究 (5), 203-221.
- ・ 菅沼晃. 1974. “入楞伽經の如来蔵説について”. 印度学仏教学研究 (44), 90-97.
- ・ 田上太秀, 石井修道編. 2008. 禅の思想辞典. 東京: 東京書籍.
- ・ 高田修. 1967. 佛像の起源. 東京: 岩波書店.
- ・ 高橋晃一. 2005. 『菩薩地』『真実義品』から「摂決摂分中菩薩地」への思想展開: vastu 概念を中心として (インド学仏教学叢書 12). 東京: 山喜房佛書林.
- ・ 高崎直道. 1996. “如来蔵とアーラヤ識”. 新装版 講座大乘仏教如来蔵思想第6巻／平川彰 [ほか] 編. 東京: 春秋社.
- ・ 高崎直道. 1997. 仏教入門. 東京: 東京大学出版会.
- ・ 高崎直道. 2009. 大乘起信論・楞伽經 (高崎直道著作集第8巻). 東京: 春秋社.
- ・ 高崎直道監修, 桂紹隆, 斉藤明, 下田正弘, 末木文美士編. 2012. 唯識と瑜伽行 (シリーズ大乘仏教 7). 東京: 春秋社.
- ・ 常盤義伸. 1979. “仏教經典『ランカーに入る』のサーンクヤ説批判”. 花園大学研究紀要 10: 117-146.
- ・ 常盤義伸. 1992. “『入楞伽經』序章の歴史的意義”. 花園大学研究紀要 24: 23-47.
- ・ 辻直四郎. 1980. インド文明の曙: ヴェーダとウパニシャッド. 東京: 岩波書店.
- ・ 上山大峻. 1990. 敦煌佛教の研究. 京都: 法蔵館.
- ・ 宇井伯寿, 鈴木宗忠, 金倉円照, 多田等観編. 1970. 西藏大蔵經総目録. 東京: 名著出版.

- ・ 宇井伯壽. 1990. 安慧護法唯識三十頌釋論. 東京：岩波書店.
- ・ 渡辺海旭. 1977. 壺月全集上巻：壺月全集刊行会編. 東京：大東出版社.
- ・ Whitney, William Dwight. 2003. *Sanskrit Grammar*. Mineola, N. Y: Dover Publications.
- ・ 荻原雲来編纂，辻直四郎協力，鈴木学術財団編. 2006. 漢訳対照梵和大辞典. 東京：講談社.
- ・ 八木信佳. 1971. “楞伽宗考”. 仏教学セミナー (14), 50-65.
- ・ 山口瑞鳳. 1998. チベット語文語文法. 東京：春秋社.
- ・ 山口瑞鳳. 1999. チベット下 (東洋叢書). 東京：東京大学出版会.
- ・ 横山紘一. 2002. 唯識思想入門. 東京：第三文明社.
- ・ 中華電子仏典協会. 2011. CBETA Chinese Electronic Tripiṭaka collection (電子仏典集成). 台北.

## Summary

### The *Rāvaṇādhyeṣanā-parivarta* of the *Laṅkāvatāra-sūtra*. A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan and Chinese) (Part I)

Motoyasu Okumura

For almost a century, the text of *The Laṅkāvatāra Sūtra* published by the Japanese scholar Bunyiu Nanjio (Kyoto: Otani University Press, 1<sup>st</sup> ed. 1923; 2<sup>nd</sup> ed. 1956) has been the standard edition for the study of this key Mahāyāna scripture. In spite of its numerous undeniable merits, the edition contains, however, its problematic readings. Furthermore, new manuscripts of the text have been discovered meanwhile. A new critical edition becomes, therefore, a desideratum. My current research project, part of which is published here, is dedicated to this end.

My paper, scheduled to be published in two instalments, contains a critical trilingual edition of the *Rāvaṇādhyeṣanā-parivarta*, the first chapter of the *Laṅkāvatāra-sūtra*: (1) Sanskrit text, which collates the readings of the manuscripts known to Nanjio as well as of the newly discovered manuscripts; (2) Tibetan text, collating several Canon editions; and (3) two Chinese translations, i.e. Bodhiruci's and Śikṣānanda's, for which likewise I consulted a few Chinese Tripiṭaka editions and manuscripts. (The other extant Chinese translation, Guṇabhadra's, lacks the *Rāvaṇādhyeṣanā-parivarta*.) The Chinese translations are also accompanied by the traditional Japanese *kundoku* renderings. My edition of the *Rāvaṇādhyeṣanā-parivarta* is preceded by an Introduction consisting of three parts:

- 1.1. is an overview of the main contributions dedicated to the scripture.
- 1.2. deals with the cultural background of the *Laṅkāvatāra-sūtra*,

focusing upon the *Rāmāyaṇa*, the famous Indian epic which seems to be presupposed by the narrative development of our text, mainly in its first chapter. The section also takes look at the *Rāmāyaṇa* in Buddhist literature in general.

1.3. represents a discussion of my editing conventions and main textual witnesses with the abbreviations used herein.

*Postgraduate Student,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*